上入道古窯

-大府市共和町上入道地内における工場建設に伴う発掘調査報告-

2018

大府市教育委員会株式会社アコード

上入道古窯

-大府市共和町上入道地内における工場建設に伴う発掘調査報告-

2018

大府市教育委員会株式会社アコード

巻頭図版1



調査地遠景(写真右奥が名古屋方面) 東から



調査地遠景(写真左の丘陵が尾張丘陵) 南から



SY01 床面検出状況(焼台が原位置を留める)北から

- 1. 本書は愛知県大府市共和町上入道地内に所在する上入道古窯(愛知県遺跡番号 440061)の発掘調査報告書である。
- 2. 発掘調査は民間工場建設事業に伴う事前調査として、大府市教育委員会大府市歴史民俗資料館学芸員 田中城久 監理のもと、民間の発掘調査会社である株式会社アコードが実施した。
- 3. 調査は平成 29 年 11 月 15 日から平成 30 年 2 月 28 日まで実施し、調査面積は 1,200㎡である。 調査記録と出土遺物の整理作業、報告書の編集は、現地調査終了後引き続き 平成 30 年 8 月まで行なった。
- 4. 調査で作成した図面の編集は西村匡広の指示のもと林貴光が行ない、出土遺物の整理作業や記録作成は、株式会社文化財サービスに委託して行なった。
- 5. 本調査の略号は「KND'17」とし、遺物取り上げカードや台帳類などの記述はこの名称で記載している。 また、遺物注記の遺跡名もこの「KND'17」という略号を用いた。
- 6. 熱残留磁化測定及び出土炭化材の放射性炭素年代測定、樹種同定は株式会社パレオ・ラボに委託した。 自然科学分析の結果については、論旨に影響しない範囲で成果報告書の語句等を加筆修正し、第5 章に掲載した。
- 7. 本調査に係る記録類や出土遺物は、全て台帳等に登録して収納しており、随時検索できる状態で大府市歴史民俗資料館にて保管している。
- 8. 本書の執筆は第1章第1節を田中、他を西村が行なった。なお編集は西村が担当した。
- 9. 現地調査、報告書の作成にあたって、下記の方々・機関から、様々な御指導、御助言、御支援を賜った。記して感謝申し上げます(敬称略)。

中野晴久 松田 訓 武部真木 石黒立人 小栗康寛 坂野俊哉 藤澤良祐 株式会社中日新聞社 株式会社ピーコンリアルエステート 株式会社協和設計 株式会社登栄組 愛知県教育委員会 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター 大府市文化財保護委員 島軒 満 中村 毅 稲垣耕作 福井露子 谷口真理子 田村和久 大倉 崇 吉川裕幸 門田哲侍 村崎和明 白樫 淳 後藤完二(順不同 敬称略)

凡例

- 1. 本書に記載された測量成果については、世界測地系に基づいている。図中のX・Y座標は国土座標 第VII系によるものであり、m単位で表記している。また、平面図の方位は座標北を示している。
- 2. 標高は東京湾平均海面(T.P.) に基づく。
- 3. 本報告書に使用した地図は、国土地理院発行(1/25,000地形図)を加筆したものである。
- 4. 本遺跡の土層・遺構埋土及び遺物胎土の色調は、小山正忠、竹原秀雄編著『新版標準土色帖』 2015 年版を基準とした。
- 5. 土質に関しては、粒子の大きさで区分し、小さいものから以下のとおりとした。 粘土→シルト質粘土→粘土質シルト→シルト→砂質シルト→シルト質極細粒砂→極細粒砂→細粒砂 →中粒砂→粗粒砂→礫砂→砂礫
- 6. 遺構平面図や断面図の縮尺は統一していないが、挿図ごとにスケールバーと縮尺を示している。
- 7. 本書に掲載した遺物には、「報告番号」として通し番号を付けた。本文に示した遺物番号や、挿図と図版に記載した遺物番号については、特に注記のない限り「報告番号」である。また、現地調査時には遺物の取り上げ単位ごとに「取上番号」を付しており、「報告番号」と「取上番号」との対照関係については、遺物一覧表(表3~15)に記載している。
- 8. 遺物実測図の縮尺については、1/4で示した。また、遺物実測図の断面は、白抜きで示した。

目 次

例言 · 凡例

第1章 調	査の経緯と経過
第1節	調査に至る経緯
第2節	調査の経過
第3節	調査体制
第2章 遺	貴跡の位置と環境
第1節	位置と地理的環境
第2節	歴史的環境
第3章 訓	周査の方法
第1節	調査地の地区割
第2節	発掘調査と記録の方法7
第4章 訓	周査の成果
第1節	調査の概要
第2節	調査区内の土層堆積状況 8
第3節	遺構
第4節	遺物
第5章 自	然科学分析の結果
第1節	上入道古窯の放射性炭素年代測定
第2節	上入道古窯の考古地磁気年代測定
第3節	上入道古窯出土炭化材の樹種同定 73
第6章 総	括

挿 図 目 次

第 1 図	大府市の位置	第 24 図	土坑群平面図
第 2 図	上入道古窯と周辺の遺跡分布図	第 25 図	土坑群断面図
第 3 図	調査前地形図	第 26 図	SP01 平面・断面図
第 4 図	調査区地区割図	第 27 図	器種分類図
第 5 図	確認調査トレンチ配置図	第 28 図	器種別径高指数グラフ(1)
第 6 図	基本層序断面模式図 A	第 29 図	器種別径高指数グラフ(2)
第 7 図	基本層序断面模式図 B	第30図	遺構別径高指数グラフ(1)
第 8 図	北東壁断面図	第31図	遺構別径高指数グラフ(2)
第 9 図	窯体部位名称・窯体内グリッド名称図	第 32 図	遺構別径高指数グラフ(3)
第 10 図	調查区全体平面図	第33図	遺構別径高指数グラフ(4)
第11図	SY01 完掘平面図	第34図	遺物実測図
第 12 図	SY01 最終操業面平面・断面図	第35図	遺物実測図
第 13 図	SY01 焼成室から燃焼室遺物出土状況図	第36図	遺物実測図
第 14 図	SY01 縦断面図	第37図	遺物実測図
第 15 図	SY01 横断面図 1	第 38 図	遺物実測図
第 16 図	SY01 床面下施設	第39図	遺物実測図
第 17 図	SY01 横断面図 2	第 40 図	遺物実測図
第 18 図	SY01 燃焼室から前庭部遺物出土状況図	第41図	遺物実測図
第 19 図	SY01 遺物出土状況図	第 42 図	遺物実測図
第 20 図	SX01 断面図	第43図	SY01・SX02 床面角度断面図
第 21 図	SX02 平面・断面図	第44図	SY01・SX02・SK01 平面図
第 22 図	SKO1 平面・断面図	第 45 図	SY01・SX02・SK01 復元図
第 23 図	SKO1 遺物出土状況図	第 46 図	SY01・SX02・SX03 断面模式図

挿 入 写 真 目 次

写真 1	調査前現況	(南から)

- 写真2 グリッド杭設置(南から)
- 写真3 作業状況(南東から)
- 写真 4 大府市文化財保護委員の視察(東から)
- 写真5 ラジコンヘリによる空撮
- 写真 6 調査参加者
- 写真7 SX01壁面被熱の状況(北から)
- 写真8 SK01 (東から)

写 真 図 版 目 次

		子	///X	- /\	
写真図版 1	1	調査区全景(垂直写真 北東上空から)	写真図版 10	1	SY01 床面下施設検出状況(北から
	2	SY01・SY02 全景(垂直写真 北東			近景)
		上空から)		2	SY01 床面下施設と床面の関係
写真図版 2	1	SY01 窯体検出状況(北から)			(南東から)
	2	SY01 床面検出状況(北から)		3	SY01 床面下炭化物出土状況
写真図版3	1	SY01 煙道部床面検出状況(北東から)			(東から)
	2	SY01 煙道部縦断面(北東から)		4	SY01 床面下炭化物出土状況
	3	SY01 煙道部横断面(北から)			(西から)
	4	SY01 煙道部床面検出状況(東から)		5	SY01 完掘状況(北から)
	5	SY01 煙道部天井(北から)	写真図版 11	1	SY01 煙道部から焼成室床面
写真図版 4	1	SY01 煙道部断面(北から)			断ち割り(北から)
	2	SY01 煙道部床面断ち割り(北東から)		2	SY01 煙道部から焼成室床面
	3	SY01 煙道部床面断ち割り(北から)			断ち割り(北東から)
	4	SY01 煙道部床面断ち割り(北東から)		3	SY01 焼成室壁面断ち割り(北西から)
	5	SY01 煙道部床面断ち割り(北東から)		4	SY01 焼成室壁面断ち割り(北東から)
写真図版 5	1	SY01 焼成室縦断面(北東から)		5	SY01 焼成室床面断ち割り(北西から)
	2	SY01 焼成室縦断面(北東から)		6	SY01 焼成室床面断ち割り(北東から)
	3	SY01 焼成室縦断面(北東から)		7	SY01 焼成室床面断ち割り(北東から)
	4	SY01 焼成室縦断面(北東から)		8	SY01 分焔柱付近断ち割り(東から)
	5	SY01 焼成室横断面(北から)	写真図版 12	1	SY01 通焔孔断面(北から)
写真図版 6	1	SY01 焼成室床面検出状況(南東から)		2	SY01 分焔柱(北から)
	2	SY01 焼成室床面検出状況(北西から)	写真図版 13	1	SY01 燃焼室断面(北から 奥が
写真図版7	1	SY01 焼成室床面検出状況(北から)			分焰柱)
	2	SY01 焼成室床面検出状況(北から)		2	SY01 燃焼室断面(北東から)
	3	SY01 分焔柱付近床面遺物出土状況	写真図版 14	1	SY01 燃焼室から前庭部炭化物層
		(北から)			上面遺物出土状況(北から)
	4	SY01 分焔柱付近床面遺物出土状況		2	SY01 燃燒室床面遺物出土状況
		(北から)			(西から)
	5	SY01 分焔柱付近の状況(南から	写真図版 15	1	SY01 分焔柱付近壁面断ち割り
		手前が焼成室)			(南東から)
写真図版8	1	SY01 焼成室横断面(北から 床面		2	SY01 分焔柱付近壁面断ち割り
		形成層)			(南西から)
	2	SY01 焼成室断面(北東から 床面		3	SY01 燃焼室壁面・床面断ち割り
		形成層)			(北西から)
	3	SY01 炭化物層検出状況(北から)		4	SY01 燃焼室壁面・床面断ち割り
	4	SY01 炭化物層検出状況(南東から)			(北東から)
	5	SY01 炭化物層横断面(北から)		5	SY01 燃焼室床面断ち割り(北東から)
	6	SY01 炭化物層横断面(北から)		6	SY01 燃焼室壁面断ち割り(北から)
	7	SY01 炭化物層縦断面(北東から)	写真図版 16	1	SY01 壁面(北東から)
	8	SY01 炭化物層縦断面(北東から)		2	SY01 壁面(南西から)
写真図版9	1	SY01 床面下施設検出状況(北から)		3	SY01 壁面(北西から)
	2	SY01 床面下施設検出状況(北から)		4	SY01 壁面(南東から)

写真図版 17	1	SY01 前庭部土坑群検出状況(北から)	写真図版 23	1 SX01 遺物出土状況(北西から)
	2	SY01 前庭部土坑群完掘状況		2 SX01 断面(北西から)
		(北西から)	写真図版 24	1 SK01 遺物出土状況(東から)
写真図版 18	1	SK06 断面(北から)		2 SK01 遺物出土状況(南から)
	2	SK06 断面(東から)		3 SK01 遺物出土状況(南東から)
	3	SK05 断面(北東から)		4 SK01 遺物出土状況(南東から)
	4	SK04 断面(北東から)		5 SK01 断面(北西から)
	5	SK03 断面(東から)	写真図版 25	1 SK01 完掘状況(東から)
	6	SK03 断面(北から)		2 SP01 検出状況(北東から)
	7	SK05 断面(東から)		3 SP01 断面(北東から)
	8	SKO4・SKO5 断面(北西から)		4 調査区北東壁断面(南から)
写真図版 19	1	SX02 完掘状況(北から)	写真図版 26	遺物写真 SY01 燃焼室床面
	2	SX02 焼成室完掘状況(北西から)	写真図版 27	遺物写真 SY01 燃焼室床面・SX01
写真図版 20	1	SX02 断面(北東から)	写真図版 28	遺物写真 SY01 7~9層・SX03・
	2	SX02 断面(北から)		SY01 33 層
写真図版 21	1	SX02 通焔孔断面(北から)	写真図版 29	遺物写真 SY01 33層・SY01 焼成
	2	SX02 分焔柱(北西から)		室床面
	3	SX02 分焔柱(南から)	写真図版 30	遺物写真 SY01 床面下施設
	4	SX02 断面(北東から)	写真図版 31	遺物写真 SY01 床面下施設
	5	SX02 断面(北東から)	写真図版 32	遺物写真 SKO2・SKO3・SKO4・SKO5・
写真図版 22	4	SX02 通焔孔断面(南東から)		CTT C
	1			SK06
	2	SX02 通焔孔断面(北西から)	写真図版 33	遺物写真 SK01・SK03・SK05・SK06・
			写真図版 33	
	2	SX02 通焔孔断面(北西から)		遺物写真 SKO1・SKO3・SKO5・SKO6・
	2	SX02 通焔孔断面(北西から) SX03 断面(東から)		遺物写真 SKO1・SKO3・SKO5・SKO6・ SXO2
	2 3 4	SX02 通焔孔断面(北西から)SX03 断面(東から)SX03 断面(東から)SX03 炭化物層検出状況(西から)SX03 断面(北東から)	写真図版 34	遺物写真 SK01・SK03・SK05・SK06・ SX02 遺物写真 SK01・SX02・表土・遺物包含 層 遺物写真 SY01 7層・SY01 流入土・
	2 3 4 5	SX02 通焔孔断面(北西から)SX03 断面(東から)SX03 断面(東から)SX03 炭化物層検出状況(西から)	写真図版 34写真図版 35	遺物写真 SKO1・SKO3・SKO5・SKO6・ SXO2 遺物写真 SKO1・SXO2・表土・遺物包含 層

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

上入道古窯は、愛知県大府市共和町上入道地 内の東海市の市境に面する丘陵に位置している。 露地野菜の畑とミカン畑が所在し、その斜面には 山茶碗等の遺物が散布し、灰原遺構の露呈は認め られるが、窯の基数等は不明であった。

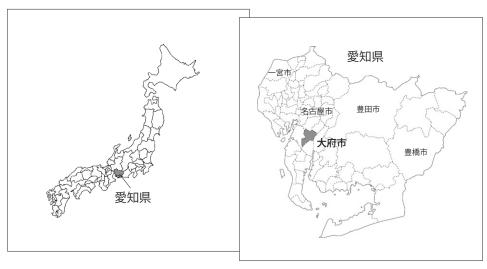
平成28年、畑地一帯20.702㎡を開発し工場 建設する事業が計画され、同年6月6日、事業者 代理から埋蔵文化財の有無に関する照会文書が大 府市教育委員会(以下、市教委)に提出された。 当該遺跡の範囲はこの計画区域内に所在したた め、市教委は確認調査が必要との回答を6月8日 に文書で回答した。事業者から6月13日に確認 調査の依頼と地権者からの確認調査実施承諾書の 提出があった。6月20日に現地において、ミカ ンと竹林の伐採の範囲を確認し、平成29年7月 11日から7月20日にかけて確認調査を行った。 トレンチ 16 箇所を設定し、掘削したところ、内 2本のトレンチからは窯体3基と思われる遺構を 確認した。この結果を受け、平成29年8月30 日に事業者としてピーコン・リアルエステイト・ 協和設計および市教委の三者で事前協議を実施し た。開発計画の変更はできないため、計画地の内 遺跡範囲の部分については、やむを得ず記録保存 のための発掘調査を実施する旨を確認した。

緊急発掘のため県文化財保護室と協議の上、県の民間導入指針に基づき、事業者から委託を受けた民間調査会社が調査主体として文化財保護法第92条に基づく本発掘調査を実施し、市教委は監理指導することとなった。9月14日に民間調査会社の選定のため、現地において6社に説明会を行った。この6社のうち株式会社アコードが事業者と本発掘調査に関する委託契約を締結し、これを市が監理監督する旨の協定書を事業者・調査会社・市教委の三者で締結した。

平成30年10月19日、事業者から文化財保護法第93条に基づく発掘の届出がされ、同日に株式会社アコードが調査主体として文化財保護法第92条に基づく調査のための発掘の届出を提出し、県に受理された。11月1日県から遺跡範囲部分については発掘調査を実施するよう通知がされた。

本発掘調査は、平成29年11月15日から平成30年2月28日までの間で実施された。当初の確認調査で推定された箇所より、灰原遺構と考えられた箇所から窯体が検出された。並んだ山茶碗窯2基と重複する炭焼窯1基が確認され、窯体は計3基であった。

出土品等の整理作業は、平成30年3月15日から5月31日にかけて行われた。報告書執筆は、5月1日から行い、平成30年8月1日に報告書を刊行した。



第1図 大府市の位置

第2節 調査の経過

調査は平成29年11月13日に調査地の伐採作業を行ない、11月14日に調査区域の現況測量を行なった。その後11月15日にバックホウによる表土掘削を開始した。表土掘削は調査区南西の丘陵頂部から着手し、並行して人力による包含層掘削及び遺構面の精査を進めた。調査地の地形や残土置き場などを考慮し、掘削残土の搬出にはベルトコンベヤーは使用せず、人力にて行なった。調査区南西部の平坦面の包含層掘削及び遺構面精査に予想以上に時間を費やしてしまい、窯跡の想定される区域に着手したのが12月13日となった。

本調査を進めるにしたがい、確認調査の結果と 異なる状況が明らかになっていった。調査トレン チ T-11 において想定されていた窯跡は、赤色を 呈する地山を、被熱により赤変した窯跡の窯壁と 誤認した可能性が強く、入念に精査を行なった が遺構ではないことが判明した。T-12 において は想定通り窯跡と考えられる遺構が存在したが、 T-11 に存在しないこともあり、窯が T-11 付近ま で広がらないことがこの時点で判明した。

窯体の主軸方向や窯跡の基数など不明な点が多い中、炭化物を多く含む楕円形状の広がり(SX01)を検出した。この遺構の壁面の一部が被熱し硬化しており、T-12で検出している窯体天井部被熱面との平面的な位置関係や、高低差などを考慮した時に、この時点では同一遺構のものと想定できておらず窯体の検出に苦慮した。またT-12で検出した窯体天井部被熱面が北側へ向け急勾配で下



写真1 調査前現況(南から)



写真2 グリッド杭設置(南から)



写真3 作業状況(南東から)



写真4 大府市文化財保護委員の視察(東から)



写真5 ラジコンヘリによる空撮

がっていき、このすぐ北側に炭化物層を検出した。この炭化物層が、窯体内流入土と想定する黄褐色砂層の下にもぐることが判明したが、炭化物層の性格がこの時点では不明であった。その後窯跡を炭焼窯として再利用する事例があることを知り、検討した結果、これも同様の例である可能性が強いものと推定された(SX03)。このSX01・SX03の存在が窯体の検出に対し障害となり、ようやく窯体が姿を現すのは年明けの1月16日であった。第4章で後述するが、最終的にSX01はSY01の燃焼室の最上層に相当することが判明した。またSX03は先述の通り炭焼窯の可能性が強いことが明らかとなった。

SY01 の調査は窯体の主軸に対して貫通する土層観察用ベルトを設定し、それに対して煙道部で2ヶ所、焼成室で1ヶ所、燃焼室から前庭部で2ヶ所の横断面ベルトを設定して窯体内の堆積状況の把握に努めた。窯体内の掘り下げを行ない、2月7日に最終操業面である床面の状況を、ラジコンへりによる空撮及び足場からの写真撮影を行なった。その後床面の下層に山茶碗を敷き詰めたいわゆる床面下施設を検出し、これらの山茶碗を取り上げ、掘り方までの調査を行ない2月26日にSY01の調査が完了した。その後2月28日に下層確認調査を行ない、全ての調査が完了した。

現地調査と並行して出土遺物の洗浄を行ない、 引き続き整理作業を行なった。報告書執筆作業は 5月1日から着手し8月1日に報告書を刊行し た。



写真 6 調査参加者

第3節 調查体制

調査における調査体制は以下のとおりである。

監督員 大府市歴史民俗資料館 田中 城久調 査員 株式会社アコード 西村 匡広調査補助員 株式会社アコード 林 貴光調査補助員 株式会社アコード 吉井 啓二

発掘作業員

井戸田邦義 井上健三 岩坪拓二郎 鵜飼京子 加藤美津子 河地裕子 香田 徹 寺沢なつ江 中西雅夫 登 栄政 福田治也 福間弘之 水野正博 森本秀子 安井晴子 山田 顕 (五十音順 敬称略)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 位置と地理的環境

上入道古窯は愛知県大府市共和町に所在する。 大府市は愛知県西部にあり、西側の東海市と共に 知多半島の基部を形成する。北は名古屋市、北東 側に豊明市、東に刈谷市、南には知多郡東浦町と それぞれ隣接する。上入道古窯は大府市の北西部、 伊勢湾岸自動車道と知多半島道路の交差する南西 側に位置し、東海市の北東部に近接する。

大府市の地形は半島中央部にある丘陵地と低地部に分かれる。このうちの丘陵部は名古屋市東部の名東区から緑区一帯にひろがる尾張丘陵に連続する。大府市のほぼ中央を鞍流瀬川が南流しており、東を尾張丘陵、西を大府丘陵と呼び、東海市を流れる太田川をはさんで南西にある知多丘陵へと連続する。

これら知多半島の丘陵部は地質的には常滑層群に属する。このうち大府丘陵は砂・シルト・粘土 及び砂礫層からなる第三紀鮮新世の常滑類層により構成され、このような地質的条件は上入道古窯 をはじめ窯業生産の成立基盤となっている。

大府丘陵は標高 40 m前後のゆるやかな丘陵 地で、上入道古窯は大府丘陵の北東斜面、標高 35.0m 付近に立地する。

第2節 歷史的環境(第2図)

上入道古窯をとりまく歴史的環境としては、第 2図に示すとおり、丘陵上には数多くの窯跡が分 布することが明らかである。ここでは窯跡の分布 を中心に大府市域の歴史的環境を概観していく。

大府市域において先人の残した痕跡として最も 遡ることのできるのは後期旧石器時代の共栄遺跡 である。本格的な発掘調査が行われていないもの の、ナイフ形石器が採集されており、散布地とし て理解されている。縄文時代になっても共栄遺跡 では後期の石鏃が採集されており、このほかに晩 期の桟敷貝塚が知られる。

弥生時代になると境川右岸の沖積低地に位置する物作遺跡と、上入道古窯の北東に位置する子安神社遺跡が認められる。ともに弥生時代から室町時代までの複合遺跡であり、惣作遺跡では弥生中期の土器や古墳時代後期から古代にかけての須恵器・土師器、古代の灰釉陶器のほかに、知多式製塩土器が出土している。子安神社遺跡は弥生後期から古墳時代前期にかけての遺構が調査されており、主に欠山式の土器が多く出土している。

古墳時代の遺跡としては土師器が採集された源 吾遺跡、直径 20 mの円墳で横穴式石室をもつと される高山古墳が中央町に立地する。

平安時代以降、この地域にも窯業遺跡の分布が 見られるようになる。灰釉陶器を焼成した野々宮 古窯のほか、北崎大池北古窯、高根山B・C古窯 群、西定保根B古窯群、子安古窯などがある。

12世紀代に入ると、山茶碗生産が本格化する。 大府市域に限らず、知多半島の丘陵上には数多く の山茶碗窯が濃密に分布する。これについては先 に報告された文献に詳しく、概略はこれに譲るこ ととし、ここでは発掘調査が行われた主要な窯跡 について概要を述べることとする。

吉田第1・2号窯は山茶碗と瓦を併焼する窯跡で、12世紀前半から中葉の窯跡である。瓦類は三巴文軒丸瓦・唐草文軒平瓦や鬼瓦などがあり、知多半島における初期の山茶碗窯で、東海市にある社山古窯とともに唐草文平瓦第Ⅱ類が京都の鳥羽離宮に供給されたものであるとされる。

高根山 B 古窯群は 3 基の窯跡が存在し、発掘調査は行なわれていないが、山茶碗などが採集されている。出土した山茶碗・小碗は山茶碗生産初期のもので 11 世紀後半から 12 世紀前半に属するものである。

別岨古窯群は3基の窯体が調査され、このうち2基は残存状況が良好で、001SYは天井部が部分的に残存し、床面がほぼ全形を留める。002SYは煙道部を失うが、焼成室は天井部を含めてほぼ残存する。床面下施設も確認している。山茶碗・小皿・小碗を焼成する。12世紀中頃から13世紀前半と推定される。

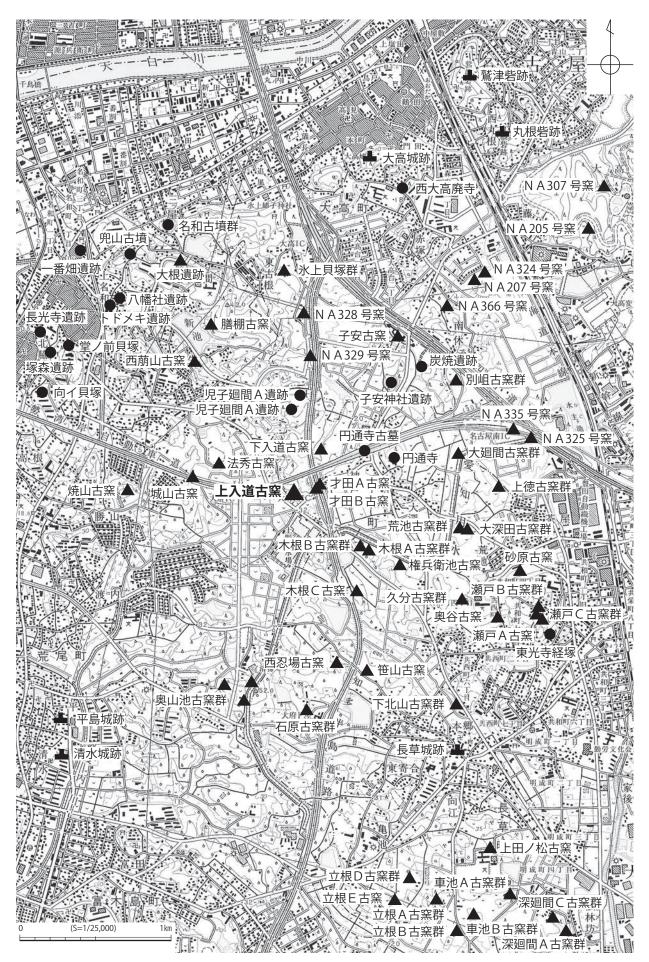
NA335 号窯は猿投窯鳴海地区有松支群に属する窯跡で、山茶碗窯が6基と特殊な構造の窯が1基調査されている。4基に床面下施設が認められており、このうちの1基は床面下施設が2面にわたり設置されていた。山茶碗・小皿を主体として焼成されており、12世紀後葉から13世紀前葉に操業したとされる。

鴨池東古窯は3基の窯跡が調査され、このうち2基に床面下施設が備わる。窯体と築窯排土を伴う前庭部や灰原を検出した。また窯体を再利用した炭焼窯を検出している。山茶碗・小皿を主体として片口鉢も出土している。12世紀末から13世紀初頭に生産された。

川池西古窯は3基の窯跡が調査され、窯体自体は削平を受けており、残りは良くなかったが、大府市域ではじめてロクロピットを伴う工房跡が検出された。ほかに土坑や灰原を検出している。山茶碗・小皿を主体として生産された。片口碗も少量ながら出土している。12世紀末から13世紀初頭に生産された。

石亀戸古窯群は3基の窯跡が調査され、このうちの1基から床面下施設が検出されている。遺物は山茶碗・小皿が生産された。12世紀末から13世紀初頭に操業したとされる。

以上が発掘調査が行われた主要な窯跡であるが、12世紀末から13世紀初頭までに操業した窯が多く、床面下施設を備える窯跡が多く調査されている。



第2図 上入道古窯と周辺の遺跡分布図

室町時代に入ると山茶碗窯は急速に衰えていき、大府市域における山茶碗生産が終焉を迎える。この時期になると各地で城砦が築かれるようになり、永禄3年(1560)に行なわれた桶狭間の戦いでも有名な大高城跡や鷲津砦跡、丸根砦跡などが認められる。大府市内では吉川城址、追分城址、横根城跡が認められる。

(引用・参考文献)

松田訓ほか『円通寺古墓・NA335 号窯 $I \cdot II$ 』(『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』第 75 集)財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1998 年

池本正明ほか『別岨古窯群』(『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』 第 187 集)公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋 蔵文化財センター 2013 年

大杉規之ほか『鴨池東古窯-宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告-』ナカシャクリエイティブ株式会社 2015 年

杉山敬亮ほか『川池西古窯-集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 報告-』株式会社二友組 2017 年

『大府市誌 考古編』大府市誌編さん刊行委員会 1991 年 森川昌和ほか『石亀戸古窯群 中京女子大学正門整備地埋蔵文化財発 掘調査報告』至学館大学 2018 年

The state of the s

第3図 調査前地形図

『愛知県史』別編 自然 愛知県史編さん委員会 2010 年 『愛知県史』別編 窯業3 中世・近世 常滑系 愛知県史編さん委 員会 2012 年

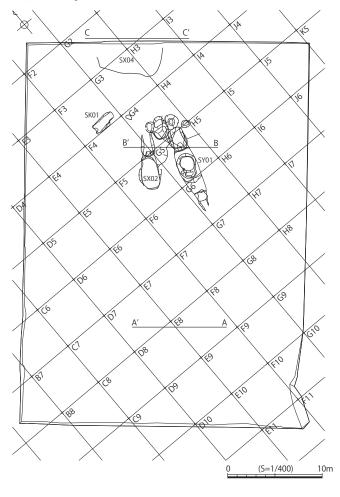
第3章 調査の方法

第1節 調査地の地区割(第4図)

調査における測量は2級基準点を基点とし、世界測地系座標によった。遺構の記録や出土遺物の取り上げは、平面直角座標系第VIII系に即した最小グリッドを5mに設定して実施した。グリッド名については調査区全体を網羅できる範囲の北西隅を起点に東西方向に $A\sim K$ 、南北方向に $1\sim 11$ で示し、アルファベットとアラビア数字の組み合わせでB5、C5 というように表示した。

第2節 発掘調査と記録の方法

遺跡略記号は上入道古窯の 2017 年度の発掘調査として「KND'17」とした。調査区は 1 箇所であるため、特に○○区というような呼称は設定しなかった。



第4図 調査区地区割図

遺構種類・略記号

SY:窯跡 SK:土坑 SP:ピット SX:不明遺構

遺構種別については検出できた遺構の種類が少なく、上に示す記号を使用した。遺構番号は遺構種別ごとに 01 から二桁表記した。なお、試掘調査で付した番号は、後述するように消滅するものもみられ、欠番が生じるため本調査では使用しなかった。

遺構の図面記録はトータルステーションと電子 平板を使用したデジタル測量を基本とし、写真測 量も併用して行なった。良好な出土状況を示すも のについては出土状況図の作成や出土地点観測を 行なった。それぞれの遺物に取上番号を付けた。 遺物の収納は耐水性のユポ紙に遺跡略記号、グ リッド名、遺構・層位名、日付を記載し、チャッ ク付袋を用いた。調査後に遺物登録番号を追加し、 遺物登録台帳と対応させた。

調査の写真撮影は 35mm フィルムのカラーリバーサル及び白黒フィルムと 1000 万画素以上のデジタル一眼レフカメラでの撮影を基本とし、重要な写真に関しては 6 × 7 判フィルムのカラーリバーサル及び白黒を行なった。調査状況の記録はデジタルカメラでの撮影を行なった。

フィルム写真のうち $35 \,\mathrm{mm}$ カラーリバーサルは大府市歴史民俗資料館の指示でマウント現像とした。 $35 \,\mathrm{mm}$ 白黒と 6×7 判白黒はそれぞれベタ焼を行なった。 6×7 判カラーリバーサルはスリーブ現像とした。

写真整理はデジタル写真に写真番号を4桁で付け、フィルム写真は種別ごとにアルバム収納した。 またフィルム写真についても写真台帳を作成し、 デジタル写真の番号を対応させた。

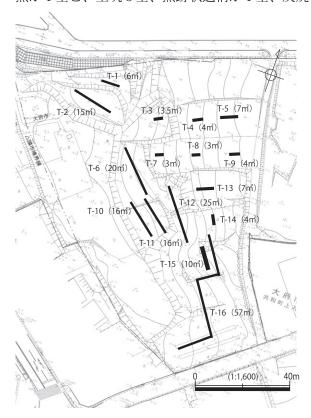
調査は 0.45㎡級バックホウを用いて表土の掘削を行なった。調査区内の基本層序は次節で述べるが、窯跡を検出した付近の遺物包含層はかなりの土量が見込まれたものの、多量に遺物を包含するため、人力による掘削を行なった。それ以降の調査はすべて人力で行なった。

第4章 調査の成果

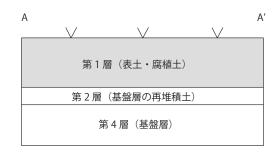
第1節 調査の概要(第5図)

調査地は周囲との比高差およそ8mの丘陵で、 確認調査において検出された窯跡あるいは灰原推 定地を網羅する範囲に調査区の設定が行なわれ た。調査地の現況は雛段状の段が西から東へと続 いている。丘陵頂部は竹林となっており、中段以 東は果樹園としての土地利用がなされていた。調 査前はこれらの樹木は伐採されていたが、下草が 繁茂する状況であった。丘陵東側は崖状を呈して おり、崖面を観察すると融着する山茶碗などの土 器や窯壁・焼土などが多量に散乱する状況であっ た。調査前はこの付近に灰原が存在するものと推 定されていた。調査トレンチ T-11 において窯跡 と考えられる遺構が3基、T-12においてその延 長部とみられる遺構が同じくみつかっており、本 調査前においてはこの調査トレンチ周囲に窯跡を 中心とする遺構が広がるものと予想された。

本調査において検出できた遺構としては山茶碗 窯が1基と、土坑6基、窯跡状遺構が1基、炭焼



第5図 確認調査トレンチ配置図



第6図 基本層序断面模式図A

窯1基、不明遺構1基、ピット3基、谷状の落ち 込みが1基である。遺構が確認できたのは調査区 北東部に限定され、調査区西部の上段平坦面など では遺構はみつからなかった。また調査区西部で は表土掘削中あるいは遺構検出段階においても、 遺物はほとんど出土していない。調査区西部の上 段平坦面は開墾時に削平を受けているものとみら れる。

調査区の北部から東部にかけては丘陵端部に位置し、表土を取り除くと基盤層が直下に検出できた。この区域も大きく削平を受けているものと考えられ、遺構は検出できなかった。蛇行する谷状の落ち込みを検出したが、埋土からガラスビンやプラスチック等、近現代のゴミが含まれており、撹乱と判断した。

第2節 調査区内の土層堆積状況 (第4・6~9図)

調査区内の基本層序は第1層として表土が調査 区全域に分布する。表土層は果樹園あるいは竹林 に起因する腐植土層であり、しまりの弱い堆積で ある。丘陵頂部から上段平坦面付近の第1層の下 層には基盤層の再堆積土(第2層)が部分的に認 められた。第1層あるいは第2層の下層には基盤 層(第4層)が存在する。基盤層は地点により性 状が異なり、調査区南西部の丘陵頂部から上段平 坦面付近までは明黄褐色シルトを基調とした堆積 が認められた。

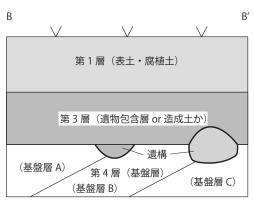
丘陵先端部にさしかかる北東部付近には、表土 と基盤層との間に黄灰色中粒砂をはじめとして土 質や土色の異なる層が複数分布する(第3層)。 これらの層には融着資料を含む山茶碗などの土器

28.500m

2m

(S=1/50)

- 29.500n

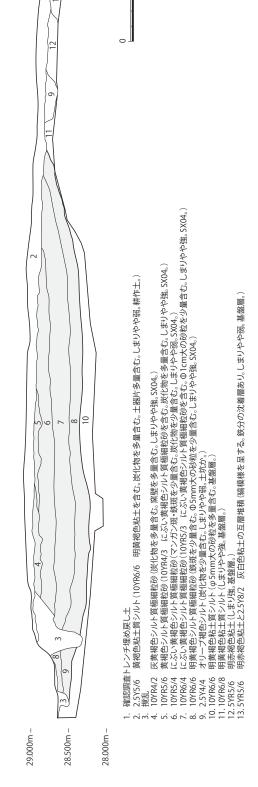


第7図 基本層序断面模式図 B

類や、焼台・窯壁・焼土などを多量に包含する。 また、一方で少量ながら近代以降の陶磁器なども 含まれた。丘陵先端部はL字形にカットされ、現 状で1m以上の段差が認められる。この層群の分 布が窯跡 SY01を検出した丘陵先端部に限定でき ることから、窯跡などの遺構の廃絶後、詳細な時 期は不明ながら、大規模な造成が行なわれた可能 性が推定される。その際、丘陵頂部から上段平坦 面にかけては遺物包含層が存在しないことから、 耕地を確保のため、高位に存在した土器を包含す る層を削平し、低地を埋める際に利用された可能 性が高い。このため調査区北東部付近で認められ た層群が、高位に存在した遺物包含層に起因する 可能性が考えられる。

調査開始当初、灰原がこの周辺にひろがるという想定をしていたが、先述の第3層が2次的な堆積である可能性を示しており、純粋な遺物包含層ではなく造成土と認識した。その形成時期は中世以降と考えている。第3層の下層に基盤層を検出した。赤褐色粘土、黄橙色中粒砂など地点により性状の異なる層が分布するが、いずれも基盤層であると認識しており、窯跡 SY01 をはじめとして遺構はこれらの上面にて検出した。

第8図に示したのは調査区北東壁面の土層断面 図であるが、図の5層以下はSX04と呼称した谷 状の落ち込みの堆積土である。第2層の表土直下 で検出した。遺物が出土しなかったため時期は不 明であるが、検出した窯跡の北正面に位置するこ とから関連する可能性も考えられるものの、詳細 は不明である。SX04は調査区外へと延びる。



第3節 遺構

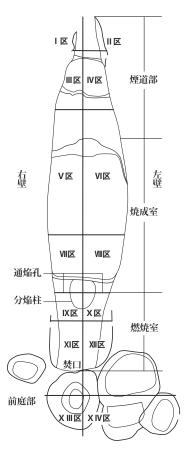
SY01 (第9~18図)

調査区中央部から北東部にかけて検出した。調査トレンチ T-12 において認識されていた遺構で、トレンチ断面において被熱により赤変し、硬化する基盤層を確認した。この部分でアーチ状の天井が断面で観察でき、非常に残りの良いことがわかった。

窯体

窯体構造は、基盤層をトンネル状に掘り抜いて 構築された、分焔柱を有する地下式の窖窯である。 窯体は丘陵北東斜面の標高 32.0 mに立地する。

煙道部の一部が削平を受けているものの、煙道部から焚口までほぼ全体が遺存する。煙道部から焚口部まで全長 9.38 mをはかる。焼成室で最大幅 2.12 mとなる紡錘形の平面形状を呈する。主軸方向は N-18°-E、焚口を北に向ける。煙道部と分焔柱付近において天井が遺存する。



第9図 窯体部位名称・窯体内グリッド名称図

煙道部

煙道部は全長 3.78 mを検出した。最大幅は焼成室境付近で 1.48 mをはかる。上方に向かうにつれ徐々に幅を減じ、検出できた先端部から焼成室に向かい 1.1 mの位置で幅 0.50 mをはかる。またその位置で床面の傾斜角度も変化する。この位置はダンパーと考えられ、先端部からこの位置まで 12.8°、この位置から下方は 53.8°、0.24 mの位置でさらに 35.1°と床面傾斜角が変化する。ダンパーから検出できた煙道部先端までの長さは 1.17 mである。

床面は基盤層が直接床面となる。壁面は残り具合が良好で、ダンパー付近から焼成室にかけては天井が遺存する。ダンパーから下方に 1.75 mの位置で計測すると、天井までの高さは 0.81 mをはかる。床面、壁面、天井全体に被熱による基盤層の変化が認められた。

焼成室

焼成室は全長 3.37 mを検出した。焼成室と煙 道部の境界は、後述する炭焼窯 SX03 により削ら れており明確ではないが、焼台の残存する範囲ま では焼成室内と判断できたため、暫定的にこの範 囲までを焼成室と認識した。焼成室の平面形状は 中央部に最大幅をもつ細長い紡錘形を呈するが、 左右対称形にはならず、左壁が右壁よりも若干張 り出す。

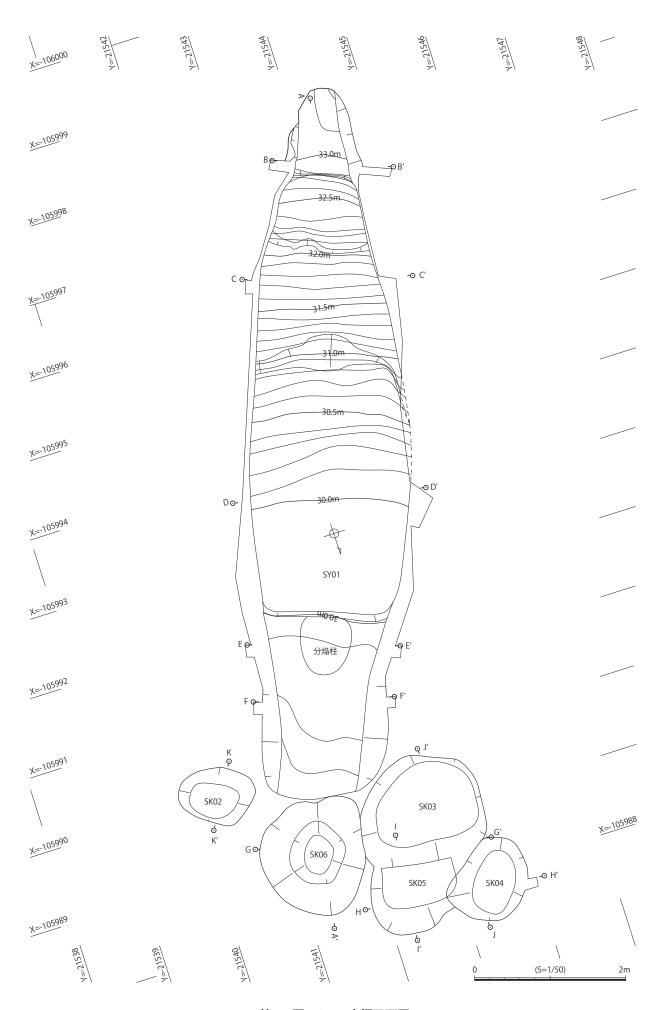
天井部は分焔柱中心から 1.3 m付近まで残るのみである。天井高は分焔柱前面で 0.8 m、1.3 m付近で 1.0 mと徐々にではあるが上方に向かい上昇する。

壁面は被熱により変色及び硬化する。分焔柱付近が最も強く火を受けており、溶融し一部ガラス化するところも認められた。表面には明らかな補修材や工具痕跡などは確認できなかった。

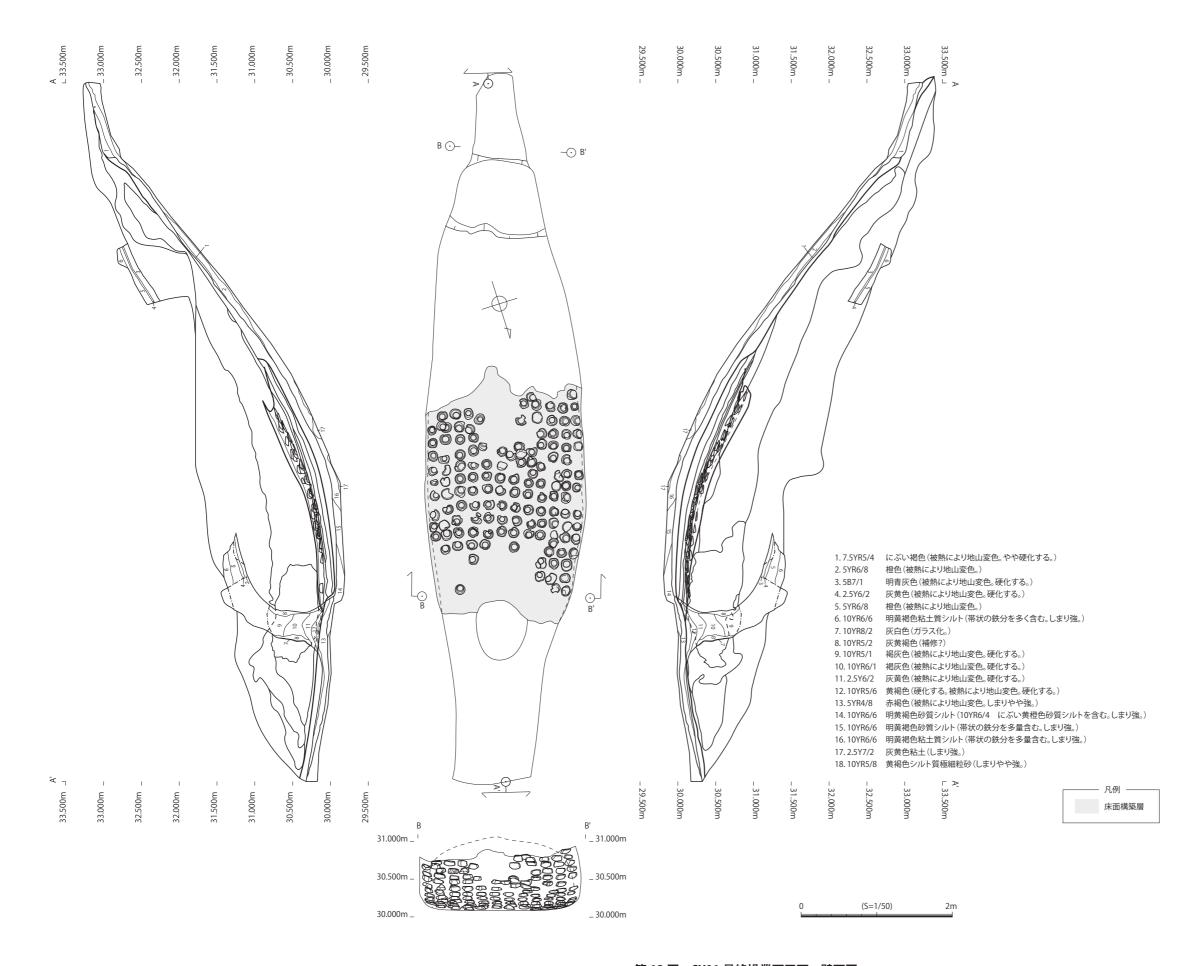
床面は良好な状態で残存する。床面上には原位置を留める焼台が136箇所で確認できた。焼台は整然と配置され、縦横の目地は通りが良い。第13図に示すとおり、窯主軸方向には直線的に並ぶが、窯主軸に直交方向には分焔柱側からみて中央が煙道側へ突出するやや弓なりな並びとなる。



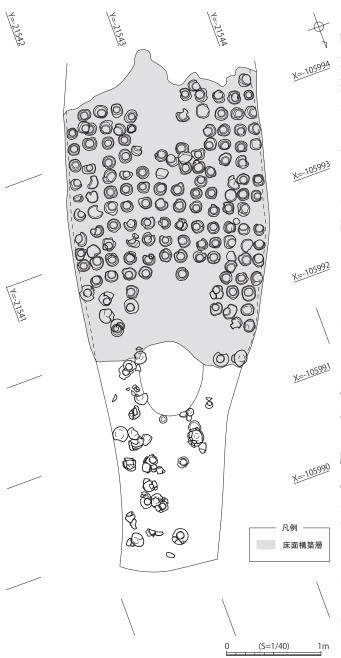
第 10 図 調査区全体平面図



第 11 図 SY01 完掘平面図



第 12 図 SY01 最終操業面平面・壁面図



第 13 図 SY01 焼成室から燃焼室遺物出土状況図

分焔柱の前面 9 cm の位置に原位置を保つ焼台があり、ここから中央に向かい 2.67 mにわたり据え置かれる。分焔柱の正面付近は焼台の残りが悪い。また分焔柱から 2.67 mの位置から煙道側は床面が削れられており、焼台も認められなかった。後述するように炭焼窯として再利用された際に床面が削られており、もともとの焼台設置範囲は不明である。後述する床面下施設の範囲が、検出できた焼台の範囲よりもやや広いため、焼台設置範囲もこの範囲に近いものと推定される。

焼台は欠落する部分もみられるが、検出できた 範囲全体に配置されていたと仮定すると、窯主軸 方向に16列、窯主軸方向に直交する方向に12 列認められることから、推定で192箇所の焼台 を配置されていた可能性が考えられる。焼台の検 出範囲と床面下施設の検出範囲は重なるものの、 南北にずれが生じるため、床面下施設の範囲全体 に焼台がもともと配置されていたかどうかは推定 の域を出ないが、床面下施設の範囲全体が焼台が 設置されていたとすると、煙道側に7列分が追加 されることになり、合計276箇所となる。あく まで推定であるが、これまでの調査事例からする と、同時期の同じ規模の窯におけるこの数字は、 あり得るものと考えられる。

床面の構築に際しては焼台を据える面に 4 層にわたり 2~5 cm の厚さの置土をする。その下層で炭化物層(第 14 図 40 層)を検出している。炭化物層の上面はやや硬化し、床面の可能性も考えられるため入念に検討したが、焼台を据えた痕跡などは認められなかった。したがってここでは炭化物層を床面と認識しなかった。この炭化物層を含めた 5 層を床面構築層と認識した。この層の下層には 5~ 18 cm の厚さの層を入れ、その下に高台を上にした山茶碗を伏せ置き、床面下施設を設ける。

床面の傾斜角度は分焔柱から 0.58 m付近まで が 3.8°で、1.39 m地点までが 6.7°、この地点か 5煙道部境までは 24.4°となる。

壁面の観察によると、硬化する面が床面構築層の認められる高さを境に、酸化して赤色あるいは黒色を呈する壁面に変化する(写真図版 10 - 2 参照)。床面下施設はこれらの酸化する壁面よりも低い位置で基盤層に直接据えられている。これは燃焼室床面の通焔孔底面よりも 20cm 下がった位置になり、大きな段差となっている。床面構築層の分布範囲が床面下施設の範囲に一致することや、燃焼室床面との段差の存在などから、本来存在した床面を削り込んで床面下施設を設置している可能性もある。あるいは窯の掘削から火入れ、その後一連の作業として床面を一段掘り下げ

て床面下施設の整備という工程も考えられる。調査においては双方の可能性が推定されるが、仮に作り替えを認める場合は、床面下施設が窯の操業開始段階に設置したのではなく、操業後のある段階でなされた可能性を示唆するものである。天井の低い暗い空間内での作り替えは非常に困難な作業であったにもかかわらず、行なわなければならない必要性が生じたのであろうか。このような事例が存在するかどうか、管見に及ぶ限り知りえない。床面下施設という施設の存在意義、あるいはその施設のもつ有効性を改めて考えてみる必要がある。

床面下施設は焼成室内中央部に認められた。後 述する炭焼窯 SX03 により掘り込まれており、床 面の焼台を検出する際にすでに一部が露出してい た。分焔柱から内側に 1.25 mの位置から煙道部 に向かい 2.60 mの位置まで、左右両壁に密着す る位置まで隙間なく山茶碗を敷き詰めている。焼 成に失敗したものや破損するものを使用し、高台 を上にして、口縁部を伏せている。分焔柱側の傾 斜のゆるい位置には1枚ずつ敷き詰めるが、傾斜 の強い位置には複数枚を重ねたり、あるいは融着 するものを敷いている。融着する小皿を隙間に充 填するところも認められた。使用される山茶碗は 破損するものの、焼成不良品(生焼け状態)は認 められなかった。床面下施設を設置する際に使用 する山茶碗を選別しているのかもしれない。なお、 この施設に排水溝は検出できなかった。使用され た個体数は山茶碗621点、小皿104点、小碗9点、 無台碗6点、合計740点を数える。

分焔柱・通焔孔

焼成室と燃焼室を画する位置で分焔柱を検出した。分焔柱の平面形は基底部で楕円形を呈する。 基底部での規模は主軸方向の径 0.79 m、これと 直交する径 0.67 m、天井までの高さ 0.97 mを はかる。

分焔柱は基盤層を削り込んで形作っており、高温による被熱で表面は硬化し、一部ガラス化する。断ち割りをする際も、通常の掘削道具では歯が立たなかった。加工の際の工具痕などは認められな

かった。断面を詳細に観察すると、表面に厚さ5 cm程の層の違いが認められたが、補修時のもの の可能性も考えられる。

通焔孔は左右とも上下に長径をもつ長楕円形を 呈し、焼成室から燃焼室に貫通する。通焔孔の規 模は左側が幅 0.65 m、高さ 0.85 m、右側が幅 0.61 m、高さ 0.70 mをはかる。

燃焼室・焚口

燃焼室は焚口から分焔柱中心までの長さ 2.23 m、幅は分焔柱中心で 1.50 m、焚口で 1.40 m、最大幅は中央部付近で 1.65 mをはかる。床面は焚口から分焔柱に向けて 7.8°の傾斜角度で下降する。床面は基盤層上に炭化物層が 2 枚認められ(第 14 図 51・53 層)、同層からは焼成室より掻き出された山茶碗などが多量に含まれた。炭化物層の直下に基盤層を検出し、被熱して硬化する。炭化物層上面を床面に相当すると考えれば、基盤層を含め 3 枚の床面が存在する可能性が高い。これに対応する床面を焼成室では検出できなかった。

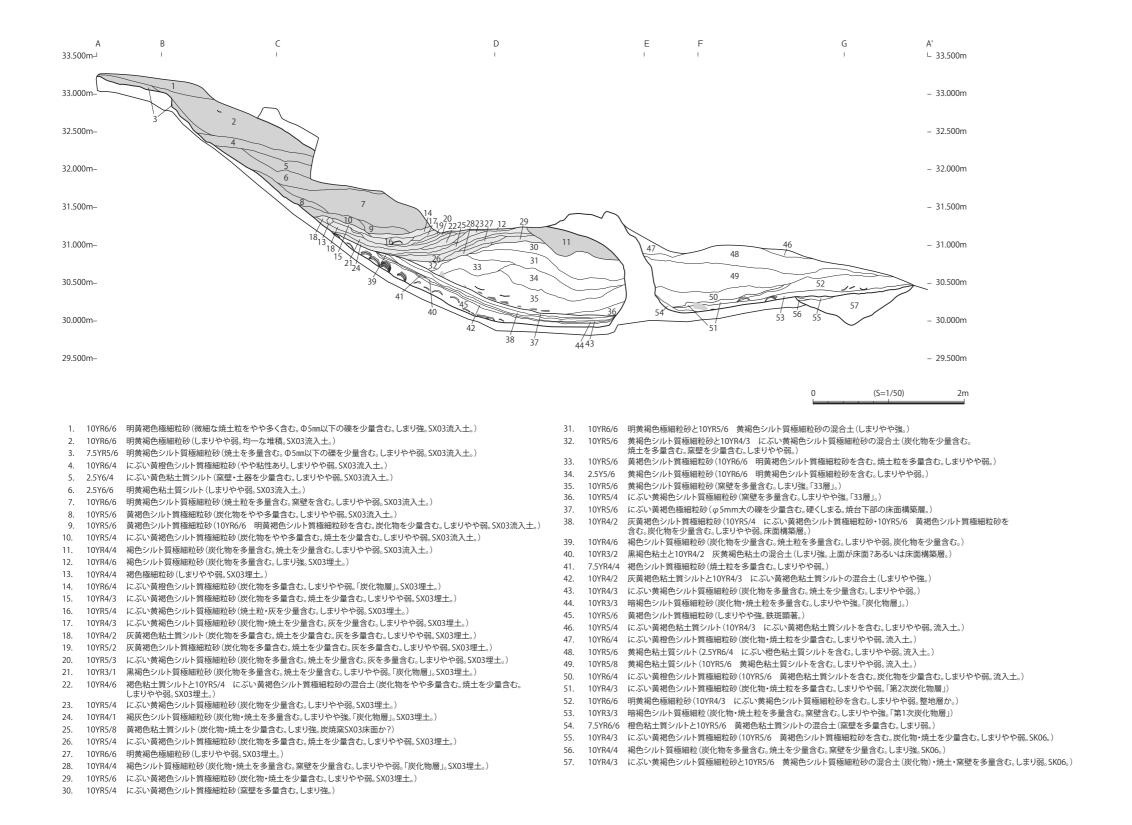
炭化物層の上位には山茶碗を多量に含む流入土が堆積しており、窯としての機能を失ったのちに埋没する過程で混入した可能性がある。今回の調査では操業した窯を1基しか検出できなかったが、近辺に複数基が存在する調査事例が多いため、完全に削平された未知の窯が存在した可能性も考えられよう。焼成室においても、炭焼窯 SXO3 の機能停止後に堆積した砂層(流入土)からも山茶碗や窯壁などが出土しており、SYO1 の南側の高位に窯が存在した可能性も考えられよう。

前庭部

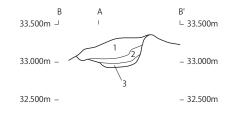
SY01の前庭部では焚口に近接する位置で6基の土坑を検出した。これらは互いに接しており、堆積状況も類似する。個別の土坑の説明については後述することとする。

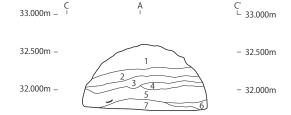
土坑群の上面は第18回に示すとおり、焼成時に掻き出されたと考えられる炭化物が覆っている。また、多量の土器も出土した。

土坑を検出した面から北側は大きく削平を受けており、1m程の段差となっている。段差の下で



第 14 図 SY01 縦断面図

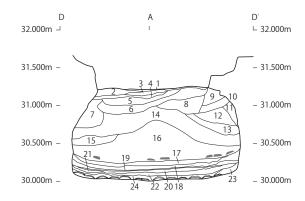


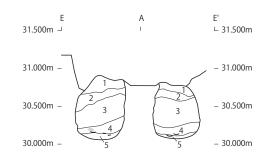


- 明黄褐色極細粒砂(微細な焼土粒をやや多く含む。Φ5mm以下の礫を
- 2 10YR6/6
- 少量含む。しまり強。流入土。) 明黄褐色極細粒砂(しまりやや弱。均一な堆積。流入土。) 明黄褐色シルト質極細粒砂(焼土塊(窯壁)を多量含む。しまりやや弱。 3.7.5YR5/6



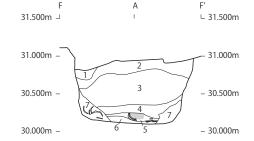
- 2. 2.5Y7/4
- 行政権の巨極地が(よるソカル)。加入工。) 法責色細粒が(繁璧含む。しまり現。流入土。) にぶい黄色粘土質シルト(窯壁・土器を少量含む。しまりやや弱。流入土。) 3. 2.5Y6/4
- 明黄褐色粘土質シルト(しまりやや強。流入土) 4 25 4 6 / 6
- 5. 10YR6/6 明黄褐色シルト質極細粒砂(焼土粒をを多量含む。しまりやや弱。流入土。)
- 灰黄褐色シルト質極細粒砂(しまりやや強、流入土。) 黄褐色シルト質極細粒砂(10YR6/6 明黄褐色シルト質極細粒砂を含む。 炭化物を少量含む。窯壁を少量含む。しまりやや弱。流入土。) 7. 10YR5/6





- 1.10YR6/6 明黄褐色極細粒砂(炭化物を多量含む。しまり強。)
- 2.10YR6/4 にぶい黄橙色シルト質極細粒砂
- 黄褐色シルト質極細粒砂(炭化物を少量含む。焼土粒を多量含む。しまり 3.10YR5/6
- スページャーでは、 かや弱。) にぶい黄橙色シルト質極細粒砂(炭化物を多量含む。焼土を少量含む。しまりやや弱。) まりやや弱。) にぶい黄橙色シルト質極細粒砂(炭化物・焼土を少量含む。しまりやや弱。) にぶい黄橙色シルト質極細粒砂(炭化物・焼土を少量含む。しまりやや弱。) 4.10YR5/4
- 5 10YR5/6
- 6.10YR5/4
- 褐色シルト質極細粒(炭化物を多量含む。焼土を少量含む。しまりやや弱。) 8.10YR5/6 黄褐色シルト質極細粒砂(焼土を少量含む。しまりやや弱。)
- 9.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂(10YR5/6 黄褐色シルト質極細粒砂を含
- む。炭化物・焼土を少量含む。しまり弱。) にぶい黄褐色シルト質極細粒砂と10YR5/6 黄褐色シルト質極細粒砂の 10.10YR4/3
- 混合土(実験・炭化物を少量含む。しまりやや弱。) にぶい黄褐色シルト質極細粒砂(10YR5/6 黄褐色シルト質極細粒砂を含む。炭化物を少量含む。しまりやや弱。) 11.10YR4/3
- 12.10YR5/6 黄褐色シルト質極細粒砂(炭化物を少量含む焼土粒を多量含む。しまりや
- 明黄褐色シルト質極細粒砂(焼土塊を少量含む。しまりやや弱。) 13.10YR6/6
- 14.10YR6/4 にぶい黄橙色極細粒砂(焼土をやや多量含む。窯壁を少量含む。しまり弱。) にぶい黄橙色シルト質極細粒砂(焼土を少量含む。窯壁を少量含む。しまり かや弱。)
- 黄褐色シルト質極細粒砂(窯壁を多量含む。しまり強。「33層」。) 1610YR5/6
- にぶい黄褐色極細粒砂 (φ5mm大の礫を少量含む。硬くしまる。焼台下部 17.10YR5/6 の床面構築層。
- 灰黄褐色シルト質極細粒砂(10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂・ 10YR5/6黄褐色シルト質極細粒砂を含む。炭化物を少量含む。しまりやや 1810YR4/2 弱。床面構築層。)
- 黒褐色粘土と10YR4/2 灰黄褐色粘土の混合土(しまり強。上面が床面? 19.10YR3/2 あるいは床面構築層。)
- 灰黄褐色粘土質シルトと10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルトの混合土 20.10YR4/2
- (しまりやや強。) 黄褐色砂質シルト(しまりやや強。)
- 22.10YR5/6 黄褐色シルト質極細粒砂(炭しまりやや強。鉄斑顕著。)
- 褐色シルト質極細粒(炭化物をやや多量含む。しまりやや強。)
- にぶい黄褐色シルト質極細粒砂(炭化物を多量含む。しまりやや強。) 24.10YR5/4

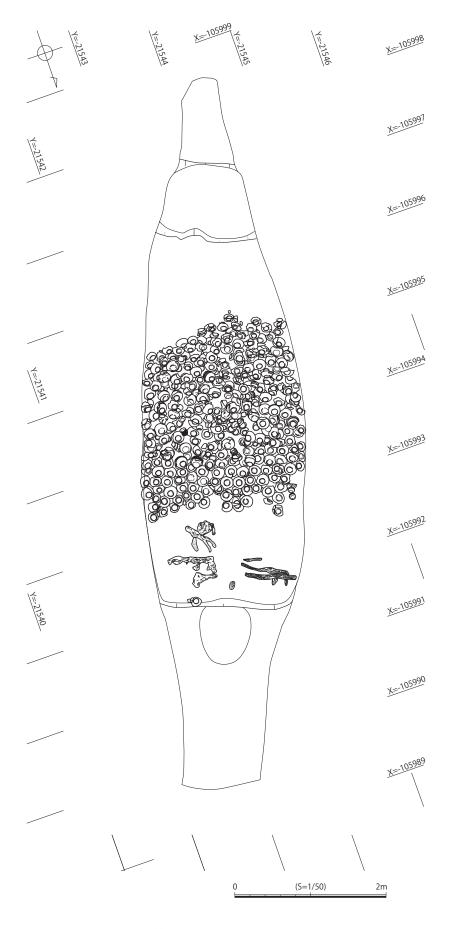
- 1.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂(10YR6/6 明黄褐色シルト質極細粒 砂を含む。炭化物・焼土を少量含む。しまり弱。)
- 明黄褐色シルト質極細粒砂(炭化物・焼土を少量含むしまり弱。) 黄褐色シルト質極細粒砂(しまりやや弱。) 2 10YR6/6
- 3 10YR5/6
- 橙色粘土質シルトと10YR5/6 黄褐色粘土質シルトの混合土(窯壁を 4.7.5YR6/6
- 多量含む。しまり弱。) にぶい黄褐色シルト質極細粒砂(炭化物・焼土を少量含む。しまり弱。) 5.10YR4/3



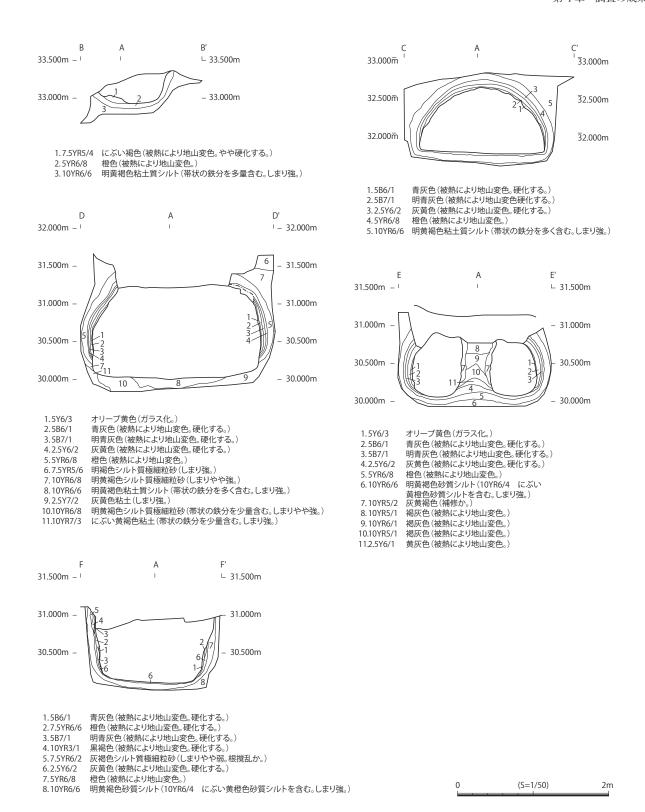
- 1.10YR6/6 明黄褐色粘土質シルト(炭化物を少量含む。しまりやや弱。)2.10YR5/6 黄褐色粘土質シルト(2.5YR6/4 にぶい橙色粘土質シルトを含む。 2.10YR5/6 しまりやや弱。流入土。
- しまりやや弱。流人士。) 黄褐色粘土質シルト(10YR5/6 黄褐色粘土質シルトを含む。しまりやや弱。流入土。) にぶい黄橙色シルト質極細粒砂(10YR5/6 黄褐色粘土質シルトを含む。炭化物を少量含む。しまりやや弱。流入土。) にぶい黄褐色シッルト質極細粒砂(炭化物・焼土粒を多量含む。しま 3 10YR5/8
- 4 10YR6/4
- 5.10YR4/3
- いるが、現代について、現代に切ったこれである。 リやや弱。流入土。「第2次炭化物層」) 暗褐色シルト質極細粒(炭化物・焼土粒を多量含む。窯壁含む。して 6.10YR3/3
 - まりやや強。「第1次炭化物層」)
- 後色粘土質シルトとは10VR5/6 黄褐色粘土質シルトの混合土(窯壁を多量含む。しまり弱。) 7.7.5YR6/6

(S=1/50)2m

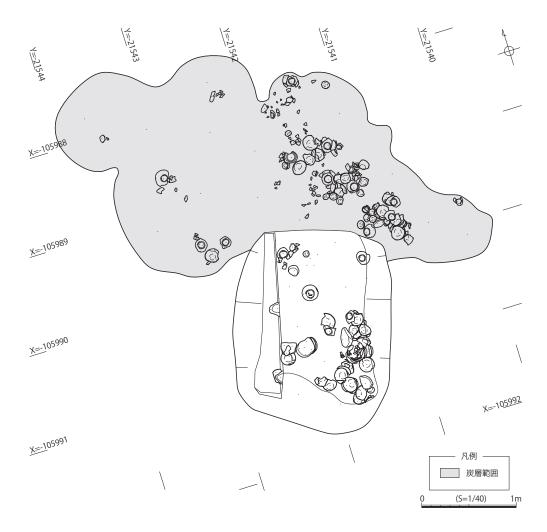
第 15 図 SY01 横断面図 1



第 16 図 SY01 床面下施設



第 17 図 SY01 横断面図 2



第 18 図 SY01 燃焼室から前庭部遺物出土状況図

遺構検出を行なったが、遺構や灰原相当の層はみつからなかった。調査前にはこの付近一帯に多量の遺物が散乱しており、灰原の存在が想定されたが、先述のとおり造成に伴い2次的な移動によるものと考えられた。

SX01 (第19·20図)

SY01 の窯体を検出する段階で最も早く識別できた炭化物層の広がりで、平面的に炭化物の分布する範囲を遺構と認識して調査を行なった。遺構の性格や SY01 との位置関係など混乱することが多かったが、最終的には SY01 の燃焼部最終埋土という結論に至った。

平面的には不整円形を呈する範囲に炭化物が分布することが判明し、SY01の操業停止後に上部から掘り込まれた土坑の可能性を想定して掘り下げたところ、遺構壁面の一部が被熱のため赤色を呈するところがみられた(写真7)。この時点で

は SY01 の窯体を検出が完了しておらず、SX01 が SY01 の内部まで削り込んでいるものと考えていた。被熱のため赤色を呈する壁面は立ち上がりが急激になるものの、一部にとどまることから、焼土化したものが 2 次的に移動することも考えていた。

埋土は第20図に示すように、炭化物に加え焼土粒を多量に含む層が厚く堆積し、山茶碗がまとまって出土した。この記録をとり、遺物の取り上げを完了した時点でもさらに下層に土器は認められたが、一応この時点で遺構の底面と認識した。結果的には層境を遺構底面と誤認していたことが判明した。

SX01 として調査した遺構の規模は 1.86 × 0.75 mの楕円形を呈し、長軸を南北におく。深さは 0.75 mをはかり、断面形は皿状を呈する。遺構の輪郭は、調査当初は削平を受けたため流出

\sh.144.27	4211 19			窯体全体			焚口		燃炸	尭 室	分類	6柱		焼质	 发室		煌	道
遺構名	グリッド	全長	最大幅	主軸方向	標高上	標高下	幅	長さ	幅	床面傾斜角	長さ	幅	長さ	幅	床面傾斜角	長さ	幅	床面傾斜角
SY01	G4 • G5 • G6	(9.38)	2.12	N - 18° -E	33.36	30.53	1.40	2.23	1.40 ~ 1.65	下降 7.8°	0.78	0.66	3.37	2.02 ~ 2.12	下降 3.8 ~上昇 6.7 ~ 24.4°	(3.78)	0.50 ~ 1.48	上昇 35.1 ~ 53.8 ~ 12.8°
SX02	F4 • F5 • G4	(5.76)	2.33	N - 34° -E	32.54	30.44	1.10	2.30	1.44	下降 3.9°	0.58	0.51	(3.46)	2.33	上昇 10.1 ~ 30.0°	_	_	_

遺構名	グリッド	長軸	短軸	深さ	平面形	断面形
SK01	F3	(2.48)	1.21	0.46	長方	箱
SK02	G4 • G5 • H4 • H5	0.96	0.73	0.41	楕円	U字
SK03	G4	1.64	1.43	0.70	楕円	U字
SK04	G4	1.13	0.86	0.25	楕円	Ш
SK05	G4	1.11	0.90	0.29	楕円	U字
SK06	G4	1.56	1.40	0.44	楕円	V字

遺構名	グリッド	長軸	短軸	深さ	平面形	断面形
SP01	G4	0.70	0.41	0.46	楕円	U字
SP02	G5	0.31	0.27	0.36	円	U字
SP03	G5	0.23	0.19	0.25	円	U字
SX01	G4 • G5	2.52	1.86	0.75	楕円	Ш
SX03	G5	3.44	2.11	0.81	楕円	袋状
SX04	G2 · G3 · H2 · H3	6.80	3.11	0.74	不明	Ш

表 1 遺構属性表

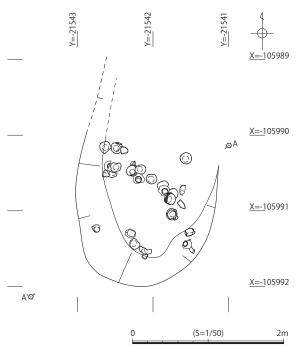
したものと理解していたが、SX01 は先述のとおり SY01 の燃焼部の一部であり、焚口付近にあたるため肩としては検出できなかった。第 19 図の上部が SY01 焚口付近に相当する。

SX03 (第 10·14 図)

SX01 と同様、SY01 の上部で検出した遺構で SX01 の南 0.5 mに位置する。検出時の形状は不 整円形を呈する。検出時の経緯としてはベルト 1 のサブトレンチ掘削中に、SX01 の炭化物層につ ながる可能性のある炭化物層を確認した。この炭化物層の平面的な広がりを精査したが、連続せず SX01 とは別遺構として調査することとなった。

炭化物層を平面的に精査すると、検出していた SY01の天井内部へと連続することが明らかとなった。炭化物層は SY01の煙道部方向へと向かい、下降するように堆積することが判明した。それが SY01の焼成室床面まで達しており、その上に明黄灰色砂が堆積する。明黄灰色砂は煙道部から流入した堆積土で、焼成室炭化物層の燃焼室側には及んでいない。つまり SY01 が機能停止後、一部天井が残っている段階で、これを炭焼窯として再利用し、その際に発生した炭化物を燃焼室側へ掻き出して堆積したのが、焼成室内にある炭化物層であると理解できる。炭化物層は焼成室全体に認められるわけではなく、焼成室中央部やや燃焼室側寄りまで及ぶが、それより先には認められ

ない。またこの位置から分焔柱までの間には天井 崩落壁と考えられる窯壁を多量に含む堆積が認め られ(第14図30~36層)、炭焼窯はこの付近 には及ばないものと考えられる。この天井崩落壁 を含む層は、分焔柱までの範囲に厚く堆積し、崩 落した天井壁のほかに、焼土や焼成不良(生焼け 状態)の山茶碗が多く含まれていた。また、複数 の土の混合土であり、人為的に移動された層であ ることも明らかで、炭焼窯として利用する際に、 崩落した天井壁を含む層を分焔柱側に片付けた可



第 19 図 SX01 遺物出土状況図

能性が考えられる。その際に最終操業時に焼成された山茶碗が、焼成途中の状態で窯体内に残されたものと考えられる。第 14 図の 35・36 層から多量に出土した(調査時は 33 層で取り扱った)。

炭焼窯として再利用する際は、煙道部は埋没しておらず、煙道部から焼成室の一部を炭焼窯として利用されたものと推定される。炭化物層が認められるのは天井崩落壁のある付近までで、それよりも北側の燃焼室側には認められない。炭焼窯として利用された場合の床面としては、SY01の床面の直上に硬化する面が一部に認められ(第14図25層)、それが炭焼窯の床面である可能性も考えられる。断面を検討すると、炭化物層が幾重にも認められるため、複数回にわたり利用された可能性も考えられる。

以上のことから、調査においては SY01 操業中に焼成室の一部の天井が崩落し、残存した煙道部から焼成室の天井部空洞を炭焼窯として再利用されたものと考えている。炭化物層を検出した際には不整楕円形状の平面プランが認められたが、このような状況であったため、正確な遺構の平面プランは把握できなかった。遺構の規模は炭化物検出時で、3.44 × 2.11 mをはかる。検出面から推定床面までの深さは 0.81 mとなる。

出土遺物を検討すると、SY01 天井崩落壁含む層(第 14 図 35・36 層)出土遺物と、SX03 出土遺物は時期差はほとんどなく、放射性炭素年代測定法の結果からはやや SX03 が遅れるようである。このことから、SY01 天井崩落後から間を置



写真7 SX01壁面被熱の状況(北から)

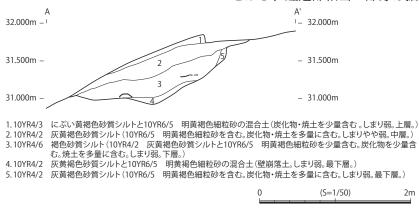
かず炭焼窯として再利用された可能性が高いものと考えらえる。

SX02 (第 21 図)

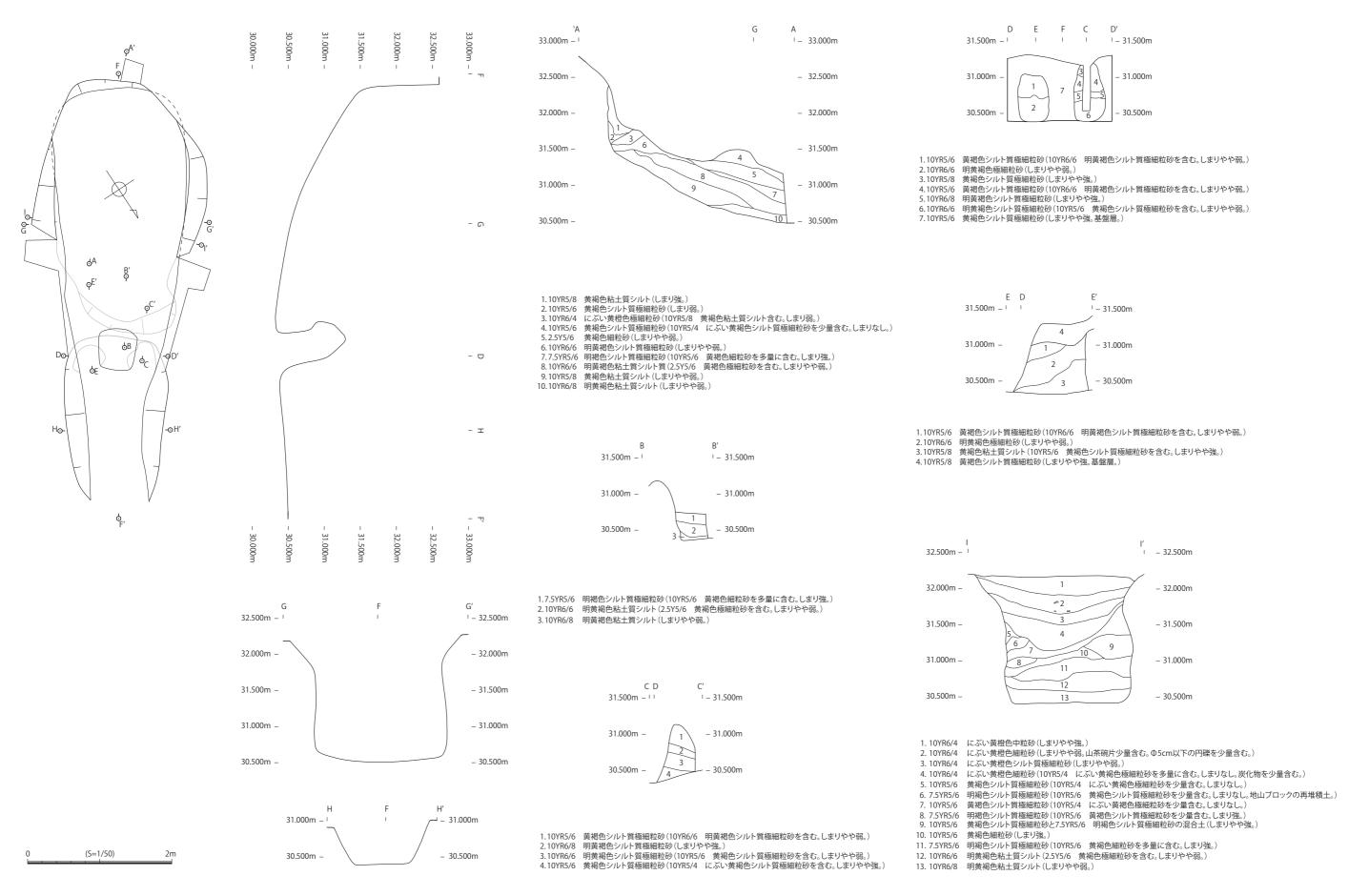
調査区北東部、SY01の西側で検出した遺構で、 遺構検出時は南東から北西へ蛇行する自然流路と 認識して調査を行なった。掘り下げを進めると、 次第に直線的な輪郭が一部にみられた。さらに輪 郭を再度精査すると、直線的な溝状の輪郭が現れ た。

ここでは SX02 を窯跡状遺構と呼称して、窯と同様の部位を念頭に説明を加える。

窯体としては焼成室後半部と煙道部を除く範囲を検出している。検出できた窯体の規模は全長が5.76 m、最大幅が2.33 mで細長い砲弾形を呈する。燃焼室は長さが2.30 m、幅1.44 mをはかる。焼成室は検出できた規模が3.46 m、幅2.33 mをはかる。検出した焼成室は奥が垂直に近い壁となり、本来の窯焼成室の傾斜に比べ著しく強いことから、煙道部相当の部分は掘削しなかったも



第 20 図 SX01 断面図



第 21 図 SX02 平面·断面図

のとみられる。窯体の掘削中に天井・壁面が崩落 したことがその要因と考えられる。

焼成室及び燃焼室共に天井は残っていなかった。遺構内の堆積状況は、上層部分は黄褐色細粒砂から中粒砂が堆積するが、それを掘り下げると、下層には赤色粘土と灰色砂が縞模様を呈するように見られ、遺構の形状に沿って同心円状に広がった。念のためテラス状になる現況を測量して断ち割りを行なったところ、赤色粘土は基盤層のブロックが崩落したような状態で、それに灰色砂が交互に堆積する様子がうかがえた。同層が焼成室全体に認められることから、崩落した天井壁を含む層であると考えられる。

分焔柱に相当する遺構を焼成室と燃焼室の境界部で検出した。基底部の規模が0.58×0.51 mをはかり、平面形は方形を呈する。通焔孔は左右のうち右側のものは貫通するが、左側のものは貫通するものの、天井部が維持できず崩落している。通焔孔は最大幅が右側で0.43 m、左側で0.44 mをはかり、SY01の分焔柱の通焔孔に比べ若干狭い。床面の傾斜については表1に示すとおり、燃焼室相当の床面はほぼ平坦で、基盤層を削り出して床面とするようである。焼成室の床面は燃焼室側から奥へ向かい上昇する。

燃焼室相当を平面的に掘り下げを行なったところ、分焔柱相当の基盤層が露出する位置から北へ長方形状に遺構の輪郭がみられた。壁面の立ち上がりは垂直に近く、急傾斜となることが明らかとなった。この付近の堆積状況は灰色砂が認められ、焼成室相当の位置で認められた崩落土に相当する赤色粘土と灰色砂で構成される縞状の層は認められなかった。堆積状況から、燃焼室相当は自然堆積により埋没したものと考えられる。

なお、窯を構築する際に通常は窯体の掘削を終えた後に火入れをし、一度空焚きを行なうという。しかしながら、この SXO2 は壁面が被熱する箇所や、埋土から焼土や炭化物などは一切出土しなかった。このため、掘削途中で天井・壁面が崩落したことから、空焚きする以前に構築自体を放棄したものと推定される。

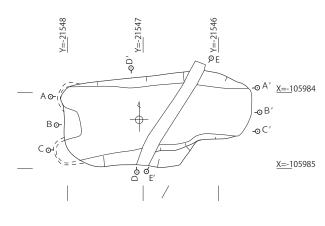
焼成室相当の堆積土からは上層部分から山茶碗が若干出土しているが、赤色粘土と灰色砂の縞状の堆積がみられた下層では出土しなかった。一方、燃焼室相当からは埋没途中の層から山茶碗が出土している。これら出土遺物は融着する資料も若干認められたが、天井崩落土に窯体の掘削を放棄した後に堆積したものとみられ、この遺構の下限年代を示すものと考えられる。

出土遺物は第41図に示すような土器がみられ、 片口鉢とみられる土器が1点(235)出土している。

SK01 (第 22·23 図)

自然流路として調査を行なっていた SX02 を掘 削する際に、SX02の範囲内の北端に不整長方形 を呈する落ち込みが認められた。当初、堆積土の 区別ができなかったため SX02 の一部として掘り 下げを進めたところ、山茶碗がまとまって出土す ることが判明した。周辺を再度精査したところ、 長軸を東西にもつ長方形土坑が自然流路に切られ るように検出できた。掘り下げをすでに行なって いる状況であったため、遺構の直交方向にベルト を設定できず、やむなく東に偏した位置に北東 一南西方向のベルトを設定し堆積状況を確認し た。埋土は第23図に示すとおり単層であった。 SYO2 の埋土との区別は困難であったが、平面的 に精査を行なった際に、SK01の輪郭が途中で途 切れることから、自然流路 SX02 によって削られ ているものと考えた。SX02 の埋没と SK01 の埋 没はほぼ同時期である可能性が高いと考えてい る。埋土の特徴からは人為的に埋め戻されたよう な状況ではなく、均一な堆積であることから自然 に埋没したものと考えられる。

遺構は底面がほぼ平坦で、遺構の断面形は短軸方向が箱形を呈する。一方、長軸方向は東側が削られているが、西側は同じく箱形を呈する。遺構の規模は長軸が2.48 m、短軸が1.21 m、検出面からの深さ0.46 mをはかる。遺構の西辺は、北西隅と北東隅が遺構の上端よりも奥側をえぐり取るようにオーバーハングする。またその位置に山茶碗が出土している。この位置のほかにも第













1.10YR6/6 明黄褐色中粒砂(10YR5/4 にぶい黄褐色中粒砂を含む。) 2.2.5Y5/6 黄褐色細粒砂(ややしまる。山茶碗、焼土塊を少量含む。)



第 22 図 SK01 平面・断面図

23 図に示すとおり、山茶碗などがまとまって出土しており、意図的に配置した可能性が強い。

遺構の周囲にこれに伴う遺構は見つからなかった。すでに触れたように、山茶碗は遺構内の壁際に沿って出土している。遺構の中央部を避けるように配置されているようである。出土した山茶碗は

碗と小皿で、碗の多くは焼成不良品である。失敗 作を最終的に廃棄した可能性も考えられる。遺構 の性格は規格的な長方形を呈することから、その 形状に意味があるものと考えられるが、現時点で は不明である。西辺の両隅がオーバーハングする ことも何かを意味するものと考えられるが、判然と しない。今後の調査に類例の増加を期待したい。

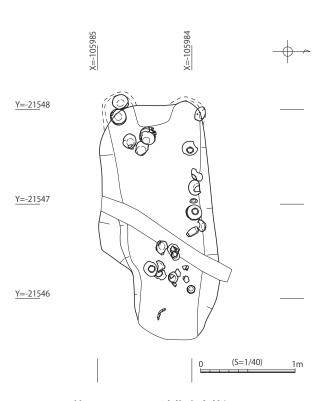
出土遺物は第 40 図に示すような土器が出土しており、融着する土器も出土している。

SK02 (第 24 · 25 図)

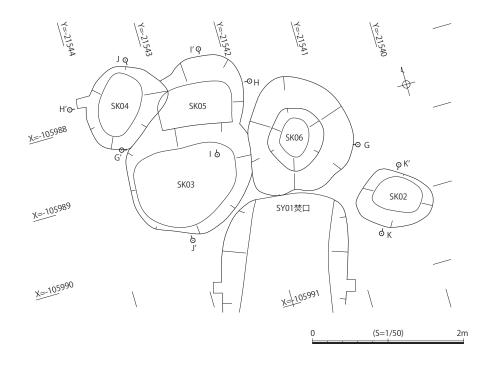
SY01 前庭部で検出した土坑で、遺構の北側は 削平を受けている。SY01 焚口の北東 0.2 mに位置する。検出できた遺構の規模は 0.96 × 0.73 m、検出面からの深さが 0.41 mをはかる。遺構の平面形は楕円形を呈し、東西に長軸をおく。埋土から細片化する山茶碗や小皿などのほかに、窯壁や炭化物なども含まれる。埋土が混合土であり、後述するほかの土坑などと同様、SY01 より掻き出した土器などを廃棄した可能性が強い。

SK03 (第 24 · 25 図)

SY01 前庭部で検出した土坑で、SY01 焚口の 北西 0.1 mに位置する。北側に SK05 と接してお



第 23 図 SK01 遺物出土状況図



第 24 図 土坑群平面図

り断面を検討したが、前後関係は明らかにできなかった。後述するように埋土が共通するため、同時に埋没した可能性も考えられる。遺構の規模は1.64 × 1.43 m、検出できた深さは0.70 mと深く大型の土坑である。遺構の平面形は楕円形を呈し、東西方向に長軸をおく。遺構の断面形は底面が平坦なU字形を呈する。SK05 との底面に10cm程度の高低差が生じている。埋土は細分が可能で、いずれも異なる性質の混合土である。しまりが弱く、人為的に埋められている可能性が高い。埋土からは細片化する多量の山茶碗や小皿のほか、窯壁や焼台なども少量であるが認められる。SY01 より掻き出した土器などを廃棄した可能性が強い。

SK04 (第 24 · 25 図)

SKO3 の北西に接する土坑で、東側には SKO5 と切り合い関係にある。非常に浅いため、接する土坑との切り合い関係は不鮮明ながら断面を検討した結果、SKO3・SKO5 を切るものと考えておく。 遺構の規模は 1.13 × 0.86 m、検出できた深さは 0.25 mをはかる。遺構の平面形は楕円形を

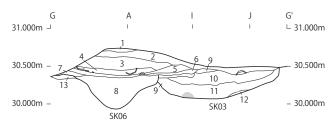
呈し、南北方向に遺構の長軸をおく。遺構が浅い

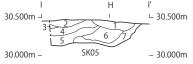
ことから埋土も残りが悪く、隣り合う遺構との埋

土の違いはほとんどないことから、ほぼ同時に埋没した可能性が高い。遺構の断面形は浅い皿状を呈する。埋土から少量であるが、細片化する山茶碗や小皿などとともに、炭化物や焼土が認められた。薄い炭化物層も認められたため、これも遺物などとともに SYO1 より掻き出された可能性が高い。

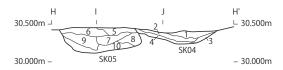
SK05 (第 24 · 25 図)

SK03 の北に位置する土坑で、先述のとおり SK03 との前後関係は明らかにできなかった。すでに述べたとおり SK03 と埋土が共通するため、同時に埋没した可能性も考えられる。遺構の西側には SK04 があり、SK04 が切る。遺構の平面形は楕円形を呈するものと考えられるが、SK04 に切られるため、本来の形状は不明である。検出できた規模は 1.11 × 0.90 m、検出面からの深さは 0.29 mをはかる。遺構の底面はほぼ平坦であり、断面形は U字形を呈する。埋土は細分が可能であるが、いずれの層も異なる性状の層の混合土であり、炭化物や焼土などを多く包含する。埋土からは他の土坑と同様、細片化する山茶碗や小皿などの土器類や窯壁なども含まれる。また炭化物層も認められ、これも遺物などとともに SY01 よ

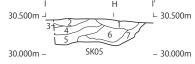




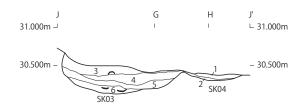
- 1. 10YR5/6 黄褐色粘土質シルト(2.5Y6/4 にぶい黄色粘土質シルト
- を含む。しまりやや弱。SY01流入土。) 黄褐色粘土質シルト(10YR5/6 黄褐色粘土質シルトを含 2. 10YR5/8
- む。しまりやや弱。SY01流入土。) 明黄褐色極細粒砂(10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質極 3. 10YR6/6
- 細粒砂を含む。しまりやや弱。整地土か。) にぶい黄褐色シルト質極細粒砂(10YR6/4 にぶい黄橙色 4. 10YR4/3 シルト質極細粒砂を含む。しまりやや弱。整地土か。
- 暗褐色シルト質極細粒(炭化物・焼土を多量含む。窯壁を少量含む。しまりやや弱。第 1 次炭化物層。) 5. 10YR3/3
- 明黄褐色シルト質極細粒砂(しまりやや弱。) 6. 2.5Y6/6
- 7. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂(10YR6/6 明黄褐色シル ト質極細粒砂を含む。炭化物・焼土をやや多量含む。しまり やや強。SK06。)
- にぶい黄褐色シルト質極細粒砂と10YR5/6 黄褐色シルト質極細粒砂の混合土。炭化物・焼土・窯壁を多量含む。しま 8. 10YR4/3 り弱。SK06。)
- 灰黄褐色シルト質極細粒砂(炭化物を多量含む。焼土を少 9. 10YR4/2
- 量含む。しまりやや弱。SK03。) 明黄褐色シルト質極細粒砂(10YR5/4にぶい黄褐色シルト 10 10YR6/6 質極細粒砂を含む。炭化物・焼土を少量含む。しまりやや強。
- 暗褐色シルト質極細粒と10YR6/4 にぶい黄橙色シルト質 11. 10YR3/3 極細粒砂(炭化物・焼土を多量含む。焼台・窯壁を少量含む。 しまりやや弱。SKO3。)
- にぶい黄褐色シルト質極細粒砂(10YR6/6 明黄褐色シル 12. 10YR4/3 ト質極細粒砂を含む。炭化物・焼土を多量含む。窯壁を少量 含む。しまりやや弱。SK03。)
- にぶい黄橙色シルト質極細粒砂(10YR3/3 暗褐色シルト 13 10YR6/3 質極細粒を含む。しまり強。)



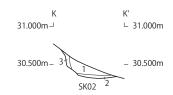
- にぶい黄橙色シルト質極細粒砂(しまりやや強。SK04。) 1. 10YR6/4
- 黒褐色シルト質極細粒砂(しまりやや弱。炭化物層。SK04。)
- 3. 10YR6/6 明黄褐色極細粒砂(しまりやや強。SK04。)
- 黄褐色シルト質極細粒砂(10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質 4 10YR5/6 極細粒砂を含む。炭化物・焼土を少量含む。しまりやや強。 SK04。)
- にぶい黄褐色シルト質極細粒砂(10YR5/6 黄褐色極細粒砂 5. 10YR4/3 を含む。炭化物をやや多量含む。しまり強。SK05。) 灰黄褐色シルト質極細粒砂(10YR6/6 明黄褐色極細粒砂を
- 6. 10YR4/2 含む。炭化物・焼土を少量含む。しまりやや強。SK05。)
- 黄褐色シルト質極細粒砂と10YR4/4 褐色粘土質シルトの混合土(炭化物・焼土・窯壁を多量含む。しまり強。SK05。) 7. 10YR5/8
- にぶい黄褐色シルト質極細粒砂(10YR6/6 明黄褐色極細粒砂を含む。炭化物を少量合む。しまりやや弱、SKO5。) にぶい黄褐色シルト質極細粒砂(炭化物を多量含む。焼土を少量含む。しまりやや弱。SKO5。) 9. 10YR4/3
- 黒色シルト(炭化物多量含む。焼土・窯壁少量含む。炭化物層。 10.10YR2/1



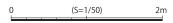
- にぶい黄褐色シルト質極細粒砂(10YR5/6 黄褐色極細粒砂を含む。炭化物をやや多量含む。しまり強。) 黄褐色極細粒砂と10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂 1. 10YR4/3
- 2 10YR5/6 の混合土(炭化物・焼土を少量含む。しまりやや強。)
- 灰黄褐色シルト質極細粒砂(炭化物・焼土を少量含む。しまり 3. 10YR4/2
- 明黄褐色シルト質極細粒砂(10YR5/4にぶい黄褐色シルト質 4. 10YR6/6 極細粒砂を含む。炭化物・焼土を少量含む。しまりやや強。)
- 暗褐色シルト質極細粒砂と10YR6/4 にぶい黄橙色シルト質 5. 10YR3/3 極細粒砂の混合土(炭化物・焼土を多量含む。窯壁を少量含む。
- しまりやや弱。) 黄褐色シルト質極細粒砂と10YR4/4 褐色粘土質シルト(炭化 6. 10YR5/8 物・焼土・窯壁を多量含む。しまり強。)
- 黒色シルト(炭化物多量含む。焼土・窯壁少量含む。炭化物層。) 7 10YR2/1
- 8. 2.5Y6/6 明黄褐色シルト質極細粒砂(しまりやや弱。)



- 1.10YR3/2
- 2.10YR5/6
- 黒褐色シルト質極細粒(しまり弱。炭化物層。SKO4。) 黄褐色シルト質極細粒砂(10/R4/3 にぶい黄褐色シルト質極 細粒砂を含む。炭化物・焼土を少量含む。しまりやや強。SKO4。) 黒褐色シルト質極細粒(10/R6/4 にぶい黄褐色シルト質極細 粒砂を含む。炭化物・焼土を多量含む。窯壁を少量含む。しまり 3.10YR3/2 やや弱。SK03。)
- 4.10YR6/6 明黄褐色シルト質極細粒砂(10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質
- 極細粒砂を含む。炭化物・焼土を少量含む。しまりやや強。SKO3。) 暗褐色シルト質極細粒と10YR6/4 にぶい黄褐色シルト質極細 粒砂の混合土(炭化物・焼土を多量含む。焼台・窯壁を少量含む。 しまりやや弱。SK03。
- 6.10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂(10YR6/6 明黄褐色シルト質 極細粒 砂を含む。炭化物・焼土を多量含む。窯壁を少量含む。し まりやや弱。SK03。)



- 1.10YR3/2 黒褐色シルト質極細粒砂(10YR6/6 明黄褐色極細粒砂を含む。 炭化物を多量に含む。焼土塊を少量含む。窯壁を多量に含む。 しまりやや強。炭化物層。)
- 2.10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルトと10YR6/6 明黄褐色粘土質シルト
- の混合土(硬くしまる。) にぶい黄褐色シルト質極細粒砂と10YR6/6 明黄褐色シルト質 3.10YR5/4 極細粒砂の混合土(しまり弱。)



第 25 図 土坑群断面図

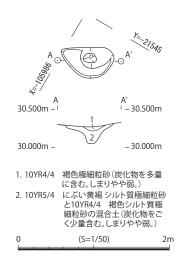
り掻き出された可能性が高い。

SK06 (第 14 · 24 · 25 図)

SY01 の焚口の北に接する位置で検出した土坑 である。遺構の西側に SKO3 が接する。断面の検 討の結果 SK03 を切ることが明らかである。遺構 の平面形は楕円形を呈し、遺構の規模は 1.56 × 1.44 mをはかり南北方向に長軸をおく。SY01 の

焚口を切っており、深さは 0.44 mをはかる。遺 構の断面形は他の土坑と異なり船底形あるいはV 字形を呈し、遺構の中位付近に狭い段を有する。

埋土は炭化物や焼土を多量に含むシルト質極細 粒砂の混合土で、しまりは弱い。特に分層できな いことや混合土であることから、一挙に埋められ た可能性が強い。埋土からは細片化する山茶碗や



第 26 図 SP01 平面·断面図

小皿などのほかに、窯壁なども含まれる。土坑埋 土の上面には SY01 燃焼部から連続する堆積土が 認められ、掻き出されたとみられる炭化物層(第 14 図 53 層、第 25 図 G ライン 5 層)が上面を覆う。 この炭化物層は平面的には土坑群の範囲に対応し ており、土坑群は炭化物層を掘り下げて検出した。 このことから、SY01から炭化物などを掻き出し た際には土坑群は埋まっており、焼成のたびに行 なわれた掻き出しにより整地を行なった可能性が 考えられる。調査では SY01 から掻き出された炭 化物層を2層(第14図51・53層)確認しており、 少なくとも2回は掻き出す行為が認められる。ま た、掻き出しと整地を行なうたびに焚口付近の高 さが上昇していったものと考えられる。燃焼部の 説明の際にも述べたが、この炭化物層には多量の 山茶碗や小皿などが認められた(第18図)。

なお、土坑群出土遺物の整理作業中に SKO2・SKO4・SKO5 から出土した山茶碗が接合した。このことは、これら土坑群が同時期に埋没したことを示唆するものである。

SP01 (第 26 図)

SK01 の南西 1.2 mの位置に検出したピット状の遺構である。SY01 前庭部から北西部に 1.5 m に位置する。

遺構の平面形は不整楕円形を呈し、長軸を南北におく。規模は 0.70 × 0.41 m、検出面からの深さ 0.46 mをはかる。遺構の断面形は両端が開

くU字形を呈する。埋土は上下2層に分層できる。 炭化物を少量含み、柱痕跡は確認できなかった。 遺物は出土しなかったため、遺構の年代も不明で ある。組み合う遺構もなく、SY01など周辺遺構 との関連性についても不明である。

第4節 遺物

本調査で出土した遺物はコンテナ96箱を数える。出土遺物の大半を中世の山茶碗と小皿が占める。また小碗も一定量が出土した。このほかに片口鉢、短頸壺もごく少量出土している。土器以外は窯道具である焼台がある。ほかに構築材や燃料材などが炭化物となって出土しているが、これについては第5章の自然科学分析の結果に譲ることとする。

出土した山茶碗は形態的特徴から細分が可能である。山茶碗はシンプルな形態を有することから、型式変化が追いやすく、外形的特徴や高台の特徴などを指標に編年案が先学により提示されている。

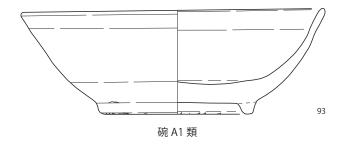
上入道古窯は知多半島の根元に位置する。猿投丘陵から連続する丘陵上に位置することから、地域的には猿投窯に含まれるものと理解されるが、知多窯からも近く、相互の緩衝地帯でも言うべき位置にある。

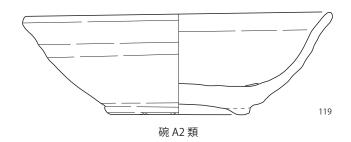
甕など大型貯蔵品を生産しない点からすると、 猿投窯に属するものと感覚的には含まれると思わ れ、本報告では基本的に藤澤編年を用いることとする。

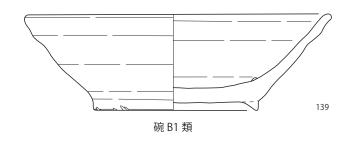
これまで刊行された報告書においても、同様な 形態的特徴を指標に細分が試みられている。それ らの多くは、体部の形状が曲線的か直線的か基準 となっている。また、口縁部で外反するかどうか も細分の基準として用いられている。ほかに法量 の相違なども基準として設定されているが、これ らの形態的特徴のほかに、容量計測による細分を 試みた事例もあり、その違いは山茶碗使用者の立 場からすると大きなウエイトを占める可能性があ り興味深い(1)。器壁の厚さも個体差がかなりあり、 手に取った際の印象が全く違うものも多くあるこ とを調査する中で感じた。これも当時の山茶碗使 用者の立場としては重いか軽いかという感覚的な 違いではあるが、この点も重要であろうと考える。 出土した遺物の集計方法は、山茶碗類については 底部 6/12 以上残存するものを 1 個体という基準 を設定して、個体数の算出を行なった。融着遺物 は同じく底部の残存するものの個体数を可能な限 りカウントした。そのほかの遺物については残存

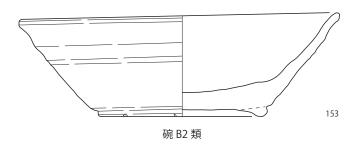
出土地点	山茶碗	小皿	小碗	片口鉢	片口碗	短頸壺	無台碗	遺構別合計
SY01 燃焼室床面	70	40	0	0	0	0	0	110
SY01 焼成室床面	32	6	0	0	0	0	0	38
SY01 床面下施設	621	104	9	0	0	0	6	740
SY01 33層	103	37	0	0	0	0	0	140
SY01 7・8・9層	13	12	0	0	0	0	0	25
SY01 炭化物層	2	0	0	0	0	0	0	2
SY01 流入土	71	51	8	0	0	1	1	132
SX01	34	0	4	0	0	0	0	38
SX02	62	74	8	1	0	0	6	151
SX03	10	12	2	0	0	0	0	24
SK01	29	6	0	0	0	0	0	35
SK02	2	1	0	0	0	0	0	3
SK03	16	20	5	0	0	0	0	41
SK04	2	0	1	0	0	0	0	3
SK05	6	8	2	0	0	0	0	16
SK06	3	14	0	0	1	0	0	18
表土・包含層等	161	63	3	1	0	1	0	229
合計	1237	448	42	2	1	2	13	1745

表 2 遺構別遺物集計表



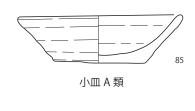


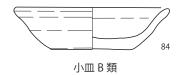




碗 A1 類	曲線的な体部に口縁部は直線 的に立ち上がる。
碗 A2 類	曲線的な体部に口縁部は外反 して立ち上がる。
碗 B1 類	直線的な体部に口縁部は直線 的に立ち上がる。
碗 B2 類	直線的な体部に口縁部は外反 して立ち上がる。

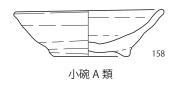
小皿A類	平底の底部から口縁部まで直 線的に立ち上がる。
小皿 B 類	平底の底部から曲線的に立ち 上がる。
小皿C類	突出する平底の底部から口縁 部まで直線的に立ち上がる。
小皿 D 類	突出する平底の底部から曲線 的に立ち上がり、口縁部で外 反する。







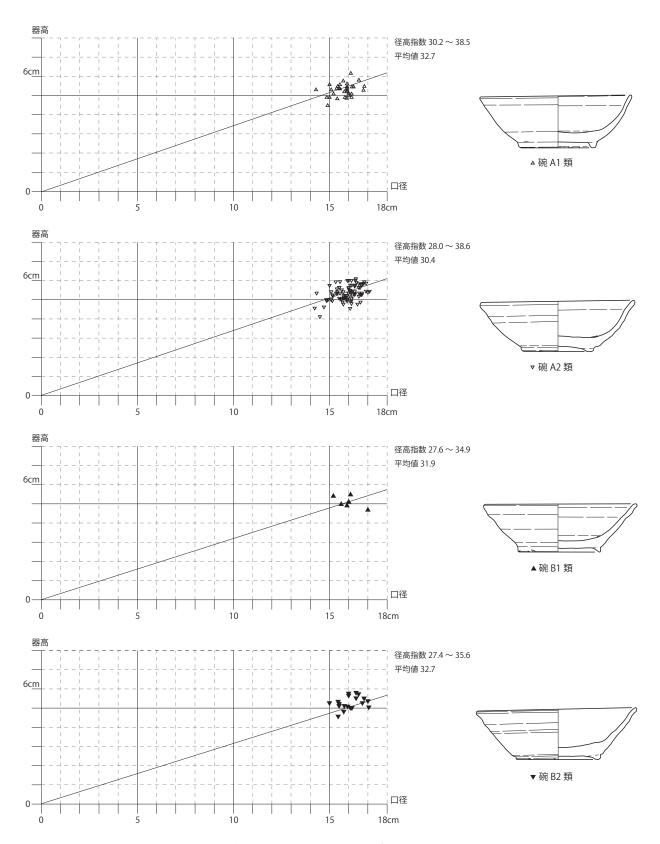




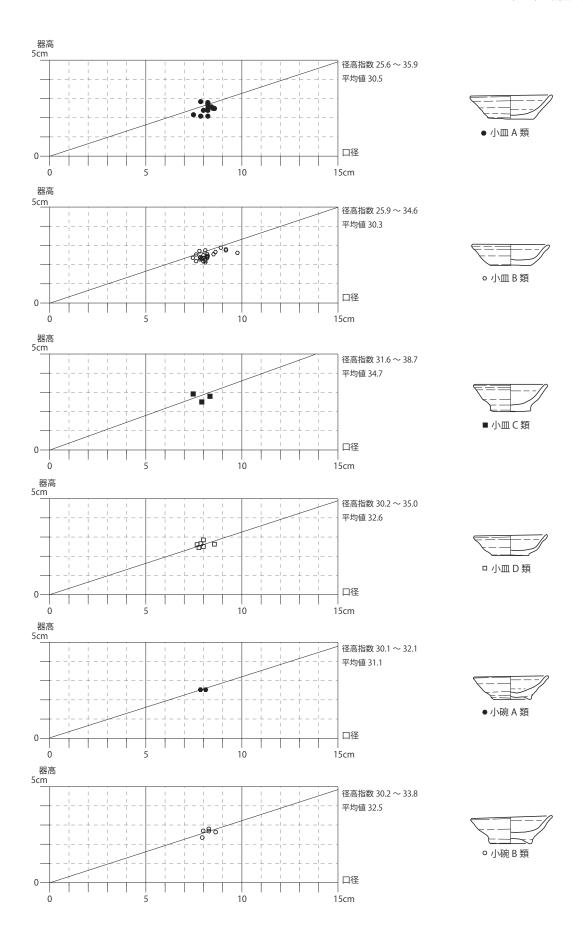


小碗A類	低い高台を有する底部から口 縁部まで直線的に立ち上がり 器高は B 類より低い。
小碗 B 類	低い高台を有する底部から曲 線的に立ち上がる。

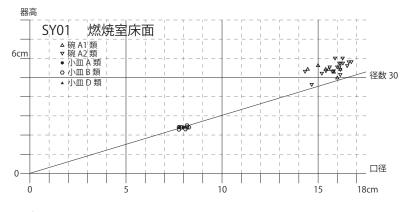
第 27 図 器種分類図



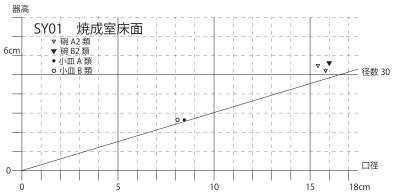
第 28 図 器種別径高指数グラフ (1)



第29図 器種別径高指数グラフ(2)



形態分類	径高指数	平均值
碗 A1 類	$31.3 \sim 37.3$	33.6
碗 A2 類	$31.2 \sim 37.7$	34.5
碗 B1 類		
碗 B2 類		
小皿A類	$30.0 \sim 30.0$	30.0
小皿B類	$28.4 \sim 31.3$	33.2
小皿C類		
小皿D類	$30.8 \sim 30.8$	30.8
小碗A類		
小碗B類		



形態分類	径高指数	平均值
碗 A1 類		
碗 A2 類	$32.9 \sim 35.1$	34.0
碗 B1 類		
碗 B2 類	$35.0 \sim 35.0$	35.0
小皿A類	$31.0 \sim 31.0$	31.0
小皿 B 類	$32.1 \sim 32.1$	32.1
小皿C類		
小皿D類		
小碗A類		
小碗 B 類		

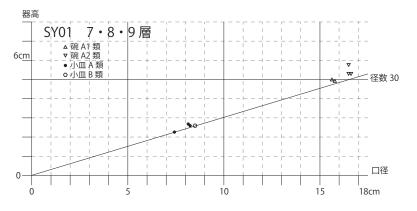
器器	5					
	SY01 33層					
6cm	▲ 碗 A1 類 ▼ 碗 A2 類					T -
		++			₽ ₽ ₽	→ - + - → ▼
+					V V	径数 30
+		++				- + -
+			8-0			- -
+		+				L _
4					 -	· - -
0			1 1			口径
0	1 1 1 1		10		15	18cm

形態分類	径高指数	平均值
碗 A1 類	$33.7 \sim 36.3$	34.9
碗 A2 類	$32.3 \sim 36.1$	34.1
碗 B1 類		
碗 B2 類		
小皿A類	$29.3 \sim 29.4$	29.4
小皿B類	$28.9 \sim 33.3$	31.6
小皿C類		
小皿D類		
小碗A類		
小碗 B 類		

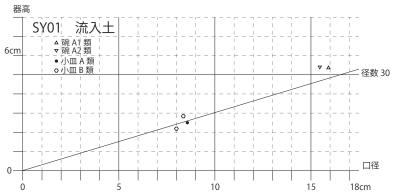
器	5					
	SY01 床面下	施設				i
6cm	▲ 碗 A1 類 ▼ 碗 A2 類					- -
	▲ 碗 B1 類 ▼ 碗 B2 類					全 径数 30
		1 1			, A	11250 30
	●小碗A類	+				- + -
+			0 0			- -
-			+ + -			- <u> </u> -
-		-				- -
0						口径
Ó		5	10		15	18cm

形態分類	径高指数	平均值
碗 A1 類	$29.2 \sim 35.7$	33.0
碗 A2 類	$28.0 \sim 38.6$	32.8
碗 B1 類	$27.6 \sim 34.9$	31.5
碗 B2 類	$29.8 \sim 35.6$	29.9
小皿A類		
小皿B類	$26.8 \sim 32.6$	30.1
小皿C類		
小皿D類	$31.3 \sim 35.0$	33.1
小碗 A 類	$32.9 \sim 32.9$	32.9
小碗 B 類		

第 30 図 遺構別径高指数グラフ(1)



形態分類	径高指数	平均值
碗 A1 類	$31.0 \sim 31.0$	31.0
碗 A2 類	$29.3 \sim 31.9$	32.8
碗 B1 類		
碗 B2 類		
小皿A類	$29.3 \sim 32.9$	31.7
小皿B類	$32.9 \sim 32.9$	32.9
小皿C類		
小皿D類		
小碗A類		
小碗 B 類		



形態分類	径高指数	平均值
碗 A1 類	$33.3 \sim 33.3$	33.3
碗 A2 類	$34.2 \sim 34.2$	34.2
碗 B1 類		
碗 B2 類		
小皿A類	$29.1 \sim 29.1$	29.1
小皿B類	$30.6 \sim 30.6$	30.6
小皿C類		
小皿D類		
小碗A類		
小碗B類		

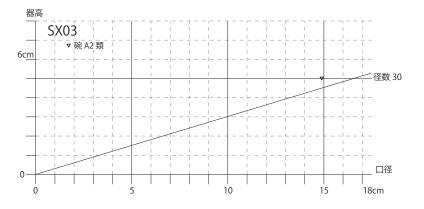
器						
	SX01	 -				_
6c <u>m</u>	△ 碗 A1 類 ▼ 碗 A2 類 ▼ 碗 B2 類			 	 ▽ Δ	 -
		+		A	V V	├── 径数 30
-						 - -
-						 -
0						口径
0		5	10	1	5	18cm

形態分類	径高指数	平均值
碗 A1 類	$33.1 \sim 37.1$	35.2
碗 A2 類	$30.6 \sim 35.8$	32.4
碗 B1 類		
碗 B2 類	$27.4 \sim 27.4$	27.4
小皿A類		
小皿B類		
小皿C類		
小皿D類		
小碗A類		
小碗 B 類		

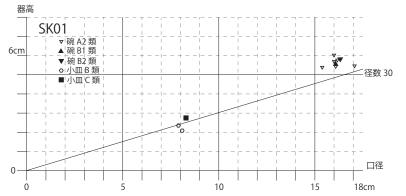
器	高				
	SX02				
6cm	▼碗 A2 類 ● 小皿 A 類				
	o小皿B類				▼
	□■小皿C類□	1 1		•	▼
	▲小皿D類				
			1000		1
_					
0—					¦ - -
C)	5	10	15	18cm

形態分類	径高指数	平均值
碗 A1 類		
碗 A2 類	$30.2 \sim 33.8$	32.7
碗 B1 類		
碗 B2 類		
小皿A類	$32.9 \sim 32.9$	32.9
小皿B類	$30.2 \sim 33.8$	32.2
小皿C類	$38.7 \sim 38.7$	38.7
小皿D類	$33.8 \sim 33.8$	33.8
小碗A類		
小碗 B 類		

第 31 図 遺構別径高指数グラフ (2)



形態分類	径高指数	平均值
碗 A1 類		
碗 A2 類	$33.6 \sim 33.6$	33.6
碗 B1 類		
碗 B2 類		
小皿A類		
小皿B類		
小皿C類		
小皿D類		
小碗A類		
小碗B類		



形態分類	径高指数	平均值
碗 A1 類	33.3 ~ 33.3	33.3
碗 A2 類	$34.2 \sim 34.2$	34.2
碗 B1 類		
碗 B2 類		
小皿A類	$29.1 \sim 29.1$	29.1
小皿B類	$30.6 \sim 30.6$	30.6
小皿C類		
小皿D類		
小碗A類		
小碗B類		

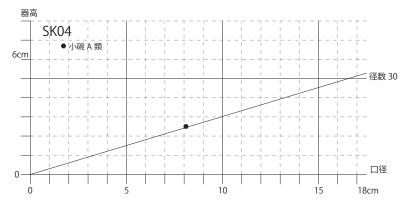
器	高				
	SK02				
6cm	▼碗 A2類 ■小皿 C類				
		1 1 1			
	1 1 1 1	I I I I I I			径数 30
		+1+-	-		- + -
\pm		<u>+</u> <u>+</u> -	-		- -
		+-			_ + _
0—					口径
0)	5	10	15	18cm

形態分類	径高指数	平均值
碗 A1 類	$33.1 \sim 37.1$	35.2
碗 A2 類	$30.6 \sim 35.8$	32.4
碗 B1 類		
碗 B2 類	$27.4 \sim 27.4$	27.4
小皿A類		
小皿 B 類		
小皿C類		
小皿D類		
小碗 A 類		
小碗 B 類		

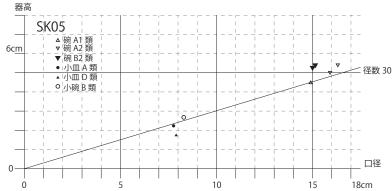
器	高 			 	
	SK03				1
6cm		T I I			T
	• 小皿 A 類 : • 小皿 B 類 :	+ +		 	+ - (日本) 20
	小皿D類	1 1 1		A .	径数 30
_		++		 	+ -
_				 	<u>+</u> -
_		+		 	<u> </u>
_				 	T -
0—					口径
()	5	10	15	18cm

形態分類	径高指数	平均值
碗 A1 類		
碗 A2 類	$30.2 \sim 33.8$	32.7
碗 B1 類		
碗 B2 類		
小皿A類	$32.9 \sim 32.9$	32.9
小皿B類	$30.2 \sim 33.8$	32.2
小皿C類	$38.7 \sim 38.7$	38.7
小皿D類	33.8 ~ 33.8	33.8
小碗A類		
小碗B類		

第 32 図 遺構別径高指数グラフ (3)



形態分類	径高指数	平均值
碗 A1 類		
碗 A2 類		
碗 B1 類		
碗 B2 類		
小皿A類		
小皿B類		
小皿C類		
小皿D類		
小碗A類	$30.9 \sim 30.9$	30.9
小碗B類		



形態分類	径高指数	平均值
碗 A1 類	$30.2 \sim 30.2$	30.2
碗 A2 類	$31.4 \sim 32.5$	32.0
碗 B1 類		
碗 B2 類	$34.2 \sim 34.7$	34.5
小皿A類	$28.2 \sim 28.2$	28.2
小皿B類	$32.5 \sim 32.5$	32.5
小皿C類		
小皿D類	$34.2 \sim 34.2$	34.2
小碗A類		
小碗B類		

器	高 				 	
6c <u>m</u>	SK06 ▼碗 A2 類 • 小皿 A 類 • 小皿 B 類	 +			 	y- + -
_			- +		V	
0-		5	- - -	10	 15	口径 18cm

形態分類	径高指数	平均值
碗 A1 類		
碗 A2 類	$28.9 \sim 36.3$	33.3
碗 B1 類		
碗 B2 類		
小皿A類	$35.9 \sim 35.9$	35.9
小皿B類	$31.1 \sim 31.1$	31.1
小皿C類		
小皿D類		
小碗A類		
小碗B類		

第33図 遺構別径高指数グラフ(4)

率に関わりなく、器種・種別の判明するものを1個体としてカウントした。これを遺構ごとに一覧表(表2)に示した。

今回も報告にあたり前例にならい、細分化を行なうが、あくまで年代差に置き換えられるものではなく、製作者の個人差レベルと位置づけている。以下、器種分類表をもとに説明を加えていく。法量・径高指数(器高÷口径×100)は、平均値を提示した。

1. 土器

(1) 器種分類(第27図)

碗は曲線的な体部をもつA類と、直接的な体部

をもつB類に大別した。ほかに点数が少ないものの、高台を持たない無台碗が認められる。

皿はA・B・C・D類の4つに分類、小碗はA・B類の2つに分類した。

これ以外の器種として片口碗と考えられるものが1点、片口鉢が2点、短頸壺が2点出土している。

碗 A1 類

曲線的な体部から口縁部は直線的に立ち上がる もので、底部は回転糸切り。断面逆三角形の高台 を貼り付け、高台には籾殻痕が認められる。口縁 部から体部の調整は内外面ともに回転ナデ仕上 げ。法量は平均で口径 15.6cm、底径 7.9cm、器 高 5.3cm をはかる。径高指数は 32.7 である。

碗 A2 類

曲線的な体部から口縁部は外反して口縁端部に至る。底部は回転糸切り。断面逆三角形の高台を貼り付け、高台には籾殻痕が認められる。口縁部から体部の調整は内外面ともに回転ナデ仕上げ。法量は平均で口径15.9cm、底径7.7cm、器高5.4cmをはかる。径高指数は30.4である。

碗 B1 類

直線的な体部から口縁部は直線的に立ち上がる。底部は回転糸切り。断面逆三角形の高台を貼り付け、高台には籾殻痕が認められる。口縁部から体部の調整は内外面ともに回転ナデ仕上げ。法量は平均で口径 16.0cm、底径 7.7cm、器高 5.1cmをはかる。径高指数は 31.9 である。

碗 B2 類

直線的な体部から口縁部は外反して口縁端部に至る。底部は回転糸切り。断面逆三角形の高台を貼り付け、高台には籾殻痕が認められる。口縁部から体部の調整は内外面ともに回転ナデ仕上げ。法量は平均で口径16.1cm、底径7.8cm、器高5.2cmをはかる。径高指数は32.7である。

小皿A類

体部は斜外方に直線的に立ち上がり、口縁部に 至る。底部は平底で、回転糸切り。内外面ともに 回転ナデ仕上げ。法量は平均で口径 7.5cm、底径 2.5cm、器高 4.3cm をはかる。径高指数は 30.5 である。

小皿B類

体部は曲線的に立ち上がり、口縁部は外反する。 底部は平底で、回転糸切り。内外面ともに回転ナ デ仕上げ。法量は平均で口径 7.5cm、底径 4.0cm、 器高 2.5cm をはかる。径高指数は 30.3 である。

小皿C類

突出する平底の底部を有し、体部は直線的で口縁部に至る。体部と底部の境界付近は強いナデにより稜をなす。底部がやや厚くなる。内外面ともに回転ナデ仕上げ。底部は回転糸切り。法量は平

均で口径 7.9cm、底径 4.5cm、器高 2.7cm をは かる。径高指数は 34.7 である。

小皿D類

小皿 C 類と同様、突出する平底の底部を有し、 曲線的な体部から口縁部で外反して立ち上がる。 内外面ともに回転ナデ仕上げ。底部は回転糸切り。 法量は平均で口径 7.0cm、底径 3.5cm、器高 2.6cm をはかる。径高指数は 32.6 である。小皿 C 類よ りも器高が浅い。

小碗A類

碗をそのまま小型化したような器形で、体部は 直線的で口縁部も直線的に立ち上がる。底部は回 転糸切りで、断面逆三角形の高台を貼り付ける。 口縁部から体部の調整は内外面ともに回転ナデ仕 上げ。法量は平均で口径 7.9cm、底径 4.1cm、器 高 2.5cm をはかる。径高指数は 31.1 である。出 土点数は少ない。

小碗B類

体部は曲線的で口縁部で外反して口縁端部に至る。底部は回転糸切りで、断面逆三角形の高台を貼り付ける。口縁部から体部の調整は内外面ともに回転ナデ仕上げ。法量は平均で口径 8.3cm、底径 4.3cm、器高 2.7cm をはかる。径高指数は32.5 である。出土点数は A 類同様少ない。

以上のように分類したが、報告した点数は碗がA1類35点、A2類100点、B1類8点、B2類20点、不明5点、無台碗1点、小皿はA類16点、B類34点、C類3点、D類6点、不明1点となる。小碗はA類が3点、B類5点である。その他の器種として短頸壺2点、片口鉢2点、片口碗1点となる。碗A2類と小皿A類が融着するものが1点、碗と焼台が融着するものが1点となる。

(2) 遺物の観察

SY01 燃燒室床面(第 34 図)

SY01 燃焼室床面出土土器で、確認できた 2 回 にわたる掻き出しに伴う遺物である。 1 回目の掻き出しは $1 \sim 6 \cdot 8 \cdot 12 \sim 19 \cdot 24 \sim 34 \cdot 37 \sim 40$ 。 2 回目は $7 \cdot 9 \sim 11$ 、 $21 \sim 23 \cdot 35 \cdot 36$ である。碗 27 点、小皿 13 点を図示した。こ

のうち 19 は碗の融着資料、37~40 は小皿の融着資料である。内訳は碗が A1 類(1~7)7点、A2 類(8~26)20点、不明(27)1点、小皿は A類(28)1点、B類(29~39)11点、D類(40)1点である。碗は A1・A2 類に限られ、B類は出土していない。小皿は B類が最も多い。小碗は出土していない。11 は口縁部を欠く資料で、焼成不良のため、土師質を呈する。底部は回転糸切りで高台を貼り付けるが、自重のためかつぶれている。27 は高台畳付に籾殻・藁・木葉痕が観察できる。

SX01 (第35図)

碗8点を図示した。内訳はA1類(41~43) 3点、A2類(44·45·47·48)4点、B2類(46) 1点である。47·48は融着資料である。碗は A1·A2類が多くを占め、B2類が1点認められた。 小皿は出土していない。43は底部裏面に線刻が 認められ、漢字の「大」と判読できる。

SY01 7 · 8 · 9層 (第 35 図)

SY01 燃焼室 $51 \sim 53$ 層にそれぞれ対応する。 調査時の呼称をそのまま使用した。

碗 5 点、小碗 1 点、小皿 3 点を図示した。内訳は碗が A1 類 (49) 1 点、A2 類 $(50 \sim 53)$ 4 点、小碗は B 類 (54) 1 点、小皿は A 類 $(55 \sim 56)$ 2 点、B 類 (57) 1 点である。碗は A2 類が最も多く、A1 類・B1 類が 1 点ずつ認められた。小皿のほかに小碗 B 類が 1 点出土している。57 の小碗は内部に重ね焼き時に融着した別個体の高台が認められる。

SX03 (第 36 図)

碗1点、不明1点を図示した。内訳はA2類(58)1点、59は小皿あるいは小碗の可能性があるが不明である。底部裏面に高台が剥離したような跡が残る。また、見込み部に重ね焼き時の別個体が融着する。深くなるため、ほかの器種の可能性も考えられる。

SY01 33層(第36図)

碗 12 点、小皿 8 点を図示した。内訳は碗が A1 類 (60 ~ 62) 3 点、A2 類 (63 ~ 71) 9 点、小 皿は A 類 $(72 \sim 73)$ 2点、 B 類 $(74 \sim 79)$ 6 点である。 碗は A 類のみで占められ、 A2 類が最も多い。 小皿も B 類が多くを占める一方、 小碗は出土していない。 小皿の $73 \cdot 79$ が融着資料である。

SY01 炭化物層 (第 36 図)

碗1点を図示した。80はA1類である。

SY01 床面下充填土層(第36図)

碗 1 点を図示した。81 は碗 A であるが、口縁部を欠くため、 $A1 \cdot A2$ の区別は不明。底部裏面にヘラ描きあるいは工具の痕跡が認められる。

SY01 流入土 (第 36 図)

SY01 流入土出土土器であるが、82・85・86 は焼成室内出土。83 は燃焼室内、84 は分焔柱付近出土である。碗2点、小碗1点、小皿2点を図示した。内訳は碗がA1類(82)1点、A2類(83)1点、小碗はB類(84)1点、小皿はA類(85)1点、B類(56)1点である。

SY01 焼成室床面 (第 36 図)

SY01 焼成室内床面、焼台の上部に出土した土 器群である。碗3点、小皿3点を図示した。内訳 は碗がA2類(90)2点、B2類(92)1点、小 皿はA類(88~89)2点、B類(87)1点である。

SY01 床面下施設 (第 37 ~ 39 図)

SY01 床面下施設出土土器で、多量の碗が出土 した。大半が碗であるが、小碗や小皿も認められ た。碗89点、小碗1点、小皿8点を図示した。 内訳は碗が A1 類(93~105·169·177)25 点、 A2 類(106 ~ 134·165 ~ 167·170·171· 175~178)39点、B1類(135~143)9点、 B2 類(144~155·168·172·182·179)16 点、 小碗はA類(156) 1点、小皿はB類(157~ 162) 6点、D類(163・164) 2点である。融 着資料が多く17点図示した。変形する資料も多 いが、比較的硬質な焼成のものが多くを占める。 比率としては A2 類が最も多くを占め、次に A1 類となる。B類も一定量認められる。小皿はB類 が最も多い。小碗もA類が1点認められる。97 は器壁が厚く、重量感がある。111は亀裂が入り、 変形する。藁状の圧痕が認められる。162は10 枚が融着する。また上部に厚く降灰する。178 は6枚が融着するが、上部の見込み部には自然釉が認められず、さらに重なる可能性が高い。またその範囲が狭く、小皿を重ねた可能性も考えられよう。212 は小皿Bで、口径 9.7cm、器高 2.6cm、底径 5.0cm をはかる。やや口径が大きな資料である。

SK01 (第 40 図)

長方形土坑 SKO1 出土土器群である。出土土器の傾向としては灰白色を呈する焼成不良品が多く認められた。このほかに少量であるが融着資料も認められた。碗9点、小皿4点を図示した。内訳は碗がA2類(180~184・187・188) 5点、B1類(185)1点、B2類(186)1点、小皿がB類(189・191・192)3点、C類(190)1点である。碗はA2類が多くを占める。小皿はB類が最も多い。187・188は碗の融着資料、190~192は小皿の融着資料である。187は4枚、188は5枚重なる。190・191は4枚、192は6枚重なる。190は小皿Cで、突出する平底の底部を有する。

SK02 (第 40 図)

SY01 前庭部の土坑群のうちの一つで、焚口の 北東で検出した土坑の資料である。碗1点、小皿 1点を図示した。内訳は碗がA2類(194)1点、 小皿はC類(193)1点である。

SK03 (第 40 図)

SY01 前庭部の土坑群のうちの一つで、碗 4 点、小碗 1 点、小皿 5 点を図示した。内訳は碗が A1類 (201~203) 4 点、B2類 (204) 1 点、小碗は A類 (200) 1 点、B類 (199) 1 点、小皿は A類 (195・196) 2 点、B類 (197) 1 点、D類 (198) 1 点である。碗は A1類が多くを占める。小皿と小碗は少量ずつ出土した。200 は小碗の融着資料で 4枚が重なる。

SK04 (第 40 図)

SY01 前庭部の土坑群のうちの一つで、碗 1 点、 小皿 1 点を図示した。内訳は碗が A2 類(207) 1 点、 不明(206) 1 点、小皿は A 類(205) 1 点であ る。205 は融着資料である。207 は変形が著しい。 貼り付け高台が底部の中央からずれている。

SK05 (第 40 図)

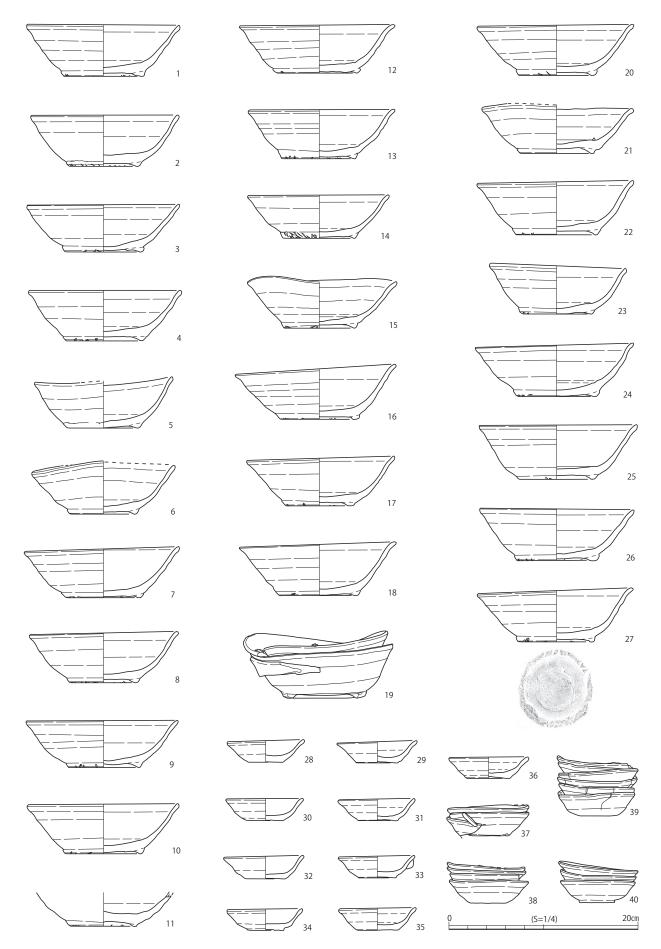
SY01 前庭部の土坑群のうちの一つで、碗 4 点、小碗 1 点、小皿 3 点を図示した。内訳は碗が A1 類(212) 1 点、A2 類(213・214) 2 点、B2 類(215) 1 点、小碗は B 類(211) 1 点、小皿は A 類(208・209) 2 点、D 類(210) 1 点である。208 は小皿の融着資料、215 は碗の融着資料である。208 は 8 枚、215 は 2 枚重なる。

SK06 (第 40 図)

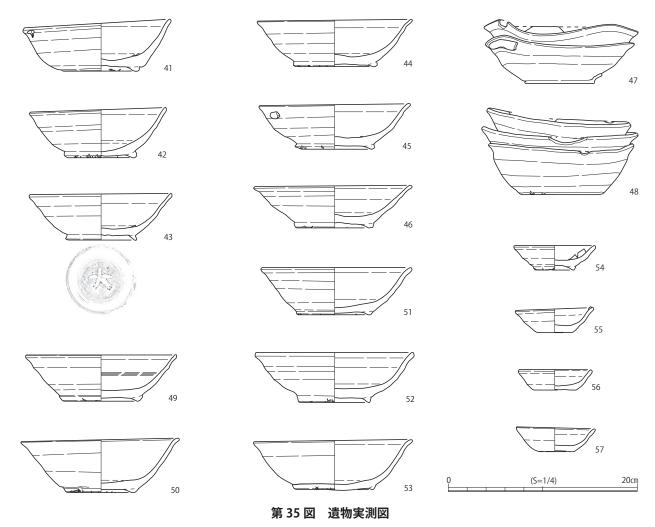
SY01 前庭部の土坑群のうちの一つで、碗 2 点、小皿 4 点、片口碗 1 点を図示した。内訳は碗がA2 類(220・221)2 点、小皿 は A 類(216・219)2 点、B類(217・218)2 点、片口碗(222)1 点である。216・217 は小皿の融着資料である。216 は 2 枚、217 は 6 枚重なる。222 は小片であるが片口碗の片口部であると考えられる。底部以下を欠く。

SX02 (第41図)

窯跡状遺構 SX02 出土土器である。天井・壁面 崩落後に堆積した砂層出土である。碗9点、小 碗3点、小皿4点、片口鉢1点を図示した。内 訳は碗がA2類(223~226・237)5点、B2 類(236)1点、不明(227・228)2点、小碗 はB類(229·230·234)3点、小皿はA類(233) 1点、C類(231)1点、D類(232)1点、片 口鉢(235)1点である。碗はA2類が多くを占 め、B2類が1点出土した。小碗がB類が3点出 土している。235は小片2点で図上復元したも ので、片口鉢と考えられる。236 は B2 類の碗で あるが、高台を欠く資料で内面に厚く降灰する。 形状も通常の碗とは異なり、斜外方へ外反しなが ら開き、さらに口縁部で強く外反する。底部は回 転糸切痕が認められる。高台は剥離痕跡が認め られないことから、無台碗の可能性がある。237 は融着資料であるが、無台碗が5枚重なる。238 は碗 A2 類 3 枚の上に小皿 A2 類が 4 枚重なる資 料である。



第 34 図 遺物実測図 SY01 燃焼室床面 (1 ~ 40)



SX01 (41~48)、SY01 7層 (51) 8層 (49·52·54·55) 9層 (50·53·56·57)

特殊遺物(第41図)

240 は焼台と山茶碗が融着する資料である。 碗は口縁部を欠くが体部の形状から A 類と考えられる。焼成不良で茶褐色を呈する。見込み部に重 ね焼きの痕跡が残る。

焼台は側面にユビオサエが顕著である。底面がほぼ平坦であることから、焼成室内でも床面が平坦な位置に据えられていたものとみられる。 SY01 燃焼室の7層出土。

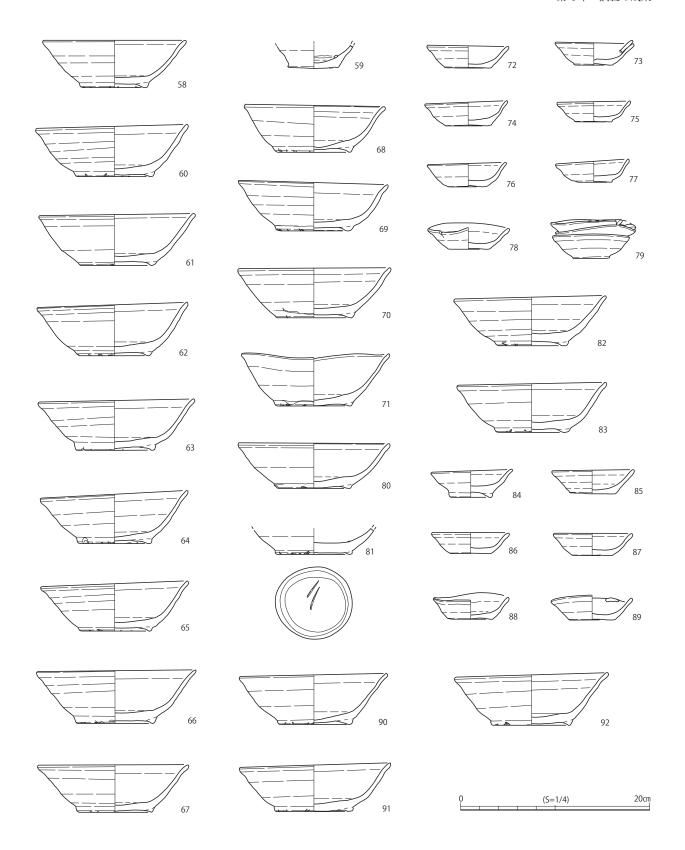
241・242 は短頸壺であると考えられる。241 は短頸壺の口縁部から肩部にかけての資料である。外反する口縁部は低く立ち上がり、胴部はなで肩である。外面と口縁部内面に自然釉がかかる。内外面ともに回転ナデ仕上げ。表土よりの出土である。242 は底部付近の小片で、器壁が厚い。内外面ともに回転ナデ仕上げ。内面に自然釉がかかる。炭焼窯 SXO3 の操業停止後に堆積した流入

土により出土した。

243 は底部付近の小片で片口鉢の可能性が考えられる。高台が剥離するものとみられる。形状から見て片口鉢 I 類になる可能性がある。外面はヘラケズリ調整、内面は回転ナデ仕上げ。SY01周辺の遺物包含層出土資料である。

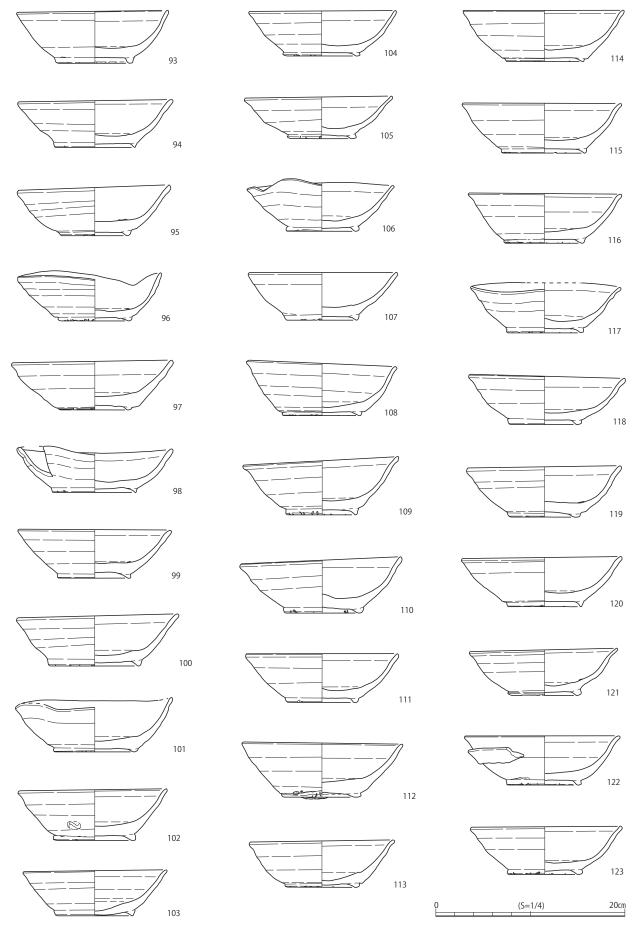
2. 窯道具 (焼台) など (第 42 図)

第4章でも触れたが、いずれも SY01 焼成室最終操業面の床面に、原位置を保つ状態で焼台が据えらえていた。このほかにも SY01 埋土中や、土坑群、遺物包含層、表土中などからも廃棄された焼台が多数出土した。第42 図に示すとおり、SY01 焼成室最終操業面の床面に据えられた136点のうち14点図示した。基本的に円形を呈するものが多く、断面形は据えられた位置によって、形状が異なる。それぞれの計測値などは遺物一覧表に示している。

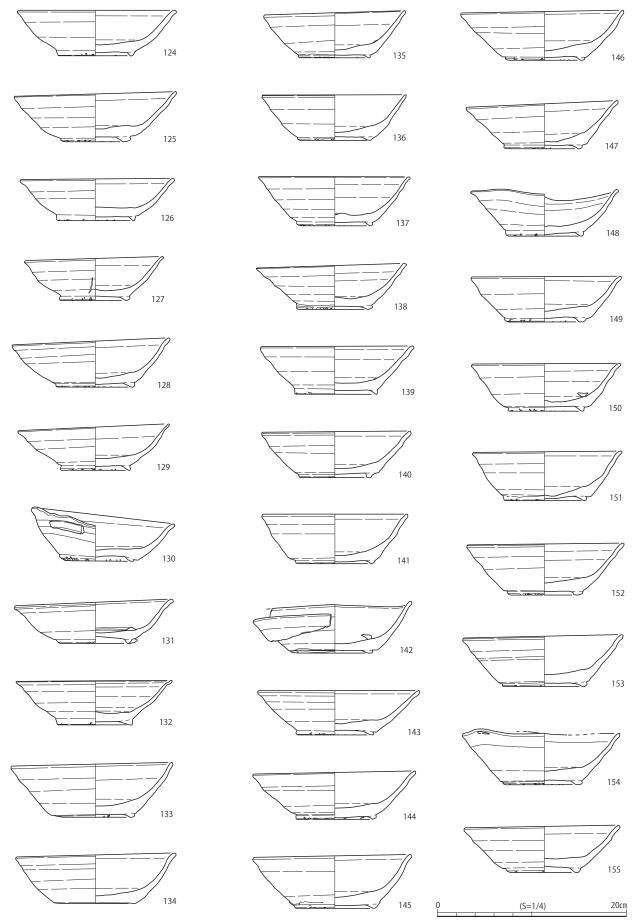


第 36 図 遺物実測図

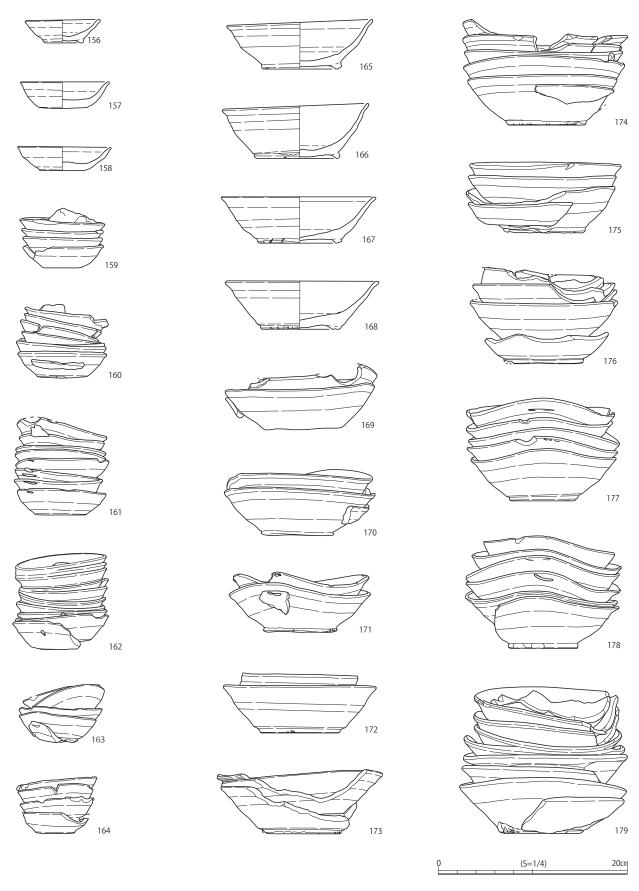
SX03($58\sim59$)、SY01 33 層($60\sim79$)、SY01 炭化物層(80)、SY01 床面下充填土層(81)、SY01 流入土($82\sim86$)、SY01 焼成室床面($87\sim92$)



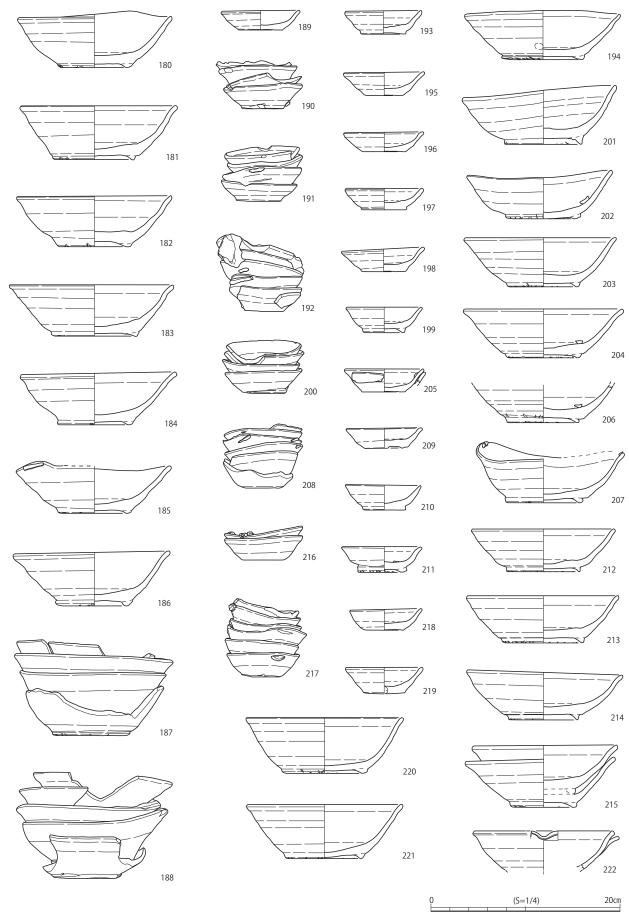
第 37 図 遺物実測図 SY01 床面下施設 (93 ~ 123)



第 38 図 遺物実測図 SY01 床面下施設 (123 ~ 155)

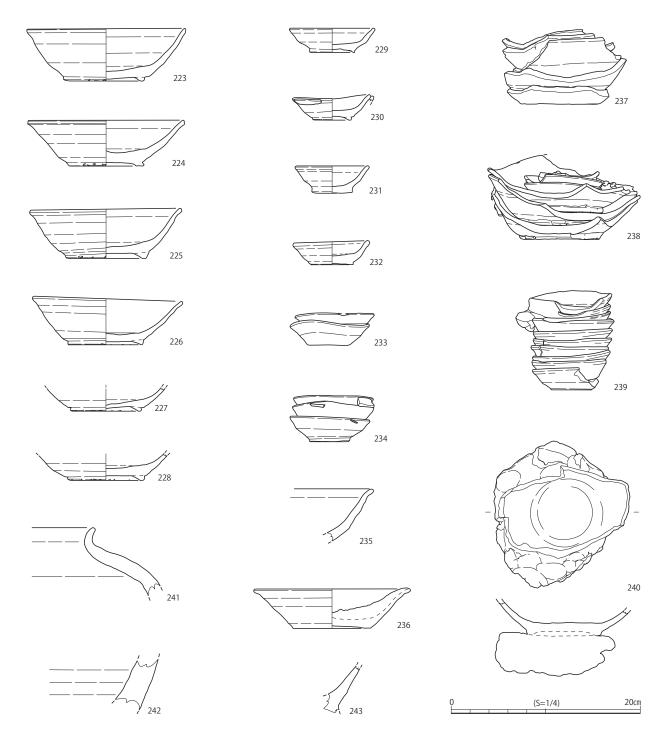


第 39 図 遺物実測図 SY01 床面下施設 (156 ~ 179)



第 40 図 遺物実測図

SK01 $(180 \sim 192)$, SK02 $(193 \sim 194)$, SK03 $(195 \sim 204)$, SK04 $(205 \sim 207)$, SK05 $(208 \sim 215)$, SK06 $(216 \sim 222)$



第 41 図 遺物実測図 SX02 (223 ~ 239)、特殊遺物 (240 ~ 243)

いずれも山茶碗の高台設置痕跡が明瞭に残る。 高台設置痕跡は円形で直径 7.0~8.4cm、平均 7.4cm をはかる。焼台の成形及び床面への設置の 際に、指頭や掌底などで押圧しており、その痕跡 が観察できる。高台設置痕跡の一部に籾殻痕が認 められた。

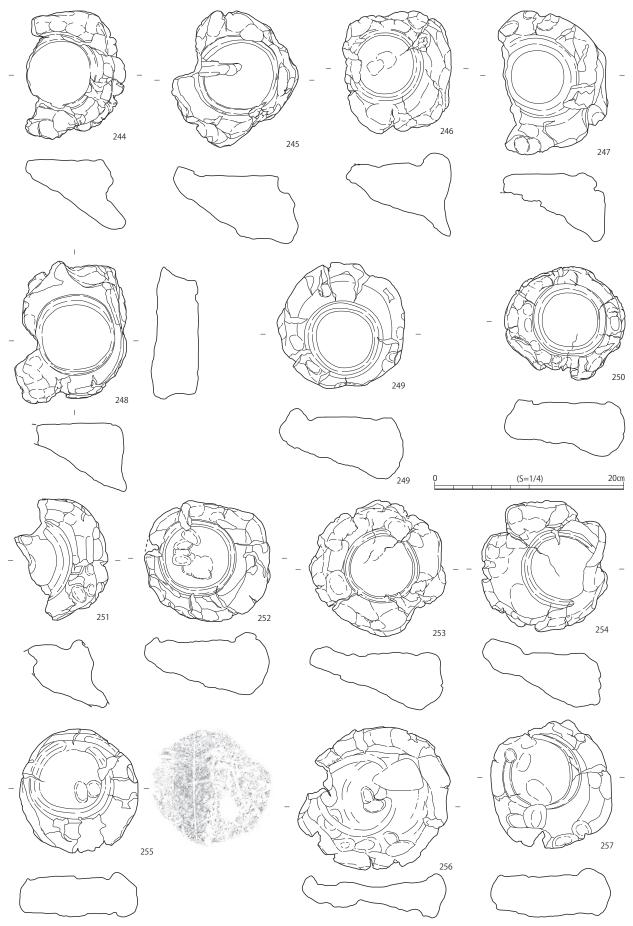
255 は硬く焼締まっており、裏面には木葉痕が残る。焼台の底面は床面の傾斜に合わせて角度

を調整している。

256 は山茶碗のすわる面の厚さが $1.6 \sim 2.1$ cm と薄い。また高台設置痕跡が 2つ重なって観察できる。

註)

1 奥村勝信「第4項 容量の計測法」松田訓ほか『円通寺古墓・ NA335号窯Ⅰ・Ⅱ』(『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』第75 集)財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1998年



第 42 図 遺物実測図 SY01 焼成室床面焼台 (244 ~ 257)

表3 遺物一覧表(1)

12 3	迟机	, ,,,,	ce (- /												
報告書掲載	グリッド	遺構	窯体内グ	層位	器種	分		法量(cm)		残存率	技法なと	の特徴	色調	胎土	備考1	備考2
番号		A53, 117	リッド	但区	111111111111111111111111111111111111111	類	口径	器高	底径	2017	外面	内面		M-T	vm··J I	Vm · 7 2
1	G5	SY01	XI	燃焼室 床面	碗	A2	16. 0	5. 5	8. 4	8/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ6.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.144 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 自然釉付着 付着物 焼成良	
2	G4	SY01	XI	燃焼室 床面	碗	A1	(15. 4)	5. 4	7. 2	9/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	淡黄 2.5Y8/3	密(φ2.5mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.117 貼付高台 籾殻痕 自然釉付着 焼成良	
3	G5	SY01	IX	燃焼室 床面	碗	A1	16. 0	5. 0	8. 0	7/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 10YR8/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.139 貼付高台 焼成良	
4	G4	SY01	XI • X IV	燃焼室 床面	碗	A1	15. 8	5. 3	8. 0	12/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/2	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.146 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 焼成良	変形するため口縁部は 正円をとらない 完形
5	G4	SY01	XI	燃焼室床面	碗	A1	14. 5	5. 4	7.4	11/12	回転ナデ	回転ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ3.0mm以下の長 石、石策、チャートを 含む)	No.126 貼付高台 重ね焼きの痕跡 自然釉付着 付着物 焼成良	変形するため、口縁部 は正円をとらない 計測値は最小径 最大 口径は16.1cm 内面見込部に自然釉の かからないところがあり、重ね焼きした別値 体が存在した可能性が ある
6	G4 • G5	SY01	XI	燃焼室床面	碗	A1	15. 0	5. 6	6.8	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	Na096 貼付高台 自然釉付着 重ね焼きの痕跡 焼成良	変形するため、口縁部 は正円をとらない 体部外面にヘラ書 き?(焼成前、高台貼付 前か?)
7	G5	SY01	ıx • xı	燃焼室 床面	碗	A1	16. 2	5. 4	7.8	8/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.222 (No.223・ No.224・No.225の接合) 貼付高台 籾殻痕 自然釉付着 焼成良	
8	G4	SY01	XI	燃焼室 床面	碗	A1	15. 5	5. 4	7. 0	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/2	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.113 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 焼成良	
9	G5	SY01	XI	燃焼室 床面	碗	A2	15. 9	6. 0	7. 4	7/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰黄 2.5Y7/2	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.200 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 焼成不良	
10	G4 • G5	SY01	XI	燃焼室 床面	碗	A2	15. 8	5. 3	7.8	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	にぶい 黄橙 10YR7/2	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.191(No.194と接合) 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの痕跡 焼成 不良	
11	G4	SY01	XII	燃焼室 床面	碗	A2	_	(3.3)	7. 0	7/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	にぶい 黄橙 10YR7/4	密(φ9.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.180 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 焼成不良	底径は正円をとらず、 数値は最小径、最大底 径は7.9cm
12	G5	SY01	XI • XII	燃焼室 床面	碗	A2	16. 2	5. 1	8. 4	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 サデに ヨコデ	灰白 2.5Y8/2	密(φ8.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.95 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの痕跡 焼成良	
13	G4	SY01	XIII ·	燃焼室 床面	碗	A2	15. 2	5. 2	7.7	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/2	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.156 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 焼成やや不良	
14	G4	SY01	XI	燃焼室 床面	碗	A2	14. 7	4. 6	7. 4	10/12	回転ナデ 回転糸切 のち工具 痕?	回転ナデ	灰白 2.5Y8/2	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.108 貼付高台 籾殻痕 自然釉付着 焼成良	
15	G4	SY01	IX • XI	燃焼室 床面	碗	A2	15. 6	5. 5	7. 4	12/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 10YR7/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.101 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの痕跡 焼成良	変形するため、口縁部 は正円をとらない 計測値は最大口径 ほぼ完形
16	G4	SY01	XI	燃焼室 床面	碗	A2	16. 7	5.8	7.7	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	淡黄 2.5Y8/3	密(φ6.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.164 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 焼成やや不良	やや変形する
17	G5	SY01	Х	燃焼室 床面	碗	A2	15. 4	5. 3	7. 0	12/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/2	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.094 貼付高台 重ね焼きの痕跡 籾殻痕 焼成やや軟質	変形するため、口縁部 が正円をとらない 計測値は最大口径
18	G5	SY01	IX	燃焼室 床面	碗	A2	16. 3	5. 7	8. 2	9/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	淡黄 2.5Y8/4	密(φ5.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.151 (No.150と接合) 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの痕跡 焼成不良	高台が低く、粘土の貼 付のないところもある
19	G5	SY01	IX • XI	燃焼室 床面	碗	A2	15. 0 ~ 17. 3 (3)	5.7(2) 7.1(全)	8.1(2)	_	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.124 貼付高台 自然釉付着 付着物 高台剥離の痕跡 焼成良	3枚重ね焼き 変形が著 しく、1枚目は口縁部の 一部が融着
20	G4	SY01	XII	燃焼室 床面	碗	A2	16. 2	5. 4	8. 0	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	浅黄橙 10YR8/3	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.190 貼付高台 重ね焼きの痕跡 籾殻痕 焼成不良	口縁部から底部にかけ て亀裂が認められる
21	G5	SY01	XI	燃焼室床面	碗	A2	15. 7	5.3 (最大)	7. 6	8/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 10YR8/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.202 貼付高台 重ね焼きの痕跡 別個体付着 籾殻痕 部分的に自然釉付着 焼成良	変形するため口縁部は 正円をとらない 自重等により高台が一 部変形する やや重み がある
22	G5	SY01	x · XII	燃焼室 床面	碗	A2	16. 3	5. 7	8. 3	12/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/2	密(φ4.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.216 貼付高台 重ね焼きの痕跡 籾殻痕 焼成不良	接合し完形になる高台のナデ付け不十分
23	G5	SY01	XI	燃焼室 床面	碗	A2	14. 3	5. 3	7. 3	8/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.203 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 自然釉付着 付着物 焼成良	変形するため口縁部は 正円をとらない 口縁部に付着物が認め られる

表4 遺物一覧表(2)

報告書		見:		,		^		法量(cm)			技法など	がの特徴				
掲載番号	グリッド	遺構	窯体内グ リッド	層位	器種	分類	口径	器高	底径	残存率	外面	内面	色調	胎土	備考1	備考2
24	G5	SY01	IX	燃焼室床面	碗	A2	16. 5	5. 6	8. 0	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/2	密(φ7.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.086 貼付高台 重ね焼きの痕跡 籾殻痕 焼成やや軟質	
25	G5	SY01	IX • XI	燃焼室 床面	碗	A2	16. 6	5.8	7.9	7/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.098 貼付高台 重ね焼きの痕跡 籾殻痕 焼成良	
26	G5	SY01	IX	燃焼室 床面	碗	A2	16. 1	5. 5	8. 3	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/2	密(φ6.5mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	Na.076 貼付高台 重ね焼きの痕跡 籾殻痕 焼成やや軟質	口縁部から底部にかけ て亀裂が入る
27	G5	SY01	IX	燃焼室 床面	碗	A2	16. 1	5. 7	7.8	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	淡黄 2. 5Y8/3	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.205 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 焼成不良	高台裏面に籾殻痕の 他、木葉痕、藁状圧痕 が認められる
28	G4	SY01	XI	燃焼室 床面	小皿	A	8. 0	2. 4	3. 6	12/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰黄 2. 5Y7/2	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.134 自然釉付着 付着物 焼成良	やや変形する 完形
29	G4	SY01	XI	燃焼室 床面	小皿	В	8. 3	2.4	4. 3	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.118 自然釉付着 焼成良	変形するため、口縁部 は正円をとらない
30	G4	SY01	XI	燃焼室 床面	小皿	В	8. 2	2. 4	3. 8	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰黄 2.5Y7/2	密(φ9.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.119 一部に自然釉付着 焼成良	
31	G4	SY01	XI	燃焼室 床面	小皿	В	7. 9	2.3	4. 0	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.120 自然釉付着 焼成良	
32	G5	SY01	IX	燃焼室 床面	小皿	В	8. 2	2. 5	4.0	11/12	回転ナデ回転糸切り	回転ナデ	灰黄 2.5Y7/2	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.092 自然釉付着 付着物 焼成良	
33	G4	SY01	XI	燃焼室 床面	小皿	В	7.8	2.4	4. 0	11/12	回転ナデ回転糸切り	回転ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.121 一部に自然釉付着 付着物(一か所残存) 焼成良	
34	G4	SY01	XI	燃焼室 床面	小皿	В	7.8	2.3	3. 9	10/12	回転ナデ回転糸切り	回転ナデ	灰黄 2.5Y7/2	黒巴和丁を古む)	No.123 自然釉付着 付着物あり 焼成良	やや変形する 底部が台状?となる
35	G5	SY01	Х	燃焼室 床面	小皿	В	7. 8	2. 4	4. 2	10/12	回転ナデ回転糸切り	回転ナデ	灰黄 2.5Y7/2	密(¢ 2.5mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.213 重ね焼きの痕跡 焼成良	
36	G5	SY01	X	燃焼室 床面	小皿	В	8. 1	2.3	4. 5	12/12	回転糸切 り	回転 ナデ	灰黄 2.5Y7/2	密(φ4.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.210 焼成良	変形するため、口縁部 は正円をとらない
37	G4	SY01	XI	燃焼室 床面	小皿	В	8. 0 (3) 8. 4 (1)	2.5(2) 3.3(全)	3.9(2)	_	回転ナデ回転糸切り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.125 融着遺物3枚 別個体付着 自然釉付着 燒成良	3枚重ね焼き
38	G4	SY01	XI	燃焼室 床面	小皿	В	8.0(1)	2.5(1) 4.3 (全)	3.9(1)	_	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.136 融着遺物4枚 焼成良	図の手前側で自然釉が 付着 6枚重ねで亀裂の入るも
39	G4	SY01	XI	燃焼室 床面	小皿	В	Ī	2.5(1) 5.4 (全)	4.3(1)	_	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/2	密(φ5.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.122 融着遺物6枚 焼成良	のが多い 図の奥側に自然釉・付 着物が認められる
40	G4	SY01	XII· XIII·	燃焼室 床面	小皿	D	8. 3 (3) 7. 8 (1)	2.4(1) 4.4(全)	3.6(1)	_	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 N7/0	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.147 自然釉付着 焼成良	3枚重ね焼き 底部台状 の高台となる
41	G5	SX01	_	_	碗	A1	15. 5	5. 5	7.7	10/12	回転ナデ	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/2	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	NaO31 貼付高台 籾殻痕 自然釉付着 重ね焼きの痕跡 焼成良	変形するため口縁部は 正円をとらない 底部裏面に付着物 見込部に別個体高台の 一部が融着
42	G5	SX01	-	_	碗	A1	14. 3	5. 3	7. 0	9/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、黒色粒子を 含む)	Na033 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 自然釉付着 焼成良	見込部に別個体高台の 一部が融着
43	G5	SX01	_	-	碗	A1	(14.8)	4. 9	7. 2	6/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/2	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	Na.030 貼付高台 重ね焼きの痕跡(付着物 あり) 自然釉付着	底部裏面に「大」線刻 (焼成前)
44	G5	SX01	_	_	碗	A2	16. 2	5. 0	8. 3	8/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	Na.041 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 焼成良	
45	G5	SX01	_	_	碗	A2	15. 7	4.8	7. 5	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.035 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 自然釉付着 焼成良	見込部に別個体高台の 一部が融着
46	G5	SX01	-	_	碗	B2	16. 4	4. 5	8. 0	8/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ 一部ョ コナデ	灰黄 2.5Y7/2	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	Na.032 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 焼成良	変形するため口縁部は 正円をとらない 図の計測値は最大口径 見込部に亀裂が入る
47	G5	SX01	_	-	碗	A2	計測不可	4.3(2) 6.8(全)	6.6~ 7.2(2)	_	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2. 5Y7/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	Na.050 融着遺物2枚+破 片 自然釉付着 焼成良 別個体の高台付着	4枚重ね焼き(うち2枚は 破片が付着) 変形するため口縁部は 正円をとらない 3枚目の上部に自然軸が 付着 2枚目の高台はナデ付け が不十分で粘土の盛り 上りがみとめられる 正円をとらない

表5 遺物一覧表(3)

報告書		567						14 E / \			44-24-2-1	2 on 64 186			I	
掲載番号	グリッド	遺構	窯体内グ リッド	層位	器種	分類	口径	法量(cm) 器高	底径	残存率	技法など外面	内面	色調	胎土	備考1	備考2
48	G5	SX01	_	_	碗	A2	15. 1 (1) 16. 2 (2) 15. 3 (3)	5. 4(1) 9. 2(全)	8. 3(1)	_	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.037 融着遺物3枚 焼成良	3枚重ね焼き 3枚目の上部に自然釉が 付着
49	G6	SY01	х і • Х Ш	8層	碗	A1	(15. 8)	4. 9	7.8	5/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/2	密(φ5.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの痕跡 ヘラ先端の当たり 回転糸切りの工具痕あり 焼成やや軟質	
50	G5	SY01	х	9層	碗	A2	16. 5	5. 8	7. 0	9/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/2	密(φ5.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	重ね焼きの痕跡 貼付高台 籾殻痕 自然釉が一部に付着 焼成やや軟質	
51	G5	SY01	XII	7層	碗	A2	15. 7	5. 0	7. 6	12/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰黄 2.5Y7/2	密(φ5.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.73 籾殻痕 貼付 高台 重ね焼きの痕跡 焼成やや軟質	高台の一部が自重の為 つぶれる 高台に籾殻痕が顕著 完形品
52	G6	SY01	XI · X III	8層	碗	A2	(16. 6)	5. 3	7. 4	3/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転デコデ	灰黄 2.5Y7/2	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	貼付高台 籾殻痕 焼成やや軟質	
53	G5	SY01	IX • X	9層	碗	A2	16. 5	5. 3	8. 1	9/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰黄 2.5Y7/2	密(φ1.5mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	貼付高台 籾殻痕 焼成良	高台の一部が自重等に よりつぶれる
54	G6	SY01	XI · X III	8層	小碗	В	(8.5)	2.6	4. 0	5/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/2	密(φ1.0mm以下の長 石、チャート、黒色粒 子を含む)	貼付高台 籾殻痕 重ね焼き融着物 (別個 体の高台が融着) 焼成良	
55	G6	SY01	XI • X Ⅲ	8層	小皿	A	8. 2	2.7	3. 7	7/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/2	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	重ね焼き融着物(一か 所) 一部に自然釉付着 焼成良	
56	G5	SY01	IX • X	9層	小皿	A	7. 5	2. 2	4. 4	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 10YR8/2	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	自然釉付着焼成やや軟質	変形するため、口縁部 は正円をとらない 口径の計測値は最小 値。最大値は8.1cmと なる 底部外面付着に別個体 が融着する
57	G5	SY01	XI	9層	小皿	A	8. 2	2. 6	4. 1	9/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	自然釉付着 焼成良	図上での底径計測値は 3.8cmだが、残りの良い ところで計測すると4.1 cmとなる やや変形する 内面の降灰が顕著
58	G5	SX03		3層	碗	A2	(14. 9)	5. 0	6. 7	3/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰黄 2.5Y7/1	密(φ1.5mm以下の長 石、石英、黒色粒子を 含む)	No.071 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの痕跡 焼成良	
59	G5	SX03	_	下層	小皿	_	_	(2.5)	5. 2	7/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/2	密(φ1.5mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	重ね焼きの痕跡 別個体付着 自然釉付着 焼成良	
60	G5	SY01	VII	33層	碗	A1	15. 9	5. 5	7.8	12/12	回転ナデ回転糸切り	回転ナデ	にぶい 黄橙 10YR7/2		No.264 貼付高台 重ね焼きの痕跡 籾殻痕 焼成不良	高台は低く、体部に対し 斜めに貼り付ける
61	G5	SY01	VII	33層	碗	A1	16. 3	5. 5	7. 5	12/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	浅黄橙 10YR8/3	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.263 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 焼成不良	高台は低い
62	G5	SY01	VIII	33層	碗	A1	15. 7	5. 7	7. 4	12/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	浅黄橙 10YR8/3	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.259 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 焼成やや不良	見込み部に別個体の高 台の一部が付着
63	G5	SY01	VII	33層	碗	A2	16. 3	5. 4	8. 2	12/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 10YR8/2	密(φ4.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.264 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 工具痕か 焼成不良	変形するため口縁部は 正円をとらない 計測値は最大口径 高台は低く、体部に対 し斜めに貼り付ける
64	G5	SY01	V	33層	碗	A2	15. 5	5. 6	7. 4	12/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 10YR8/2	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.252 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 工具痕 焼成不良	変形するため口縁部は 正円をとらない 計測値は最大口径 高台は低く、体部に対 し斜めに貼り付ける
65	G5	SY01	VII	33層	碗	A2	15. 3	5. 3	7. 2	12/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	浅黄橙 10YR8/3	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.255 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 焼成不良	変形するため口縁部は 正円をとらない 高台は低く、体部に対 し斜めに貼り付ける
66	G5	SY01	VII	33層	碗	A2	16. 7	5. 7	8. 0	12/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	浅黄橙 10YR8/3	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.263 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 焼成不良	高台は低く、体部に対 し斜めに貼り付ける
67	G5	SY01	VII	33層	碗	A2	15. 8	5. 1	7. 6	12/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	浅黄橙 10YR8/3	密(φ4.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.263 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 焼成不良	やや変形するため口縁 部は正円をとらない 計測値は最大口径 高台は低く、体部に対 し斜めに貼り付ける
68	G5	SY01	VI	33層	碗	A2	14.8	4. 9	7. 6	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ5.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.241 貼付高台 焼成良	変形するため、口縁部 は正円をとらない 計測値は最小口径を示 す
69	G5	SY01	VII	33層	碗	A2	15. 7	5. 4	7. 2	12/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	淡黄 2.5Y8/3	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.240 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 焼成不良	

表6 遺物一覧表(4)

	ACS 144			-												
報告書 掲載 番号	グリッド	遺構	窯体内グ リッド	層位	器種	分類	口径	法量(cm) 器高	底径	残存率	技法など 外面	で特徴 内面	色調	胎土	備考1	備考2
70	G5	SY01	V	33層	碗	A2	16. 0	5. 3	7. 9	12/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	淡黄 2.5Y8/3	密(φ7.0mm以下の礫、 φ4.0mm以下の長石、石 英、チャートを含む)	No.248 貼付高台 籾殻痕 高台裏面に 別個体が融着 焼成不良	変形するため口縁部は 正円をとらない 高台は低く、貼付位置 が中心からずれている
71	G5	SY01	VI	33層	碗	A2	15. 5	5. 6	7. 6	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/2	密(φ8.0mmの礫、φ2.0 mm以下の長石、石英、 チャートを含む)	No.241 貼付高台 重ね焼きの痕跡 籾殻痕 焼成良	変形するため、口縁部 は正円をとらない 計測値は最小値を示す
72	G5	SY01	VII	33層	小皿	A	8. 5	2. 5	4. 9	8/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、黒色粒子を 含む)	自然釉付着 焼成良	底部裏面に別個体の一 部が付着
73	G5	SY01	VII	33層	小皿	A	8. 2	2. 4	3. 9	8/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ1.5mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	自然釉わずかに付着 別個体付着 焼成良	2枚重ね焼き
74	G5	SY01	VI	33層	小皿	В	8.6	2.7	4. 9	7/12	回転ナデ 回転ナデ のちナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 N7/0	密(φ2.0㎜以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.244 焼成やや軟質	
75	G5	SY01	VIII	33層	小皿	В	7. 6	2. 2	3. 8	12/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 N7/0	密(φ1.5mm以下の長 石、石英、黒色粒子を 含む)	自然釉付着 焼成良	
76	G5	SY01	VIII	33層	小皿	В	8. 2	2. 6	4. 0	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 N7/0	密(φ8.0mm以下の礫、 φ2.0mm以下の長石、 石英、黒色粒子を含む)	自然釉付着 重ね焼き の痕跡 焼成良	体部外面に付着物
77	G5	SY01	VIII	33層	小皿	В	7.6	2. 5	3. 8	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 N7/0	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、黒色粒子を 含む)	自然釉付着 焼成良	やや変形するため口縁 部は正円をとらない 計測値は最小口径を示 す 医部は低い台状を示す ところが一部にみられ る
78	G5	SY01	VII	崩落土	小皿	В	8.8	2.8 (最大)	2. 3	12/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ4.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	自然釉付着 亀裂が入 る 焼成良	変形するため口縁部は 正円をとらない 計測値は最大口径
79	G5	SY01	VIII	33層	小皿	В	8. 1 (1) 7. 8 (3)	2.7(1) 4.1(全)	3.8(1)	_	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ5.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	融着遺物3枚 焼成良	3枚重ね焼き やや変形するため、1・ 2枚目の口縁部は正円を とらない
80	G6	SY01	V	炭化物層	碗	A1	15. 9	4.8	7. 6	9/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/2	密(φ5.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	自然釉付着 重ね焼き の痕跡 貼付高台 籾殻痕 焼成良	
81	G5	SY01	VIII	床面下 充填土 層	碗	_	_	(2.8)	7.6	底部 12/12	回転ナデ	ヨコナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	自然釉付着 重ね焼き の痕跡 貼付高台 籾殻痕 墨痕 高台内へラ描き 成形台の痕跡 焼成良	高台は正円をとらない やや変形する
82	G5	SY01	VI	流入土 直下	碗	A1	15. 9	5. 3	7.2	8/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 10YR8/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.075 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 自然釉付着 焼成良	変形するため口縁は正 円をとらない 高台は自重等によりつ ぶれる 外面に鉄分の付着が認 められる
83	G5	SY01	XI	流入土	碗	A2	15. 5	5. 3	6.8	9/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/2	密(φ4.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.067 貼付高台 籾殼痕 自然釉付着 焼成良	
84	G5	SY01	VII	流入土 分焔孔	小碗	В	8.3	2.8	4. 2	12/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	貼付高台 自然釉付着 重ね焼きの痕跡 籾殻痕 焼成良	
85	G4	SY01	VIII	前底部流入土	小皿	A	8.6	2. 5	4.8	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰黄 2.5Y7/2	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	重ね焼きの痕跡焼成良	変形するため口縁部は 正円をとらない
86	G5	SY01	VII	前底部 流入土	小皿	В	(8.0)	2. 2	4. 3	8/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ1.5mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	自然釉付着 焼成良	
87	G5	SY01	VI	床面	小皿	В	8.1	2. 3	4. 2	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ4.5mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.266 焼成良	
88	G5	SY01	VIII	床面	小皿	A	8.0	2.8	4. 6	12/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.418 自然釉付着 焼成良	やや変形するため口縁 部・底部ともに正円を とらない
89	G5	SY01	VIII	床面	小皿	A	8.4	2.6	4. 7	12/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.267 付着物 歪みあり 焼成良	変形するため口縁部は 正円をとらない ほぼ完形
90	G5	SY01	VII	床面	碗	A2	15. 4	5. 4	7. 4	8/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ4.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.412 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 焼成良	
91	G5	SY01	VIII	床面	碗	A2	15. 8	5. 2	8. 0	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ5.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.402 貼付高台 重ね焼きの痕跡 籾殻痕 自然釉付着 焼成良	高台が自等重でつぶれ 低くなる
92	G5	SY01	VIII	床面	碗	B2	16. 0	5. 6	8. 0	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.403 貼付高台 重ね焼きの痕跡 籾殻痕 自然釉付着 焼成良	
93	G5	SY01	VI	床面下	碗	A1	15. 9	5. 6	7. 7	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰黄 2.5Y7/2	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.471 貼付高台 籾殻痕 自然釉 焼成やや軟質	見込部に接合痕を残す 高台のナデ付けが不十 分 一部がつぶれる

表7 遺物一覧表(5)

報告書 掲載 番号	グリッド	遺構	窯体内グ リッド	層位	器種	分類	口径	法量(cm) 器高	底径	残存率	技法など外面	の特徴内面	- 色調	胎土	備考1	備考2
94	G5	SY01	VII	床面下	碗	A1	16. 2	5. 1	8. 4	8/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 10YR8/1	密(φ5.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.512 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 自然釉付着 焼成良	
95	G5 • G6	SY01	V	床面下	碗	A1	15. 9	5. 4	7. 0	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.562 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの痕 跡 自然釉付着 焼成良	見込部に別個体の高台 剥離痕が認められる
96	G5	SY01	VI	床面下	碗	A1	15. 1	5. 3	7. 1	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.792 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの痕跡(付着 物) 自然釉付着 焼成良	変形が著しく口縁部は 正円をとらない 高台が自重等によりつ ぶれる
97	G5	SY01	V	床面下	碗	A1	16.8	5. 3	7. 1	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.828 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 自然釉付着 焼成良	変形するため口縁部は 正円をとらない 重い印象 器壁が厚い 高台が自重等によりつ ぶれる
98	G5	SY01	VII	床面下	碗	A1	16. 2	4. 9	8. 6	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 10YR8/1	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.522 貼付高台 籾殻痕 自然釉付着 焼成良	変形するため口縁部は 正円をとらない 外面に鉄分が付着する 見込部に付着物が多く 認められる
99	G6	SY01	V	床面下	碗	A1	16. 0	5. 2	7. 5	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 10YR8/1	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.432 自然釉付着 貼付高台 重ね焼きの 痕跡 一部剥離 焼成良	見込部に別個体の高台 の一部が付着
100	G5	SY01	V	床面下	碗	A1	16.8	5. 5	9. 4	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	にぶい 黄橙 10YR7/2	密(φ7.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.710 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 焼成良	亀裂が入るためやや変 形する 底径が大きい やや赤 みを帯びる
101	G5	SY01	V	床面下	碗	A1	16. 5	5.8	8. 4	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.809 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 自然釉付着 焼成良	変形するため口縁部は 正円をとらない 高台が自重等によりつ ぶれる 外面に鉄分が付着する 高台裏面に付着物(焼 台か)が認められる
102	G5	SY01	VI	床面下	碗	A1	15. 4	5. 5	8. 7	9/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 10YR8/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.743 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 焼成良	体部外面に指頭圧痕? あるいは工具痕が認め られる 底部裏面高台にヘラ状 圧痕が認められる
103	G5	SY01	VI	床面下	碗	A1	15. 0	4. 9	7. 9	12/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	Na.656 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 自然釉付着 焼成やや軟質	高台のナデ付け不十分 外面に鉄分の付着が認 められる
104	G5	SY01	VI	床面下	碗	A1	15. 4	4.8	8. 2	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 10YR8/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、黒色粒子を 含む)	No.756 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 自然釉付着 焼成良	高台貼り付け時の付け が不十分
105	G5	SY01	VI	床面下	碗	A1	15. 4	4. 5	6. 6	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.794 貼付高台 重ね焼きの痕跡 籾殻痕 自然釉付着 焼成良	高台が自重等によりつぶれる 見込部の重ね焼き痕の 径が小さく、上に小皿 を重ねた可能性がある 変形のため口縁部は正 円をとらない 計測数値は最大口径
106	G5	SY01	VII	床面下	碗	A2	15. 3	5. 5	7. 5	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 N8/0	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、黒色粒子を 含む)	Na.517 貼付高台 自然釉付着 焼成良	見込部に自然釉がかからず、重ね焼きした別 個体があったことを示 している 変形するため口縁部は 正円をとらない 高台裏面にも籾殻痕 が認められるが図示し ていなか
107	G5	SY01	V · VI	床面下	碗	A2	15. 5	5. 1	7. 4	9/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ4.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.555 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの痕跡 自然釉付着 焼成良	
108	G5	SY01	VI	床面下	碗	A2	15. 5	5. 9	8. 0	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 10YR8/1	密(φ4.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	Na650 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 自然釉付着 焼成良	変形するため口縁部は 正円をとらない 計測値は最小口径を示 す
109	G5	SY01	V · VI	床面下	碗	A2	16. 3	6. 2	7. 1	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ		密(φ2.0mm以下の長 石、石英を含む)	No.549 貼付高台 自然釉付着 籾殻痕 重ね焼きの痕跡 焼成良	変形するため口縁部は 正円をとらない 外面に鉄分の付着が認 められる
110	G6	SY01	V	床面下	碗	A2	16. 8	5. 9	8. 1	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ4.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.598 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 自然釉付着 焼成良 藁状圧痕	亀裂が入り変形し口縁 部は正円をとらない 計測数値は最大口径 高台が自重等によりつ ぶれる
111	G6	SY01	VI	床面下	碗	A2	16. 0	5. 2	7. 3	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 10YR8/1	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.588 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 自然釉付着 焼成良	

表8 遺物一覧表(6)

報告書 掲載 番号	グリッド	遺構	窯体内グ リッド	層位	器種	分類	口径	法量(cm) 器高	底径	残存率	技法など外面	の特徴内面	色調	胎土	備考1	備考2
112	G5	SY01	VI	床面下	碗	A2	16. 7	5. 8	8. 1	10/12	回転ナデ回転糸切り	回転ナデ	灰白 10YR7/1	密(φ4.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.742 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 工具痕 焼成良	高台が自重等によりつぶれる 底部に付着物(焼台か)が認められる 高台が体部の中心から ずれて貼り付けられる
113	G5	SY01	V	床面下	碗	A2	15. 1	5. 0	7. 2	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 N7/0	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.692 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡(付着物あり) 焼成良	やや変形する
114	G5	SY01	VI	床面下	碗	A2	16. 9	5. 4	8. 1	8/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 N7/0	密(φ5.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.628 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 焼成良	高台が自重等により一 部つぶれる
115	G5	SY01	V	床面下	碗	A2	16. 7	5. 3	8. 7	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	にぶい 黄橙 10YR7/2	密(φ10.1mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.817 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 焼成やや不良	底径が大きい印象 見込部も大きい 底部裏面が平坦 亀裂が入る
116	G5	SY01	VI	床面下	碗	A2	16. 0	5. 3	8. 0	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 10YR8/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英を含む)	No.639 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 自然釉付着 焼成良	やや変形するため口縁 部は正円をとらない 計測値は最小口径
117	G5 • G6	SY01	V	床面下	碗	A2	15. 7	5.3 (最大)	7. 6	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 N7/0	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.560 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 焼成良	口縁部の一部に自然釉 がかかる 変形するため口縁部は 正円をとらない
118	G5	SY01	VI	床面下	碗	A2	16. 3	5. 3	7. 0	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.442 貼付高台 重ね焼きの痕跡 焼成やや軟質	高台のナデ付けが不十 分
119	G5	SY01	V	床面下	碗	A2	16. 1	5. 5	7.0	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.855 貼付高台 籾殻痕 自然釉付着 重ね焼きの痕跡(付着物 あり) 焼成良	高台が自重等によりつ ぶれる高台の貼付時の ナデ付けが不十分 口縁部に亀裂が入る
120	G5	SY01	V	床面下	碗	A2	16. 7	5. 3	7. 6	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰黄 2.5Y7/2	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.832 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの痕跡 焼成やや不良	
121	G5	SY01	VI	床面下	碗	A2	15. 7	4. 7	6. 7	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.789 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの痕跡(付着物 あり) 自然釉付着 焼成良	変形するため口縁部は 正円をとらない
122	G5	SY01	VII	床面下	碗	A2	(16. 2)	5. 2	7.8	9/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/2	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、黒色粒子を 含む)	No.503 貼付高台 籾殻痕 自然釉 別個体が融着焼 成良	
123	G5	SY01	VII	床面下	碗	A2	15. 7	5. 1	7. 3	9/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 中デ 回転 で を カデデ ちナデ	灰白 N7/0	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、黒色粒子を 含む)	Na516 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの痕跡 焼成やや軟質	高台が自重等によりつ ぶれ変形する
124	G5	SY01	VI	床面下	碗	A2	16. 6	4.8	7. 7	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 10YR8/1	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.446 自然釉付着 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの痕跡 焼成良	外面に鉄分の付着が認 められる やや変形するため口縁 部は正円をとらない
125	G5	SY01	VI	床面下	碗	A2	17. 0	5. 3	6. 4	7/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 N7/0	密(φ5.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.609 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 自然釉付着 焼成良	
126	G5	SY01	VII	床面下	碗	A2	16. 1	4. 5	8. 0	7/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、黒色粒子を 含む)	No.527 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 自然釉付着 高台の一部剥離 焼成良	外面に鉄分が付着 口径の割に器高が浅い
127	G5 • G6	SY01	VI	床面下	碗	A2	14. 3	4. 6	7. 2	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.593 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 焼成良	口径が小さい 高台が自重のため一部 つぶれる 体部外面にヘラ状圧痕
128	G5	SY01	V	床面下	碗	A2	16. 5	5. 2	8. 0	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 10YR8/1	密(φ5.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.695 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡(付着物あり) 自然釉付着 焼成良	やや変形するため口縁 部は正円をとらない
129	G5	SY01	V	床面下	碗	A2	15. 9	4. 9	7.2	7/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	Na803 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 焼成良	変形するため口縁部は 正円をとらない 高台が自重等によりつ ぶれる このため口縁部は水平 にならない
130	G5	SY01	VI	床面下	碗	A2	15. 0	5. 7	7. 1	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ1.5mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.747 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 自然釉付着 焼成良	高台が自重等によりつ ぶれる このため口縁 部は水平にならない 口縁部外面に別個体の 口縁部が付着
131	G5	SY01	VI	床面下	碗	A2	16. 5	4. 7	7.2	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 10YR8/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.474 貼付高台 重ね焼きの痕跡 自然釉付着 籾殻痕 焼成良	見込部に別個体の高台 の一部が付着する また高台にさらに別個 体の一部が付着する 変形するため口縁部は 正円をとらない

表9 遺物一覧表(7)

		567		,												
報告書 掲載 番号	グリッド	遺構	窯体内グ リッド	層位	器種	分類	口径	法量(cm) 器高	底径	残存率	技法など 外面	の特徴 内面	色調	胎土	備考1	備考2
132	G6	SY01	VI	床面下	碗	A2	16. 2	4. 7	7.8	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.587 貼付高台 重ね焼きの痕跡 籾殻痕 焼成良	口縁部内面にヘラ状圧 痕 変形するため口縁部は 正円をとらない 口縁部から体部の器壁 が薄い
133	G5	SY01	V • VII	床面下	碗	A2	16. 9	5.8	8.3	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 10YR8/1	密(φ 5.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.727 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 焼成良	高台が自重等によりつ ぶれる このため口縁 部も水平でない 高台 が体部の中心からずれ て貼り付けられる
134	G5	SY01	VI	床面下	碗	A2	16. 7	5. 4	8.8	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰黄 2.5Y7/2	密(φ5.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.441 重ね焼きの痕跡 焼成やや軟質	高台を欠く 貼り付けた痕跡もはっ きりわからない
135	G5	SY01	VI	床面下	碗	A2	14.8	5. 0	7. 6	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ2.5mm以下の長 石、石英、黒色粒子を 含む)	No.741 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 別個体の高台 融着 自然釉付着 焼成良	高台が自重等によりつ ぶれる
136	G5	SY01	V	床面下	碗	A2	15. 2	4. 9	7. 4	9/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.830 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 自然釉付着 焼成良	高台が自重等によりつ ぶれる
137	G5	SY01	VI	床面下	碗	A2	15. 8	5. 2	8. 0	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 10YR8/1	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、黒色粒子を 含む)	No.794 貼付高台 重ね焼きの痕跡 籾殻痕 焼成良	底部に亀裂が入る
138	G5	SY01	VI	床面下	碗	В1	15. 9	4. 9	8. 0	ほぼ完形	回転ナデ 回転糸切 り	回転 デコデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ4.0mm以下の長 石、石英、黒色粒子を 含む)	No.756 貼付高台 重ね焼きの痕跡 工具痕or板状圧痕 自然釉付着 焼成良	やや変形する 高台の一部が自重等に よりつぶれる 口縁端部の上面が平坦 面となる
139	G5	SY01	VII	床面下	碗	В1	16.0	5. 1	8. 5	6/12	回転ナデコ サデロ転糸切り	回転 ナデ	灰白 10YR8/1	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.519 貼付高台 付着物 籾殻痕 重ね焼きの痕跡 自然釉付着 焼成良	
140	G5	SY01	VI	床面下	碗	В1	15. 6	5. 0	7. 3	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.623 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの痕跡(付着 物有) 自然釉付着 焼成良	
141	G6	SY01	V	床面下	碗	В1	(15. 2)	5. 3	7. 6	7/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 10YR7/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.558 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの痕跡 自然釉付着 焼成良	高台が自重等によりつ ぶれる 焼成の加減か色調が 赤っぽい
142	G5	SY01	VI	床面下	碗	B1	-	5. 5	7.3	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 10YR8/1	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.654 融著遺物3枚 自然釉付着 貼付高台 籾殼痕 焼成良	3枚重ね焼き 3枚重は高台のみ 変形するため2枚目の口 縁部は正円をとらない 口径17.2cm (最大口 径) 底部の高台は自重等に よりつぶれる
143	G5	SY01	VI	床面下	碗	B1	17. 0	4. 7	8. 0	7/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 N7/0	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、黒色粒子を 含む)	No.481 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 自然釉付着 焼成良	変形するため口縁部は 正円をとらない 計測値は最大口径を示す 高台は自重等によりつ ぶれる 体部と高台の境に付着 物
144	G5	SY01	VII	床面下	碗	B2	17. 1	5. 1	8. 1	7/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.682 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 自然釉付着 焼成良	口径の割に器高が低い 高台が自重等によりつ ぶれる
145	G5	SY01	V	床面下	碗	B2	16. 5	5. 7	8. 2	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ		密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.840 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの痕跡 軟質 焼成やや不良	土師質な焼成 高台が自重等によりつ ぶれる
146	G5	SY01	VIII	床面下	碗	B2	17. 0	5. 3	7. 7	7/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 10YR8/1	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.664 貼付高台 籾殻痕 自然釉付着 焼成良	見込部に自然釉がかからず上部に重ね焼きした可能性がある 外面に鉄分の付着が認められる 別個体が外面に付着
147	G5	SY01	VI • VIII	床面下	碗	B2	15. 9	5. 1	7.8	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 N7/0	密(¢ 6.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	Na719 貼付高台 籾殻痕 自然釉付着 重ね焼きの痕跡 焼成良	変形するため口縁部は 正円をとらない 高台が自重等によりつ ぶれる 外面に鉄分が 付着する
148	G5	SY01	V	床面下	碗	B2	15. 2	5. 0	7.8	12/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.856 貼付高台 籾殻痕 焼成良	変形するため口縁部は 正円をとらない ほぼ完形 自重等のため高台がつ ぶれる
149	G5	SY01	VIII	床面下	碗	В2	15. 7	4. 8	7. 6	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.668 貼付高台 報敷痕 重ね焼きの痕跡 自然釉付着 焼成良	高台が自重等によりつ ぶれる 外面に鉄分が付着する

表 10 遺物一覧表(8)

報告書掲載	グリッド	遺構	窯体内グ	層位	器種	分		法量(cm)		残存率	技法など	が特徴	色調	胎土	備考1	備考2
拘取 番号	クラッド	退冊	リッド	/百1年	和作里	類	口径	器高	底径	7.8 行学	外面	内面	己啊	лд 土	VH 451	VH - 与 - 2
150	G5	SY01	VI	床面下	碗	B2	15. 5	5. 1	7.9	8/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 N7/0	密(φ5.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.627 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 自然釉付着 焼成良	変形するため口縁部は 正円をとらない 見込部に別個体の高台 が付着 高台の一部が自重等に よりつぶれる 重い感じ 類恵器のような質感
151	G5	SY01	VI	床面下	碗	B2	15. 5	5. 2	8. 4	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 N7/0	密(φ4.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	Na625 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 自然釉付着 焼成良	高台が体部の中心から ずれて貼り付けられる やや変形する
152	G5	SY01	VI	床面下	碗	B2	16. 4	5. 5	7. 0	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.621 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 焼成良	やや変形する
153	G5	SY01	V	床面下	碗	B2	16. 8	5. 5	8. 5	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.687 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 自然釉付着 焼成良	
154	G5	SY01	VI • VIII	床面下	碗	B2	16. 5	5.9 (最大)	8. 2	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.720 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 自然釉付着 焼成良	変形するため口縁部は 正円をとらない 高台が自重等によりつ ぶれる 外面に鉄分が 付着する 口縁部外面の2か所に別 個体が付着
155	G5	SY01	VII	床面下	碗	B2	16. 1	5. 0	7. 2	9/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.680 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 自然釉付着 焼成良	やや変形する 重い感じ
156	G5	SY01	VI	床面下	小碗	A	7.8	2.5	4. 0	8/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 10YR8/1	密(φ1.5mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.736 貼付高台 自然釉付着 焼成良	底部に亀裂が入る
157	G5	SY01	VI	床面下	小皿	В	9. 2	2.8	5. 0	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.437 重ね焼きの痕跡 自然釉付着 焼成良	
158	G5	SY01	VI	床面下	小皿	В	9.7	2.6	5. 0	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 10YR8/1	密(φ5.0mm以下の長 石、石英、黒色粒子を 含む)	No.629 自然釉付着 付着物 焼成良	やや変形する
159	G5	SY01	VII	床面下	小皿	В	8. 2 (1) 8. 1 (2) 8. 3 (3) 8. 8 (4)	2.5(1) 5.3(全)	4.0(1)	_	回転ナデ 回転糸切 り	不明	灰白 10YR7/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.524 融着遺物4枚 焼成良	4枚重ね焼き 最上面 (4枚目) の上記 に降灰する 付着物が認められる
160	G5	SY01	VI	床面下	小皿	В	8. 9 (2) 9. 3 (3) 8. 4 (5) 8. 3 (6) 8. 2 (7) 9. 6 (8)	2.9(2) 7.8 (全)	5.4(2)	_	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰黄 2.5Y7/2	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.453 融着8枚 焼成良	8枚重ね焼き 8枚目上面に降灰、自約 釉が厚くかかる
161	G5	SY01	VI	床面下	小皿	В	9. 2 (1) 9. 1 (2) 8. 8 (3 · 7) 9. 7 (4) 9. 8 (5 · 6) 8. 4 (8)	2.8(1) 10.3 (全)	5. 3(1)	_	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ1.5mm以下の長 石、石英、黒色粒子を 含む)	No.485 自然釉付着 焼成良	8枚重ね焼き 8枚目はやや変形する
162	G5	SY01	VI	床面下	小皿	В	9. 2 (3) 9. 1 (4 · 7 · 8) 9. 0 (6 · 10) 8. 8 (5) 9. 5 (9)	10.2 (全)	5. 5(1) 5. 6(2)	_	回転ナデ回転糸切り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ4.0mm以下の長 石、石英、黒色粒子を 含む)	Na456 融着10枚 焼成良	10枚目の上面に降灰 自然釉が厚くかかる 10枚重ね焼き
163	G5	SY01	VIII	床面下	小皿	D	8. 0 (2) 8. 6 (3) 8. 3 (5)	2.8(2) 6.1(全)	3.6(2)	_	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.662 融着遺物5枚 焼成良	5枚重ね焼き 2枚目の底部は低い台 を呈する
164	G5	SY01	VII	床面下	小皿	D	8. 0 (3 · 4) 7. 8 (2)	2.3(1) 2.5(4) 6.0(全)	4. 2 (1 • 4)	_	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ1.5mm以下の長 石、石英、黒色粒子を 含む)	No.524 融着4枚 焼成良 自然釉付着 付着物	4枚重ね焼き 4枚目の底部が低い台料 となるが、自重等によ りつぶれる
165	G5	SY01	VI	床面下	碗	A2	15. 2	5. 3	7. 7	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.775 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 自然釉付着 焼成良	
166	G5	SY01	VI	床面下	碗	A2	15. 3	5. 9	8.5	9/12	ナデ 回転ナデ 回転糸切 り	ナデ 回転 ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.769 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 焼成良	高台が自重等によりつぶれ、口縁部は水平にならない 口縁部に1か所2.5×3. 皿の楕円形の穿孔が認められる 小石の抜けた跡か
167	G5	SY01	VII	床面下	碗	A2	16. 1	4. 9	8. 1	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	明褐灰 7.5YR7/ 1		No.545貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 自然釉付着 焼成良	色調が赤っぽい
168	G5	SY01	V	床面下	碗	B2	16. 0	5. 7	8. 1	9/12	回転ナデ ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.705 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの痕跡(付着物 あり) 自然釉付着 焼成良	やや変形する 高台が自重等によりつ ぶれる

表 11 遺物一覧表(9)

報告書								法量(cm)			技法など	で特徴				
掲載 番号	グリッド	遺構	窯体内グ リッド	層位	器種	分類	口径	器高	底径	残存率	外面	内面	色調	胎土	備考1	備考2
169	G5	SY01	VII	床面下	碗	A1	計測不可	5.0(2) 6.9(全)	8. 2(2)	_	回転ナデ回転糸切り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	Na.535 融着遺物3枚 自然釉付着 焼成良	3枚重ね焼き 3枚重の見込部は自然釉 かたず、さらにもう引 が重ね焼きをされた可 能性がある 2枚目の底部は高台を欠 く剥離痕が認められる 変形するため口縁部は 正円をとらない
170	G5	SY01	VII	床面下	碗	A2	14. 4~ 16. 2(3)	5.1(2) 7.0(全)	6. 2~ 6. 7(2)	_	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/1	やや密(φ2.0mm以下の 長石、石英を含む)	Na.546 融着遺物2枚+破 片1枚 付着物 燒成良	3枚重ね焼き 変形するため2・3枚目
171	G5	SY01	VI	床面下	碗	A2	14.2~ 15.5(3)	4.2(1) 6.4(全)	7.8(2)	_	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	Na773 融着遺物2枚+破 片1枚 焼成良	3枚重ね焼き 変形が著しいため2,3 枚目の口縁部は正円を とらない 3枚目見込部は自然釉が かからず、もう1枚は重 ね焼かれる
172	G5	SY01	VI	床面下	碗	B2	15. 8 (1)	5.1(1) 6.3 (全)	8.3(1)	-	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	Na473 焼成良 籾殻痕 自然釉付着	2枚重ね焼き 2枚目の見込部に別個体 の高台の一部が残るた め、あと1点は重ね焼か れた可能性が高い
173	G5	SY01	VII	床面下	碗	В2	16.4(2)	5.0(1) 6.8(全)	8.2(1)	_	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、黒色粒子を 含む)	No.510 貼付高台 籾殻痕 上面に自然釉 付着 焼成良	3枚重ね焼 3枚目は2枚目に口縁部 が付着すると共に高台 剥離痕が残る
174	G5	SY01	VI	床面下	碗	A1	15. 5 (2) 16. 3 (3) 16. 4 (4) 16. 5 (5)	5.4(2) 11.2 (全)	7.8(2)	_	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ3.0mm以下の長 石、石英を含む)	No.479 融着遺物6枚 貼付高台 籾殻痕 焼成良	6枚重ね焼き 6枚目の見込部に別個体 の高台の一部が付着す るため、さらに1枚重ね 焼かれた可能性が高い
175	G5	SY01	VII	床面下	碗	A2	15. 6 (2) 15. 3 (3) 15. 9 (4)	5.0(2) 7.5(全)	7.6(2)	_	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.571 融着遺物4枚 焼成良 高台貼付 籾殻痕 高台剥離	4枚重ね焼き 2枚目の高台は一部が 剥離する 4枚目の上 面に自然釉がかかる
176	G5	SY01	VII	床面下	碗	A2	15.4(2)	10.2 (全)	7.4~ 7.7(1)	_	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ5.0mm以下の長 石、石英、黒色粒子を 含む)	No.505 貼付高台 籾殻痕 上面に自然釉 付着 融着遺物5枚 焼成良	5枚重ね焼き さらに上部に重ね焼き 痕跡が認められる 正円をとらない
177	G6	SY01	V	床面下	碗	A2	15. 6 (5)	4.7(1) 10.9 (全)	6.6(1)	_	回転ナデ回転糸切り	回転ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	Na602 融着遺物5枚 焼成良	5枚重ね焼き 5枚重の見込高に釉のか からないところがあ り、さらに重ね焼かれ た可能性が高い また付着物が認められ る 変形するため口縁 部は正円をとらない 1枚目の高台に別個体の 一部が付着
178	G5	SY01	V · VI	床面下	碗	A2	計測不可	11.9 (全)	6.6(1)	_	回転ナデ回転糸切り	回転ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(\$ 2.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	Na.553 融着遺物6枚 貼付高台 焼成良	6枚重ね焼き 最上部(6枚目)の見込 部に自然の高さ剥削をが 別個体れのることから少 なくともの能性があり をされるが終性は を変形するとのない を変形するとのない で を変形するとのない で を変形するとのない で を変形するとのない を変形し下方へ折れ曲が る
179	G5	SY01	VI	床面下	碗	B1	17. 0 (4) 15. 5 (8)	5.9(2) 15.5 (全)	7.6~ 7.9(2)	_	回転ナデ回転糸切り	回転 ナデ	灰黄 2. 5Y7/2	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.488 貼付高台 焼成良	9枚重ね焼き 籾殻痕 8枚目以下の一 部に降灰、自然釉が厚 くかかる 2枚目の高台が自重など によりつぶれる 2~4枚目は変形する
180	F3	SK01	-	-	碗	A2	16. 0	6. 0	7. 0	7/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	にぶい 黄橙 10YR7/4	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	籾殻痕 焼成不良	変形するため、口縁部 は正円をとらない
181	F3	SK01	_	_	碗	A2	(16. 2)	5. 7	8. 3	5/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	Na016 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの痕 跡 焼成良	
182	F3	SK01	_	_	碗	A2	16. 1	5. 4	7. 2	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ ョコ ナデ	浅黄橙 10YR8/3	密(φ4.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.018 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの痕跡 焼成不良	

表 12 遺物一覧表 (10)

報告書	,_,	-	衣(,				社長()			++3+ +\1	の転衝				
掲載番号	グリッド	遺構	窯体内グ リッド	層位	器種	分類	口径	法量(cm) 器高	底径	残存率	技法など外面	内面	色調	胎土	備考1	備考2
183	F3	SK01	_	_	碗	A2	(17. 1)	5. 4	8. 6	8/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	Na.028 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの痕跡 焼成良	
184	F3	SK01	_	-	碗	A2	16. 0	5. 6	7.4	7/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	Na.023 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの痕跡 焼成軟質	軟質 底部が自重等で 変形し、高台は正円を とらない 見込部に粘 土紐接合痕が認められ る 摩耗する
185	F3	SK01	_	ı	碗	В1	16. 1	5. 5	7.0	9/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	浅黄 2. 5Y7/3	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No019 貼付高台 自然釉付着 重ね焼き付着物 籾殻痕 重ね焼きの痕跡 焼成良	変形するため口縁部は 正円をとらない 摩耗する
186	F3	SK01	=	-	碗	В2	16. 4	5.8	6. 9	7/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.023 貼付高台 重ね焼きの痕跡 籾殻痕 焼成軟質	軟質 底部が自重等で変形 し、高台は正円をとら ない
187	F3	SK01	_	-	碗	A2	15. 3 (2) 16. 4 (3)	5.3(1) 10.1 (全)	7.5(1)	_	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	浅黄 2.5Y7/3	密(φ10.1mmの礫、φ 2.0mm以下の長石、石 英、チャートを含む)	Na013 貼付高台 上面に自然釉付着 融着遺物4枚 籾殻痕 焼成良	4枚重ね焼き(さらに上 に重ね焼き痕がある) 4枚目には亀裂が認めら れる
188	F3	SK01	=	_	碗	A2	14. 9 (3)	11.2 (全)	6.6(1)	_	回転ナデ	回転ナデ	灰白 2.5Y8/2	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	登録No.001と接合 融 着遺物5枚 貼付高台 籾殻痕 上面に自然釉 付着 焼成良	5枚重ね焼き 変形が著しい
189	F3	SK01	_	-	小皿	В	8. 1	2. 1	4.6	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	浅黄 2.5Y7/3	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.014 自然釉付着 焼成良	
190	F3	SK01	_	-	小皿	С	8. 2(1) 8. 4(3)	2.8(1) 5.1(全)	4.3(1)	_	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	にぶい 黄橙 10Y7/2	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	融着遺物4枚 上面に自然釉付着 粘土痕 焼成良	4枚重ね焼き 底部が台状となる
191	F3	SK01	_	-	小皿	В	7.7(4) 7.9(1)	2.3(1) 5.9(全)	4.6(1)	_	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	浅黄 2.5Y7/3	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	Na.006 自然釉付着 燒成良	4枚重ね焼き 最下部(1枚目)の底部に 粘性付着 別個体の可 能性あり 上部に自然釉付着 2・3枚目が変形する 4枚目は口径が小さい
192	F3	SK01	_	-	小皿	В	9.0(6)	2.7(2) 8.2(全)	4.1(2)	_	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	浅黄 2.5Y7/3	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	Na.025 融着遺物6枚 別個体融着 焼成良	6枚重ね焼き 最上部(6枚目)の上部に 自然釉が厚くかかる(6 灰が認められる) ま た、各個体の上面にも 自然釉付着
193	G5	SK02	_		小皿	С	7.9	2. 5	4.8	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	にぶい 黄橙 10YR7/2	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.187 重ね焼きの痕跡 (付着あり) 自然釉 焼成やや不良	
194	G5	SK02	-	I	碗	A2	16. 2	5. 2	8.6	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	No.188 籾殻痕 成形台痕か 成形時のユビオサエ がわずかに残る 焼成やや軟質	
195	G4	SK03	_	-	小皿	A	8. 2	2. 5	3. 8	9/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/2	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	一部に自然釉付着 付着物 焼成良	
196	G4	SK03	_	-	小皿	A	8. 2	2. 1	4.5	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/2	密(φ1.0mm以下の長 石、チャート、黒色粒 子を含む)	一部に自然釉付着 付着物 焼成良	
197	G4	SK03	_	-	小皿	В	8. 0	2.3	4. 6	7/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/2	黒巴和丁を古む)	一部に自然釉付着 焼成良	
198	G4	SK03	-	-	小皿	D	8.6	2. 6	4. 4	7/12	回転ナデ回転糸切り	回転 ナデ ナデ	灰黄 2.5Y7/2	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	一部に自然釉付着 焼成良	
199	G4	SK03	_	-	小碗	В	7.8	2.7	4. 2	7/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/2	密(φ1.0mm以下の長 石、チャート、黒色粒 子を含む)	一部に自然釉付着 付着物 貼付高台 焼成良	変形するため口縁部は 正円をとらない
200	G4	SK03	_	-	小碗	A	8. 0 (1) 8. 5 (3) 7. 8 (4)	5.8 (全)	3. 9 (1)	_	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ1.1㎜以下の長 石、石英、黒色粒子を 含む)	融着遺物4枚 焼成良	一部に自然釉付着 最下部の小碗は高台貼 付時、ナデ付けが不十 分で粘土の盛り上りが 認められる
201	B4	SK03	_	-	碗	A1	16. 1	6. 2	7.9	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ1.5mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの痕跡 底部 に亀裂が入る 焼成良	変形する
202	B4	SK03	_	-	碗	A1	15. 2	5. 1	7.9	9/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白色 2.5Y7/1	密(φ1.5mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	貼付高台 自然釉付着 重ね焼きの痕跡 高台 が付着 焼成良	変形するため口縁部は 正円をとらない
203	B4	SK03	_	-	碗	A1	15. 9	5. 2	7. 0	10/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ1.5mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	貼付高台 籾殻痕 高台の設置痕跡 重ね焼きの痕跡 自然釉付着 焼成やや軟質	
204	B4	SK03	-	_	碗	В2	(16. 8)	5. 2	(7.3)	4/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ ナデ	灰白 10YR8/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの痕跡 (高台 の設置痕跡及び高台が 付着する) 自然釉付着 焼成良	

表 13 遺物一覧表(11)

報告書 掲載 番号	グリッド	遺構	窯体内グ リッド	層位	器種	分類	口径	法量(cm) 器高	底径	残存率	技法など外面	が 内面	色調	胎土	備考1	備考2
205	G4	SK04	_	_	小皿	A	(8.1)	2.5	4.5	7/12	回転ナデ回転糸切り	回転ナデ	灰白色 10YR8/1	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	自然釉付着 重ね焼きにより別個体 付着 糸切りの明確な 痕跡を残さない ナデ消す? 焼成良	
206	G4	SK04	_	_	碗	_	-	(4. 0)	7. 3	10/12	回転ナデ 級切り あいまし	回転 ナデ	にぶい 黄橙 10Y7/3	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	重ね焼き痕 別個体の 高台部付着 籾殻痕 焼成不良	外面に白色の付着物 (重ね焼き時の別個体 が付着した可能性が強 い) 底部裏面にヘラ書き(高 台剥離後に施す) 土師質を呈する
207	G4	SK04	_	_	碗	A2	長 (17.3) 短 (15.0)	高(6.4) 低(4.4)	7.6	8/12	回転ナデ 回転ナデ のちナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 10YR8/1	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	重ね焼きにより別個体 付着 自然釉付着か 籾殻痕 焼成良	変形が著しく、口縁部 は正円をとらない 体部外面下半に整形時 のユビオサエがわずか に残る
208	G4	SK05	_	_	小皿	A	8. 0(1) 8. 5(3) 7. 8(4)	6.8 (全)	3.9(1)	_	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	焼成良	6枚重ね焼き
209	G4	SK05		-	小皿	A	7. 8	2. 2	4. 6	10/12	回転ナデ ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 10YR8/2	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	高台付着か(融着によ る剥離)自然釉 焼成 良	糸切りによる切り離し 時のくぼみ、基本的に 底面は平坦
210	G4	SK05	-	-	小皿	D	7. 9	2. 7	4. 5	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 10YR8/1	密(φ0.5mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	自然釉が一部に付着 焼成やや軟質	
211	G4	SK05	_	_	小碗	В	8. 3	2.7	5. 1	7/12	回転ナデ	回転ナデ	灰白 10YR8/2	密(φ0.5mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	貼付高台 籾殻痕 自然軸付着 高台融着 高台ひずみ 大 焼成良	変形するため、口縁部 底部は正円をとらない 高台の貼付けが不十分 で、粘土の盛り上りや くぼみが認められる 見込部に付着する別個 体の高台も中心に配置 していない
212	G4	SK05	_	-	碗	A1	(14. 9)	4. 5	(7.8)	3/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	貼付高台 籾殻痕 高台がわずかに付着 重ね焼き痕 焼成良	
213	G4	SK05	_	_	碗	A2	15. 9	5. 0	8. 4	11/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	貼付高台 籾殻痕 焼成良	変形するため、口縁部 は正円をとらない (短径:15.5 長径: 16.3)
214	G4	SK05	-	-	碗	A2	16. 3	5. 3	(7.4)	8/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	貼付高台 籾殻痕 焼成やや軟質	
215	G4	SK05	_	-	碗	B2	(15. 5) (1) (15. 0) (2)	5. 3 (1) 5. 2 (2)	7.8(1) 7.0(2)	6/12(1) 6/12(2)	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	貼付高台 高台付着 籾殻痕 自然釉付着 重ね焼き 痕 焼成良	
216	G4	SK06	_	_	小皿	A	8.3(2)	3.6(全)	4.6(1)	_	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	淡黄 2.5Y8/3	密(φ3.5mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	融着遺物2枚 自然釉付着	変形するため、口縁部 は正円をとらない 外側の土器の口縁部付 近に別個体と思われる ものが融着する
217	G4	SK06	_	_	小皿	В	7.8(1)	8.3(全)	4.0(1)	_	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 10YR8/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、黒色粒子を 含む)	融着遺物6枚+外面に付 着物 焼成良	降灰が著しく、泡立つ
218	G4	SK06	_	-	小皿	В	7. 4	2.3	4. 1	8/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	重ね焼き痕 自然釉付 着 焼成良	
219	G4	SK06	_	-	小皿	A	(7.8)	2.8	(4. 2)	3/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	にぶい 黄橙 10YR7/3	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	自然釉付着 焼成不良	底部裏面に別個体?が 付着
220	G4	SK06	_	-	碗	A2	(16. 4)	5.9	(7.9)	3/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 10YR7/1	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 焼成やや軟質	
221	G4	SK06	_	-	碗	A2	(16. 3)	5. 7	7.7	4/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 10YR7/1	密(φ4.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	籾殻痕 重ね焼きの 痕跡 焼成やや軟質	
222	G4	SK06	_	-	片口碗	A2	(14. 6)	(4. 2)	1	2/12	回転ナデ	回転ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ0.5mm以下の長 石、黒色粒子を含む)	自然釉付着 内面に付 着物あり 注口部 (残1か所) 焼成良	
223	G4	SX02	_	下層	碗	A2	16. 6	5.6	7.8	5/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰黄 2.5Y7/2	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	貼付高台 籾殻痕 重ね焼き痕跡 焼成良	高台の一部が自重等に よりつぶれる
224	F3	SX02	_	下層	碗	A2	(16. 2)	4.9	7. 7	6/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰黄 2.5Y7/2	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの痕跡 焼成良	高台が自重等によりつ ぶれる
225	G5	SX02	-	下層	碗	A2	15. 7	5. 3	8.3	12/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	浅黄 2.5Y7/3	密(φ5.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	Na001 貼付高台 籾殻痕 重ね焼きの痕跡 一部に自然釉付着 焼成良	やや変形するため口縁 部は正円をとらない 高台の一部が自重等に よりつぶれる
226	F4	SX02	_	上層/ベ ルト2	碗	A2	15. 7	5. 2	7. 7	7/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 サデ 回転 カデ を カデデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、黒色粒子を 含む)	自然釉付着 貼付高台 重ね焼きの痕跡 籾殻痕 焼成良	

表 14 遺物一覧表(12)

報告書			.10 (,		/		法量(cm)			技法なと	の特徴				
掲載番号	グリッド	遺構	窯体内グ リッド	層位	器種	分類	口径	器高	底径	残存率	外面	内面	色調	胎土	備考1	備考2
227	F5	SX02	_	中層	碗	_	-	(2.4)	(7.0)	5/12	回転ナデ 回転糸切 りのちナ デ	回転 ナデ 回転 ナデの ちナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、黒色粒子を 含む)	貼付高台 籾殻痕 焼成良	
228	F5	SX02	_	中層	碗	1	-	(2.9)	7. 5	7/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y7/1	やや密(φ3.0mm以下の 長石、石英、チャー ト、黒色粒子を含む)	貼付高台 籾殻痕 自然釉付着 重ね焼き の痕跡 焼成良	高台の一部が自重等に よりつぶれる 重みが ある
229	G4	SX02	_	下層	小碗	В	(8.6)	2. 6	4. 6	6/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰黄 2.5Y7/2	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	貼付高台 籾殻痕 焼成良	
230	G4	SX02	_	下層	小碗	В	8.0	2.7	3.9	12/12	回転ナデ	回転ナデ	灰黄 2. 5Y7/2	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	貼付高台 籾殻痕 自然釉付着 別個体付 着 焼成良	高台の一部が自重等に よりつぶれるため、正 円をとらない やや変形するため、口 縁部は正円をとらない
231	F4	SX02	_	下層	小皿	С	(7.5)	2. 9	(4.3)	4/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	黄灰 2.5Y6/1	密(φ7.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	自然釉付着 焼成良	底部が台状になる
232	G4	SX02	-	下層	小皿	D	7. 7	2.6	4.6	8/12	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰黄 2.5Y7/2	密(φ1.0mm以下の長 石、チャート、黒色粒 子を含む)	付着物あり 自然釉付 着 焼成良	
233	G4	SX02	_	下層	小皿	A	8. 2 (1 · 2)	2.7(1) 3.4(全)	4.5(1)	_	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰黄 2.5Y7/2	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	融着遺物2枚 自然釉付 着 付着物あり 焼成 良	変形するため、口縁部 は正円をとらない
234	F4	SX02	_	下層	小碗	В	8.3 (1·3) 8.5 (2)	2.7(1) 4.9(全)	4.3(1)	_	回転ナデ 回転糸切 り	回転 ナデ	灰黄 2.5Y7/2	密(φ4.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	融着3枚 降灰 自然釉付着 別個体融着 焼成良	3枚重ね焼き 高台貼付 高台が一部剥離するた めさらに重なっている 可能性がある 3枚目上面に降灰
235	G4	SX02	_	下層	片口鉢か	1	ı	(5. 5)	_	破片	回転ナデ	回転ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	焼成良	
236	G4	SX02	_	下層	碗	ı	(16. 3)	4. 2	8. 2	7/12	回転ナデ 回転糸切 り	不明	灰白 2.5Y8/1	密(φ3.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	焼成良	上面に厚く降灰する 高台が剥離する?
237	G5	SX02	_	下層	碗 (無台 碗)	A2	l	7.9(全)	8.4(1)	_	回転ナデ 底部へラ 切り後不 調整?	回転ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、チャート、 黒色粒子を含む)	融着遺物5枚+付着物	5枚重ね焼き それぞれ高台を欠くも のである 1枚目の底部 に別個体の一部が付着 するため、さらに重な る可能性がある
238	F5	SX02	-	中層	碗·小 皿	A2 • A	8.4 (<u>111</u> 2)	8.9(全)	8.6 (碗1)	_	回転ナデ 回転糸切 り	回転ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ2.0mm以下の長 石、石英、黒色粒子を 含む)	融着遺物(皿4枚+碗3枚 +別個体付着) 焼成良	碗3枚+小皿4枚重ね焼き碗は変形する碗高台に籾殻痕(貼付高台) 小皿は変形しない
239	F5	SX02	_	下層	小皿	В	8. 5 (10) 8. 3 (6 · 7) 8. 1 (5) 7. 9 (3 · 4) 7. 8 (2)	2.3(1) 10.5 (全)	4. 2(1)	_	回転ナデ 回転糸切 り	観察不可	灰白 2.5Y8/2	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	融着遺物10枚 焼成良	10枚重ね焼き 最上部に厚く自然釉が 付着(降灰)
240	G6	SY01	XI	7層	碗・焼 台付着	1	タテ 15. 5	ョコ 14.3	高 7.8	_	土器: 回転ナデ 焼台: オサエ	土器: 回転 ナデ	土器: にぶい 黄橙 10YR7/2 焼台: 灰黄褐 10YR6/2	土器: 密(φ3.0mm以下 の長石、石英、チャー ト、黒色粒子を含む) 焼台: やや密(φ3.0mm 以下の長石、石英、 チャートを含む)	貼付高台 重ね焼きの 痕跡 土器:焼成不良 焼台:焼成良	焼台に据えた状態の山 茶碗 焼台は裏面が平坦なた め、床面は平坦な位置 に据えたことを示唆 山茶碗底部に亀裂
242	G6	SY01	v · vi	流入土 (縦断)	短頸壺 底部	-	I	(5.4)	_	破片	回転ナデ	回転ナデ	灰白 2.5Y7/1	密(φ1.0mm以下の長 石、黒色粒子を含む)	自然釉付着 焼成良	
241	ı	-	-	表土	短頸壺	1	I	(7.9)	_	破片	回転ナデ	回転ナデ	灰白 10YR8/1	密(φ1.0mm以下の長石 を含む)	自然釉付着 焼成良	
243	F6	_	_	灰黄色 中粒砂	片口鉢 底部	-	I	(5. 2)	_	破片	回転ナデ	回転 ナデ	灰白 2.5Y8/1	密(φ1.0mm以下の長石 を含む)	自然釉付着 焼成良	
244	G5	SY01	VI	床面	焼台	ı	タテ 13.6	ョコ 10.6	高 7.4	-	ナデ オサエ	-	灰 7. 5Y6/1	密(φ10.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.294 高台痕 窯壁側不調整 焼成良	
245	G5	SY01	VI	床面	焼台	-	タテ 14. 4	ョコ 13.4	高 8.1	-	ナデ オサエ	-	灰 7.5Y6/1	密(φ10.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.295 高台痕 窯壁側不調整 焼成良	
246	G5	SY01	V	床面	焼台	_	タテ 13.0	ээ 11.5	高 8.8	-	ナデ オサエ	_	黄灰 2.5Y6/1	密(φ8.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.303 高台痕 窯壁側不調整 焼成良	
247	G5	SY01	V	床面	焼台	_	タテ (15. 2)	33 (11.6)	高 (7.3)	-	ナデオサエ	_	灰 7.5Y6/1	密(φ5.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.312 高台痕 窯壁側不調整 焼成良 No.301 高台痕	
248	G5	SY01	V	床面	焼台	_	タテ 15.0	33 11.8	高 7.2	-	ナデオサエ	-	灰 5Y6/1	密(φ9mm以下の長石、 石英、チャートを含む)	1No.301 高 日报 窯壁側不調整 焼成不 良	
249	G5	SY01	VIII	床面	焼台	_	タテ 13.3	33 13.5	高 7.4	-	ナデオサエ	-	黄灰 2.5Y6/1	密(φ8.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.372 高台痕 窯壁側 不調整 焼成良	
250	G5	SY01	VIII	床面	焼台	_	タテ 12.0	ョコ 12.8	高 6.0	-	ナデ オサエ	-	灰 5Y6/1	密(φ8.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.378 高台痕 窯壁側 不調整 焼成良	

表 15 遺物一覧表(13)

報告書	グリッド	潰構	窯体内グ	显丛	0.0 0.0	分	:	法量(cm)		***	技法など	の特徴	∠ 3 田	1. 40	[#: ±z.1	##: ##.O
掲載 番号	クリット	返悔	リッド	層位	器種	類	口径	器高	底径	残存率	外面	内面	色調	胎土	備考1	備考2
251	G5	SY01	V	床面	焼台	1	タテ (12.8)	ョコ (9.8)	高 (7.2)	_	ナデ オサエ		浅黄 2.5Y7 /3	密(φ7.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.316 高台痕 焼成良	
252	G5	SY01	V~VIII	床面	焼台	_	タテ 12.8	ョョ 13.3	高 6.6	-	ナデ オサエ	-		密(φ5mm以下の長石、 石英、チャートを含む)	No.361 高台痕 窯壁側 不調整 焼成不良	
253	G5	SY01	V	床面	焼台	_	タテ 14.4	ョコ 14.5	高 6.7	-	ナデ オサエ	-	黄灰 2.5Y6/1	密(φ1.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.324 高台痕 窯壁側 不調整 焼成良	
254	G5	SY01	VI	床面	焼台	1	タテ 13.9	ョョ 13.3	高 7.2	-	ナデ オサエ	-		密(φ5mm以下の長石、 石英、チャートを含む)	No.290 高台痕 窯壁側不調整 焼成良	
255	G5	SY01	VII	床面	焼台	1	タテ 13.1	ョョ 12.5	高 4.8	-	ナデ オサエ	-	褐灰 10YR6/1	密(φ7.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.419 高台痕 木葉痕 窯壁接地面不調整 焼成堅緻	
256	G5	SY01	VIII	床面	焼台		タテ 15.2	ョョ 16.1	高 4.7	_	ナデ オサエ 掌圧によ るオサエ	_		密(φ12mm以下の長石、 石英、チャートを含む)	No.394 高台痕 高台の痕跡2個体? 窯壁接地面不調整 焼成良	
257	G5	SY01	VIII	床面	焼台	1	タテ 13.6	ョョ 12.7	高 5.1	-	ナデ オサエ	-	黄灰 2.5Y6/1	密(φ7.0mm以下の長 石、石英、チャートを 含む)	No.387 高台痕 窯壁接地面不調整 焼成良	

第5章 自然科学分析の結果

第1節 上入道古窯の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ 伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹 Zaur Lomtatidze・小林克也

1. はじめに

愛知県大府市の上入道古窯から出土した試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性 炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて樹種同定も行われている(樹種同定の項参照)。

2. 試料と方法

試料は、SX03 の床面直上から1点(試料 No.1: PLD-36149)、SK03 から1点(試料 No.5: PLD-36150)、SY01 のVII区の床面下から1点(試料 No.18: PLD-36151)、SY01 のXI区の壁面から1点(試料 No.24: PLD-36152)の、計4点の出土炭化材である。

SY01 は山茶碗の窯跡で、XI区壁面の試料 No.24 は窯体の構築材である。VII区床面下の試料 No.18 は山茶碗の窯跡の下層面から出土した炭化材で、SK03 の試料 No.5 は山茶碗の窯跡の上層面から出土した炭化材である。SX03 は、山茶碗の窯跡の廃棄後に窯跡を転用して築窯された炭窯である。

試料はいずれも最終形成年輪が残っており、樹種同定の結果、試料 No. 1、18 はコナラ属コナラ節、 試料 No. 5 はマツ属複維管東亜属、試料 No. 24 はサクラ属であった。測定試料の情報、調製データは 表 1 のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C 年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-36149	試料No. 1 グリッド: G5 遺構: SX03 層位:床面直上 遺物No. 062	種類:炭化材 (コナラ属コナラ節) 試料の性状:最終形成年輪 状態:dry	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)
PLD-36150	試料No. 5 グリッド: G4 遺構: SK03 遺物No. 189	種類:炭化材(マツ属複維管束亜属) 試料の性状:最終形成年輪 状態:dry	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)
PLD-36151	試料No. 18 グリッド: G5 遺構: SY01 調査区: VII区 層位:床面下 遺物No. 423	種類:炭化材 (コナラ属コナラ節) 試料の性状:最終形成年輪 状態:dry	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)
PLD-36152	試料No. 24 グリッド: G5 遺構: SY01 調査区: XI区 層位: 壁面 遺物No. 871	種類:炭化材(サクラ属) 試料の性状:最終形成年輪 状態:dry	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)

3. 結果

表 2 に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比(δ ¹³C)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ¹⁴C 年代、図 1 にマルチプロット図を、図 2 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

 14 C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 14 C 年代(yrBP)の算出には、 14 C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した 14 C 年代誤差($\pm 1\,\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の 14 C 年代がその 14 C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ¹⁴C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ¹⁴C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ¹⁴C 濃度の変動、および半減期の違い (¹⁴C の半減期 5730±40 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

 14 C年代の暦年較正にはOxCal4.3(較正曲線データ:IntCal13)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された 14 C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は 14 C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

衣 2 放射性灰条牛乳側足わより筒牛製工の指え	定および暦年較正の結果	2 放射性炭素年代	表 2
-------------------------	-------------	-----------	-----

<u> </u>	午に例定わまり	日十秋正や旭木			
測定番号	δ ^{13}C	暦年較正用年代	¹⁴ C 年代	¹⁴ C年代を暦年代に	較正した年代範囲
例足留力	(‰)	$(yrBP\pm 1\sigma)$	(yrBP±1σ)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-36149 SX03床面直上 試料No. 1	-26.33 ± 0.16	910±16	910±15	1049-1085 cal AD (44.3%) 1124-1137 cal AD (13.1%) 1150-1160 cal AD (10.9%)	1040-1109 cal AD (58.2%) 1116-1167 cal AD (37.2%)
PLD-36150 SK03 試料No.5	-26.34 ± 0.20	955±16	955±15	1030-1046 cal AD (22.7%) 1093-1120 cal AD (37.5%) 1141-1147 cal AD (8.0%)	1024-1053 cal AD (28.9%) 1080-1153 cal AD (66.5%)
PLD-36151 SY01 Ⅵ 区床面下 試料No. 18	-25.18 ± 0.19	988±16	990±15	1017-1038 cal AD (68.2%)	1013-1047 cal AD (79.0%) 1092-1122 cal AD (14.1%) 1140-1148 cal AD (2.3%)
PLD-36152 SY01XI区壁面 試料No. 24	-30.57 ± 0.20	983±17	985±15	1019-1040 cal AD (62.3%) 1110-1115 cal AD (5.9%)	1015-1050 cal AD (67.1%) 1085-1125 cal AD (23.3%) 1136-1150 cal AD (5.0%)

4. 考察

以下、2σ暦年代範囲(確率 95.4%)に着目し、暦年代の古い順に結果を整理する。

SY01 のVII区の床面下から出土した試料 No.18 (PLD-36151) は、1013-1047 cal AD (79.0%)、1092-1122 cal AD (14.1%)、1140-1148 cal AD (2.3%)で、11 世紀前半~12 世紀中頃の暦年代を示した。

SY01 のXI区の壁面から出土した試料 No.24 (PLD-36152) は、1015-1050 cal AD (67.1%)、1085-1125 cal AD (23.3%)、1136-1150 cal AD (5.0%)で、11 世紀前半~12 世紀中頃の暦年代を示した。

SKO3 から出土した試料 No. 5 (PLD-36150) は、1024-1053 cal AD (28.9%)および 1080-1153 cal AD (66.5%)で、11 世紀前半~12 世紀中頃の暦年代を示した。

SX03の試料 No. 1 (PLD-36149) は、1040-1109 cal AD (58.2%)および 1116-1167 cal AD (37.2%)で、11 世紀中頃~12 世紀後半頃の暦年代を示した。

今回の試料は、いずれも平安時代中期~後期に相当する暦年代を示した。いずれの試料も最終形成年輪が残っており、測定結果は木材の枯死もしくは伐採年代を示す。測定結果では、下層面(床面下)の炭化材、窯体の構築材、上層面の炭化材の順に新しくなり、炭窯の炭化材が最も新しい値を示した。これは、発掘調査所見と整合的である。

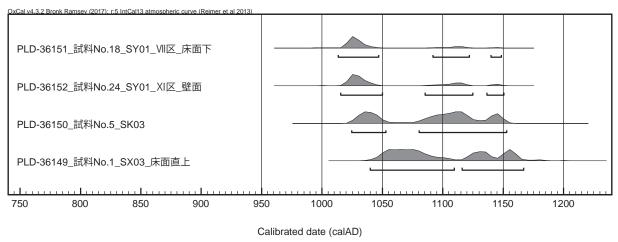
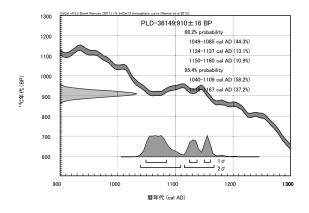


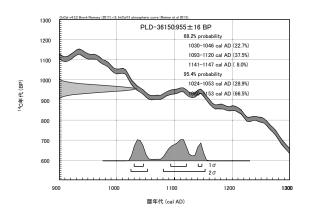
図1 マルチプロット図

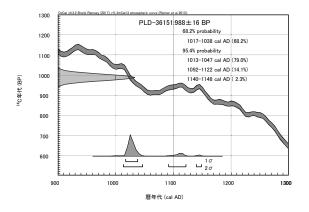
参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360. 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ¹⁴C 年代編集委員会編「日本先史時代の ¹⁴C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.







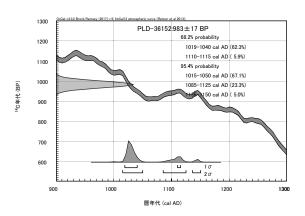


図2 暦年較正結果

第2節 上入道古窯の考古地磁気年代推定

藤根 久・Lomtatidze Zaur (パレオ・ラボ)

1. はじめに

上入道古窯は、愛知県大府市共和町地内に所在する山茶碗焼成窯である。ここでは、上入道 古窯の床面焼土の熱残留磁化を測定し、その磁化方向から窯跡の焼成年代を推定した。

2. 考古地磁気年代推定の原理

地球上には地磁気が存在するために、磁石は北を指す。この地磁気は、その方向と強度(全磁力)によって表される。方向は、真北からの角度である偏角(Declination)と水平面からの角度である伏角(Inclination)によって表す。磁気コンパスが北として示す方向(磁北)は、真北からずれており、この間の角度が偏角である。また、磁針をその重心で支え、磁南北と平行な鉛直面内で自由に回転できるようにすると、北半球では磁針のN極が水平面より下方を指す。この時の傾斜角が伏角である。現在、この付近の偏角は約7.06°、伏角は約48.77°、全磁力(水平分力)は約30775.63 (nT)である(理科年表,2006;いずれも2000年値)。これらの地磁気の三要素(偏角・伏角・全磁力)は、観測する地点によって異なった値になる。全世界地磁気三要素の観測データの解析から、現在の地磁気の分布は、地球の中心に棒磁石を置いた時にできる磁場分布に近似する。また、こうした地磁気は時間の経過とともに変化し、ある地点で観測される偏角や伏角あるいは全磁力の値も時代とともに変化する。この地磁気の変動を地磁気永年変化と呼んでいる。

過去の地磁気の様子は、高温で焼かれた窯跡や炉跡などの焼土、地表近くで高温から固結した火山岩や堆積物などの残留磁化測定から知ることができる。大半の物質は、ある磁場中に置かれると磁気を帯びるが、強磁性鉱物(磁鉄鉱など)はこの磁場が取り除かれた後でも磁気が残る。これが残留磁化である。考古地磁気では、焼土の残留磁化(熱残留磁化)が、焼かれた当時の地磁気の方向を記録する点を利用する。こうした地磁気の化石を調べた結果、地磁気の方向は少しずつ変化しており、その変化は地域によって違っている。過去2,000年については、西南日本の窯跡や炉跡の焼土の熱残留磁化測定から、その変化が詳しく調べられている(広岡,1977; Shibuya,1980)。一方、地磁気には地域差が認められることから、東海地方における地磁気永年変化曲線が求められている(広岡・藤澤,2002)。

こうした年代のよく分かっている窯跡焼土や火山岩の熱残留磁化測定などから地磁気永年変化曲線が得られると、逆に年代の確かでない遺跡焼土などの残留磁化測定の結果を、先の地磁気永年変化曲線と比較すると、焼成時の年代が推定できる。また、年代が推定されている窯跡焼土などについて、土器とは違った方法で焼成時の年代を推定できるため、推定年代に対する科学的な裏付けにも利用できる。この年代推定法が考古地磁気による年代推定法である。ただし、この方法は、「4C年代測定法などのように、測定結果単独で年代を決定する方法ではない。すなわち、焼土の熱残留磁化測定から得られる偏角および伏角の値からは複数の年代値が推定され、そのいずれを採用するかは、焼き物等の年代が参考となる。

3. 試料採取と残留磁化測定

考古地磁気による年代推定は、a)測定用試料の採取および整形、b)残留磁化測定および統計計算、c)地磁気永年変化曲線との比較を行い、焼成年代を推定する。なお、試料の磁化保持力や焼成以後の二次的な残留磁化の有無などを確認するために、段階交流消磁も行った。

A. 測定用試料の採取および整形

試料は、床焼土面において、①一辺約4cmの立方体試料を取り出すため、瓦用ハンマーなどを用いて、対象とする部分(良く焼けた部分)の周囲に溝を掘る。②薄く溶いた石膏を試料全体にかけ、試料表面を補強する。③やや固め(練りハミガキ程度)の石膏を試料上面にかけ、すばやく一辺5cmの正方形のアルミ板を押し付け、石膏が固まるまで放置する。④石膏が固まった後、アルミ板を剥し、この面の最大傾斜の方位および傾斜角を磁気コンパス(考古地磁気用に改良したクリノメータ)で測定し、方位を記録すると同時に、この面に方位を示すマークと番号を記入する。⑤試料を掘り起こした後、試料の底面に石膏をつけて補強し、持ち帰る。⑥持ち帰った試料は、ダイヤモンド・カッターを用いて一辺3.5cm、厚さ2cm程度の立方体に切断する。この際、切断面が崩れないように、一面ごとに石膏を塗って補強し、熱残留磁化測定用試料とする。採取した試料は、13試料である。なお、採取時に、1試料が破損した。

B. 段階交流消磁、熱残留磁化測定および統計計算の結果

熱残留磁化は、リング・コア型スピナー磁力計(SMM-85:(株)夏原技研製)を用いて測定した。磁化保持力の様子や放棄された後の二次的な磁化の有無を確認するため、任意1試料(No.1)について交流消磁装置(DEM-8601:(株)夏原技研製)を用いて段階的に消磁を行い、その都度スピナー磁力計を用いて残留磁化を測定した。その結果、試料の磁化強度は10⁻³~10⁻⁴emuと強かった。さらに、磁化方向は両者とも中心に向かって直線的に変化し、安定した方向を記録していた。

以上の理由から、150 Oeで消磁した際の残留磁化方向が焼成時の磁化方向であると判断した。 そこで、これ以外の段階交流消磁を行っていない試料も、150 Oe消磁した後に残留磁化を測 定した。

複数試料の測定から得た偏角(Di)、伏角(Ii)を用いて、Fisher(1953)の統計法により 平均値(Dm、Im)を求めた。信頼度計数は、713.58と比較的高い値であるが、伏角および偏 角の各誤差はやや大きい値となった(表1)。

求めた熱残留磁化方向は、真北を基準とする座標に対する数値に補正する。偏角は、建設省国土地理院の1990.0年の磁気偏角近似式から計算した7.06°Wを使用した。その結果は、広岡(1977)による地磁気永年変化曲線とともにプロットした(図1)。図中の測定点に示した楕円は、Fisher(1953)の95%信頼角より算定した偏角および伏角の各誤差から作成した。

遺構名	試料No.	偏角(°E)	伏角(°)	強度(x10 ⁻³ emu)	備考	統計処理項目	統計値
	1	-2.2	59. 4	0. 931	段階交流消磁	試料数 (n)	11
	2	0.4	59. 2	2. 655		武科数 (II)	11
	3	0.3	62. 4	1. 684		平均偏角 I m (°E)	2. 97
	4	3. 7	64.8	0. 920		干均隔月 I Ⅲ (E)	2.91
	5	-18.9	52. 5	4. 919	計算から除外	平均伏角Dm (°)	60. 89
	6	3.8	63.7	1. 205		平均伏角加()	00.89
上入道古窯	7	6. 2	62.7	0.674		- 誤差角δΙ(°)	3. 51
(150 Oe消磁)	8				破 損	映左角 0 1 ()	5. 51
	9	2. 9	62. 5	1.717		誤差角 δ D (°)	1.71
	10	13. 2	63. 6	0.961	計算から除外	映左角 0 D ()	1. 71
	11	0. 5	61.1	2. 176		信頼度計数(k)	713. 58
	12	7. 2	56. 2	1. 143		口积及II 数(K)	713.36
	13	6. 5	59. 9	1. 250		平均磁化強度	1. 28
	14	3. 2	57. 6	1. 321		$(x10^{-3} \text{ emu})$	1. 20

表1 窯跡床面焼土の残留磁化測定結果(偏角補正前)

4. 焼成年代値の推定

図1には、広岡・藤澤(2002)による地磁気永年変化曲線の一部とともに、今回の試料である窯跡床面焼土の磁化方向を示した。窯跡の磁化方向は、標準曲線のAD1,100~1,200年間の曲線付近にプロットされた。

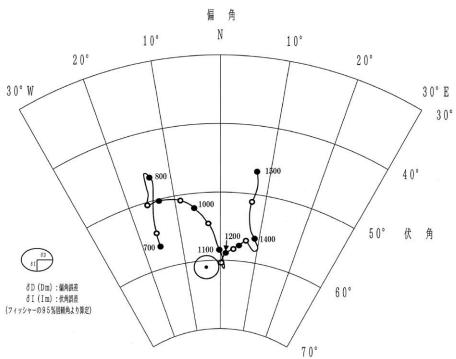


図1 広岡・藤澤(2002)による地磁気永年変化曲線(一部)と窯跡焼土の残留磁化方向

焼成年代は、磁化方向の中心にもっとも近い標準曲線上に移動して推定した。その結果、窯跡の焼成年代はAD1,110-1,200年と推定された(表2)。

この上入道古窯は、山茶碗の5型式(12世紀末~13世紀初頭)に使用されたと考えられており、考古地磁気による推定焼成年代と近似する値が得られた。

表 2 窯跡の焼成年代推定値

遺構	遺物による年代	残留磁化測定による推定年代
上入道古窯	12世紀末~13世紀初頭	AD 1,110-1,200年

引用文献

Fisher, R.A. (1953) Disparsion on a sphere. Proc. Roy. Soc. London, A, 217, 295-305. 広岡公夫 (1977) 考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向. 第四紀研究, 15, 20 0-203.

広岡公夫・藤澤良祐(2002) 東海地方の地磁気永年変化曲線. 考古学と自然科学, 45, 29-5 4.

国立天文台編(2006)理科年表. 1030p, 丸善.

第3節 上入道古窯出土炭化材の樹種同定

小林克也 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

愛知県大府市の上入道古窯から出土した炭化材の樹種同定を行なった。なお、一部の試料については、放射性炭素年代測定も行われている(放射性炭素年代測定の項参照)。

2. 試料と方法

試料は、炭焼窯である SX03 から出土した炭化材 1 点と、山茶碗窯である SY01 から出土した炭化材 17 点、SK03 および SK05 から出土した炭化材各 2 点、SK04 および SP01 から出土した炭化材各 1 点の、計 24 点である。試料の時期については、放射性炭素年代測定の結果、試料 No. 1、5、18、24 はいずれも 11 世紀前半~12 世紀後半におさまる暦年代を示した。

SY01 の壁面から出土した炭化材は窯体構築材で、床面下から出土した炭化材は用途不明の資料である。それ以外のSY01 から出土した炭化材およびSK03、SK04、SK05、SP01 から出土した炭化材は、山茶碗窯の上層面の燃料材である。SX03 はSY01 の操業後に改築された炭焼窯であり、出土した炭化材は炭焼窯で焼成された炭製品もしくは燃料材と考えられる。

各試料について、復元直径と残存半径、残存年輪数の計測を行なった。復元直径は、1 cm 刻みの 同心円に試料を当てて求めた。残存半径は試料に残存する半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径 内の年輪数を計測した。

炭化材の樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柾目)について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後、イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡(KEYENCE 社製 VE-9800)にて検鏡および写真撮影を行なった。

3. 結果

同定の結果、針葉樹ではマツ属複維 管束亜属のみ1分類群、広葉樹ではサ クラ属とコナラ属クヌギ節(以下、ク ヌギ節)、コナラ属コナラ節(以下、 コナラ節)の3分類群、単子葉ではイ ネ科のみ1分類群の、計3分類群がみ られた。マツ属複維管束亜属が10点

遺構		山茶碗窯		炭焼窯	
種類	上層面	下層面	構築材	炭製品か	合計
1里天具	燃料材	不明	竹米们	燃料材	п п
マツ属複維管束亜属	9	1			10
サクラ属			1		1
コナラ属クヌギ節		3			3
コナラ属コナラ節	1	6		1	8
イネ科		2			2

合計 10 12 1 1

24

表 1 上入道古窯出土炭化材の樹種同定結果一覧

で最も多く、コナラ節が8点、クヌギ節が3点、イネ科が2点、サクラ属が1点みられた。同定結果を表1に、一覧を付表1に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 図版1 1a-1c(No.2)、2a(No.9)、3a(No.10)、4a(No.16)

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射柔細胞および放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁の肥厚は鋸歯状であり、分野壁孔は窓状となる。

マツ属複維管東亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬で、切削等の加工は容易である。

(2) サクラ属(広義) Prunus s.l. バラ科 図版 1 5a-5c(No.24)

小型の道管が単独ないし数個、放射方向または斜め方向に複合してやや密に散在する散孔材である。 道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1列が直立する異性で、1 ~5列幅となる。

広義のサクラ属には、モモ属とスモモ属、アンズ属、サクラ属、ウワミズザクラ属、バクチノキ属がある。樹種同定ではモモ属とバクチノキ属以外は他のサクラ属と識別できないため、広義のサクラ属とはモモ属とバクチノキ属を除くサクラ属を指す。

(3) コナラ属クヌギ節 Quercus sect. Aegilops ブナ科 図版2 6a-6c(No.20)

年輪のはじめに大型の道管が1~3列並び、晩材部では急に径を減じた、厚壁で丸い道管が放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で、切削などの加工はやや困難である。

(4) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版2 7a-7c(No.8)、8a(No.18)、9a(No.19)

年輪のはじめに大型の道管が1~2列並び、晩材部では急に径を減じた、薄壁で角張った道管が火 炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組 織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属コナラ節にはコナラやミズナラなどがあり、温帯から暖帯にかけて広く分布する落葉高木 の広葉樹である。代表的なミズナラの材は、やや重く強靭で、切削加工はやや難しい。

(5) イネ科 Gramineae 図版2 10a(No.23)

向軸側の原生木部、その左右の2個の後生木部、背軸側の篩部の三つで構成される維管束が散在する単子葉植物の稈である。維管束の配列は不整中心柱となる。維管束鞘の細胞は比較的薄い。

イネ科は、タケ亜科やキビ亜科など7亜科がみられる単子葉植物であるが、対照標本が少なく、同 定には至っていない。

4. 考察

山茶碗窯である SY01 の下層面(床面下)から出土した炭化材は、コナラ節が6点、クヌギ節が3点、イネ科が2点、マツ属複維管束亜属が1点で、クヌギ節とコナラ節が多かった。これに対し、上層面の燃料材は、マツ属複維管束亜属が9点とコナラ節が1点で、マツ属複維管束亜属が多くみられ、上層面と下層面で樹種の利用傾向が異なっていた。また、壁面出土の構築材は、サクラ属であった。

燃料材に利用されていたこれらの樹種の材質をみると、マツ属複維管束亜属は油分が多くて高火力で燃焼するという材質を持つが、クヌギ節とコナラ節は高火力で燃焼はしないが、長時間燃焼し続けるという材質を持つ。また、構築材のサクラ属は堅硬な材質を持つ(伊東ほか,2011)。草本類のイネ科は、窯の焚き付けの際に利用されたと考えられる。SY01の燃料材には、焚き付けの際にはイネ科の草本類、燃料材には薪炭材に適した樹木が利用され、構築材には堅硬な樹種が利用されていたと考えられる。

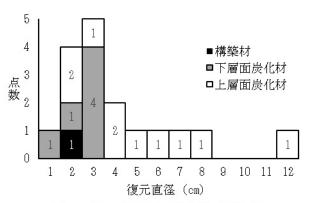


図1 山茶碗窯跡出土炭化材の復元直径

計測が行えた試料の復元直径をみると(図1)、上層面の燃料材は復元直径2~12cm に分布するのが確認でき、下層面の炭化材は復元直径1~3cm に分布し、復元直径3cm にピークがみられた。構築材の復元直径は2cm であった。したがって、SY01の下層面の段階には相対的に直径の細いクヌギ節やコナラ節を利用し、上層面の段階には相対的に直径の太いマツ属複維管東亜属を利用していた可能性がある。なお、試料の肉眼観察では、直径の太いマツ属複維管東亜属に割り材など燃料材の加工が行われていたような痕跡は確認できなかった。

マツ属複維管東亜属およびクヌギ節、コナラ節は、上入道古窯の周辺に生育可能な樹種である(伊東ほか、2011)。大府市からはやや離れるが、瀬戸市の上品野蟹川遺跡の中世(鎌倉・室町期)の層に対して行われた花粉分析では、周辺に針葉樹のマツ属複維管東亜属、イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科、広葉樹のクヌギ節とコナラ節を含めたコナラ属コナラ亜属、アカガシ亜属、シイノキ属を主体とした森林が広がっていたと推測されており(新山・鈴木、1998)、大府市域でも中世には同様の植生が広がっていた可能性がある。

上入道古窯の SY01 の操業前期には、窯跡周辺の森林より、クヌギ節およびコナラ節を選択して伐採し、操業後期にはクヌギ節およびコナラ節が枯渇したために、代替としてマツ属複維管束亜属を利用していた可能性や、操業前期と操業後期で何らかの要因により燃料材の樹種を変えて焼成を行なっていた可能性などがある。

大府市域では、12~13世紀代の山茶碗窯の燃料材の樹種同定が多く行われている。深廻間A古窯群やガンジ山A古窯群ではクヌギ節やコナラ節が多く、羽根山古窯群や砂原古窯、森岡第1号窯群、深廻間B古窯群ではマツ属複維管東亜属が多い(黒沼,2014)。上入道古窯のSY01も同様の傾向を示し、下層面と上層面における燃料材の樹種利用の変化が確認できた。

SY01 の廃棄後に改築された炭焼窯である SX03 から出土した炭化材 1 点は、コナラ節であった。 試料は炭焼窯で焼成された炭製品の可能性と、焼成時の燃料材の可能性があるが、形状等による判断 はできなかった。また、微細な試料であり、復元直径の計測も行えなかった。

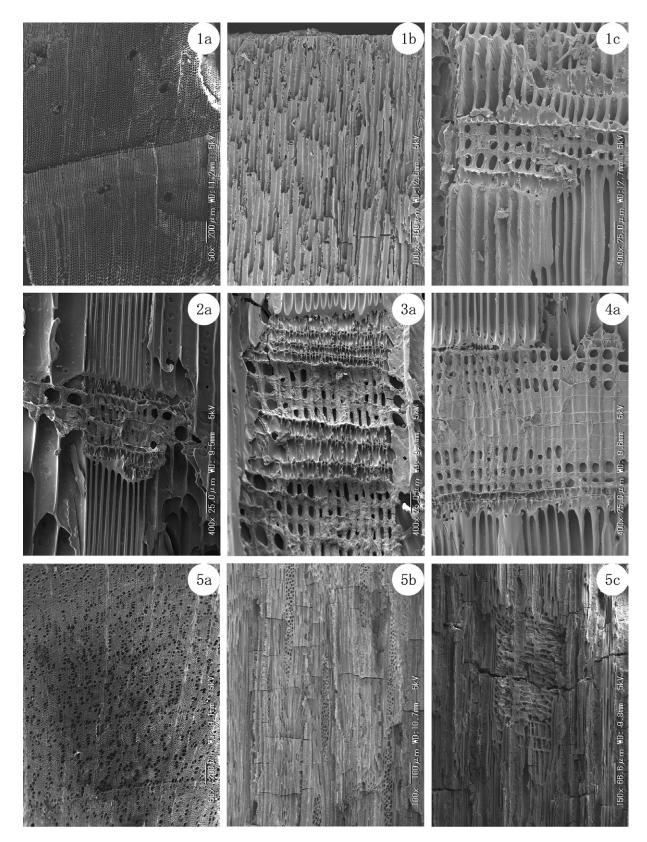
上入道古窯の周辺でみつかっている炭焼窯の例では、長久手市の 12 世紀後半の丁子田 2 号窯で復元直径 2~3 cmのマツ属複維管束亜属が 13 点とコナラ節が 1 点(小林, 2007)、13 世紀中頃の小田妻古窯 SX05 でクヌギ節が 3 点、コナラ節が 2 点、マツ属複維管束亜属が 1 点、同定されている(パ

リノ・サーヴェイ株式会社, 1992)。

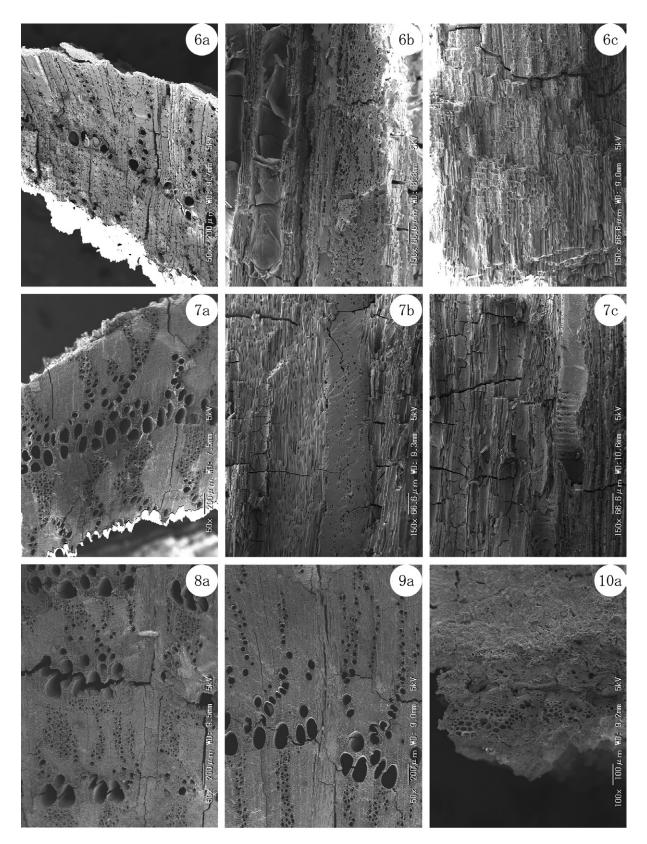
引用文献

- 伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂(2011)日本有用樹木誌,238p,海青社. 小林克也(2007)炭化木材樹種同定.瀬戸市文化振興財団編「丁子田窯跡・市ヶ洞1号窯跡」:149-154, 長久手町教育委員会.
- 黒沼保子(2014)市内および周辺地域の古窯の燃料材に関する考察. 大府市教育委員会編「瀬戸 C 古窯群・久分古窯群」: 134-137, 大府市教育委員会.
- 新山雅広・鈴木 茂(1998)上品野蟹川遺跡の自然科学分析。瀬戸市埋蔵文化財センター編「上品野蟹川遺跡」:82-98,瀬戸市埋蔵文化財センター。
- パリノ・サーヴェイ株式会社(1992)小田妻古窯跡群出土木炭の樹種同定. 愛知県埋蔵文化財センター編「小田妻古窯跡群」:71-75, 愛知県埋蔵文化財センター.

付表 1		追古黑	出土灰化和	オの樹種同気		- 覧						
試料 No.	グリ ッド	遺構	地区	層位	遺物 No.	種類	樹種	残存半径 (cm)	残存 年輪数	復元直径 (cm)	備考	年代 測定番号
1	G5	SX03		床面直上	062	炭製品か 燃料材	コナラ属コナラ節	-	-	-	SY01操業 後に築窯	PLD-36149
2	G5	SY01	IX区	流入土		燃料材	マツ属複維管東亜属	3. 1	25	7	SY01上層面	
3	G5	SY01	XI区	7層	074	燃料材	マツ属複維管東亜属	1.0	15	4	SY01上層面	
4	G4	SY01	XII区	(土坑)	185	燃料材	マツ属複維管東亜属	1.4	22	12	SY01上層面	
5	G4	SK03			189	燃料材	マツ属複維管東亜属	2. 2	5	5	SY01上層面	PLD-36150
6	G4	SK04				燃料材	マツ属複維管東亜属	1.6	10	4	SY01上層面	
7	F4	SP01				燃料材	マツ属複維管東亜属	2. 2	30	8	SY01上層面	
8	G4	SK03				燃料材	コナラ属コナラ節	1.0	7	2	SY01上層面	
9	G4	SK05			229	燃料材	マツ属複維管東亜属	3. 0	20	6	SY01上層面	
10	G4	SY01	XIV⊠	床面	230	燃料材	マツ属複維管束亜属	0.7	8	3	SY01上層面	
11	G4	SK05				燃料材	マツ属複維管束亜属	1.0	7	2	SY01上層面	
12	G5	SY01	V区	床面下 充填土層	872	不明	コナラ属クヌギ節	1.0	3	2	SY01下層面	
13	G5	SY01	VI⊠	床面下 充填土層	874	不明	コナラ属クヌギ節	=	-	=	SY01下層面	
14	G5	SY01	VⅢ区	床面下		不明	コナラ属コナラ節	1.5	8	3	SY01下層面	
15	G5	SY01	WI⊠	床面下	420	不明	コナラ属コナラ節	0.5	5	1	SY01下層面	
16	G5	SY01	WI⊠	床面下	421	不明	マツ属複維管束亜属	1.5	24	3	SY01下層面	
17	G5	SY01	VII⊠	床面下	422	不明	イネ科	=	-	=	SY01下層面	
18	G5	SY01	WI⊠	床面下	423	不明	コナラ属コナラ節	1.5	17	3	SY01下層面	PLD-36151
19	G5	SY01	WI⊠	床面下	424	不明	コナラ属コナラ節	1.5	9	3	SY01下層面	
20	G5	SY01	WI区	床面下	425	不明	コナラ属クヌギ節	-	-	-	SY01下層面	
21	G5	SY01	WI区	床面下	426	不明	コナラ属コナラ節	-	-	-	SY01下層面	
22	G5	SY01	VII⊠	床面下	427	不明	コナラ属コナラ節	-	-	-	SY01下層面	
23	G5	SY01	VII⊠	床面下	428	不明	イネ科	-	-	-	SY01下層面	
24	G5	SY01	XI区	壁面	871	構築材	サクラ属	0.8	13	2	SY01構築材	PLD-36152



図版 1 上入道古窯出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(1) 1a-1c.マツ属複維管東亜属(No. 2)、2a.マツ属複維管東亜属(No. 9)、3a.マツ属複維管東亜属(No. 10)、4a.マツ属複維管東亜属(No. 16)、5a-5c.サクラ属(No. 24) a:横断面、b:接線断面、c:放射断面



図版 2 上入道古窯出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(2) 6a-6c. コナラ属クヌギ節(No. 20)、7a-7c. コナラ属コナラ節(No. 8)、8a. コナラ属コナラ節(No. 18)、 9a. コナラ属コナラ節(No. 19)、10a. イネ科(No. 23) a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

第6章 総括

これまで上入道古窯の調査成果を遺構・遺物ご とに概説してきたが、終わりに本調査での成果を ここでまとめ、総括としたい。

SY01 について

窯体の構造としては分焔柱を有する地下式窖窯で、煙道部から焼成室の一部と、分焔柱付近の天井も完存する。床面には最終操業時の焼台が原位置を保った状態で検出できた、残り具合の良好な調査事例となった。焼成室における焼成回数は、厳密には明らかにできなかったが、床面の数が1面であることから1回以上であることが調査で判明した。

床面の下層には、この地域の当該期の窯に通例 の、いわゆる床面下施設が構築されている。変形 したり破損した山茶碗が、高台を上に向けた状態 で敷き詰められている。また、第4章でも述べた が、床面下施設の構築時期については二通りの解 釈が存在する。一つ目は、窯の掘削から床面下施 設の構築までを一連の作業として考える解釈。二 つ目は、操業当初から構築されたのではなく、何 らかの事情により途中で構築されたという解釈。 解釈によっては、出土した土器の位置づけにも影 響があるため、慎重に扱うべき問題である。さら に焼成回数にも関わる問題であり、この床面下施 設の位置づけによって窯の評価も変わってくるこ とになる。本報告では、一連の作業の中での整備 という案をとることとするが、作り替えという可 能性も提示しておきたい。

窯の操業を終える要因としては、焼成室天井の 崩壊が推定される。床面焼台の上部には破損度合 いが少ないものの、焼成不良の山茶碗が崩落した 天井壁とともに多く出土した。焼成時に何らかの 事情により天井が崩れたことが、操業中止の要因 になったと考えられる。その後、一部に残る天井 と空間が炭焼窯として再利用された可能性が高い ことも判明した。その際に崩落した窯壁を分焔 柱付近に盛り上げていることから、焼成室中央 部から煙道部にかけてが炭焼窯の範囲と考えた。 SY01と炭焼窯 SX03とでは、出土遺物の年代差がほとんどなく、放射性炭素年代測定 (AMS 法)の結果からも大きな年代差は認めらないことから、窯の操業中止後ほどなくして炭焼窯として再利用された可能性が高いものと考えられる。

燃焼室では炭化物層が2枚認められ、被熱した 基盤層も含めると、少なくとも3回以上の焼成が 行なわれたことを示している。ほかの調査事例同 様、燃焼室天井は検出されなかった。壁面に対し て明確な補修痕跡は確認できなかった。また、加 工時の工具痕なども確認できなかった。

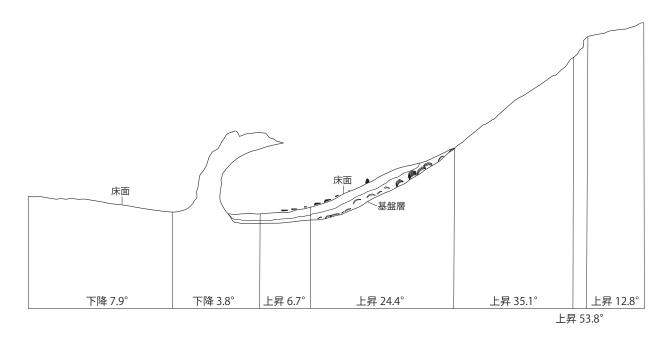
床面の傾斜角度は、第43図に示すとおりである。第4章でも説明したが、焚口から分焔柱に向けて下降し、分焔柱を越えて焼成室内に入る位置で上昇に切り替わる。焼台が設置されている範囲は、分焔柱基部から1m付近までゆるやかに上昇するが、この地点からは徐々に傾斜角度が強くなる。さらにダンパー付近では53.8°と急傾斜となる。

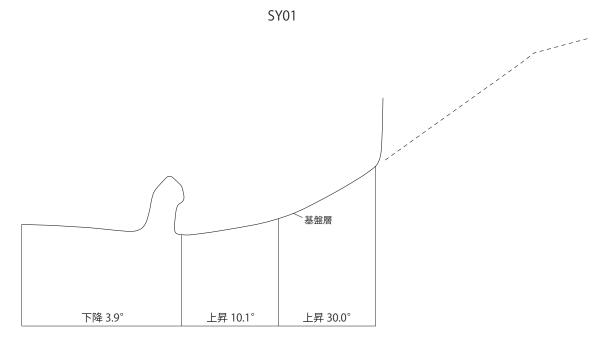
SX02 は、構築途中の窯ではあるが、ここで SY01 の床面角度と比較する。焚口付近から分焔 柱を超えて焼成室内に入ったところまではゆるや かに下降する。この地点から調査できた範囲まで は上昇するが、分焔柱基部から 1.64 mの地点から奥は角度が 30°と強くなる。焼成室後半部から 煙道部にかけては構築されていなかったため、調査で判明したのはこの範囲までであるが、ここまでの断面形状は細かな差異は認められるものの、SY01 の断面と類似する。

焼成室内や燃焼室、前庭部で検出された土坑群など、多くの遺物が出土している。これらの出土遺物は山茶碗と小皿が多くを占め、小碗なども一定量みられた。少量であるが短頸壺や片口鉢も出土している。これらの土器群は後述するように、おおむね藤澤編年の第5型式古段階から新段階、中野編年の第1段階3型式~4型式に該当し、出土地点・層位間で大きな時期差は認められない。

SY01 と SX02 について

SY01 の西側で見つかった窯跡状遺構とした SX02 は、構築途中に天井部の崩壊により放棄さ





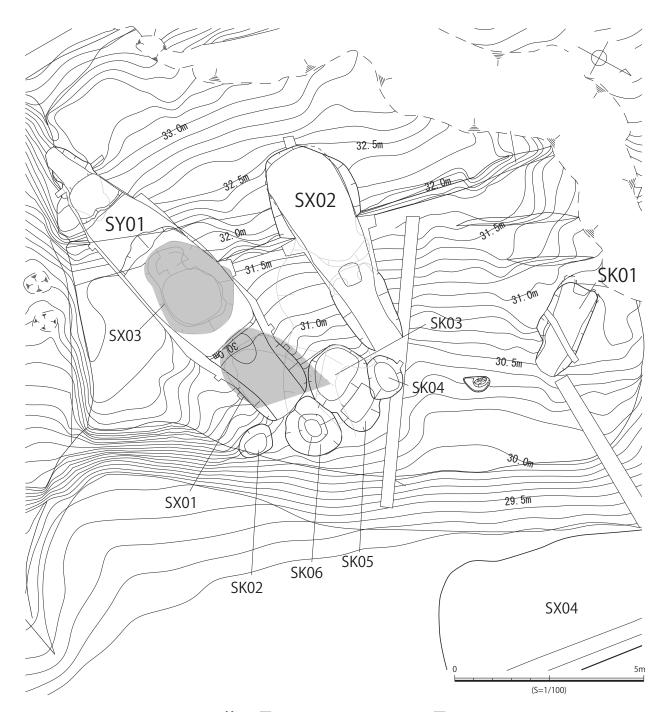
第 43 図 SY01・SX02 床面角度断面模式図

SX02

れたと思われる遺構である。このような構築途中の窯の事例としてはこれまで数例が調査されている。ここでは他の調査例もふまえながら、SXO2と SYO1 との関係について考察する。

SX02 は、第4章でも述べたように、平面プランを検出した際にはにぶい黄橙色砂(上層)が蛇行するように厚く堆積しており、これを取り除いていくうちに、遺構本来の形状である長方形プラ

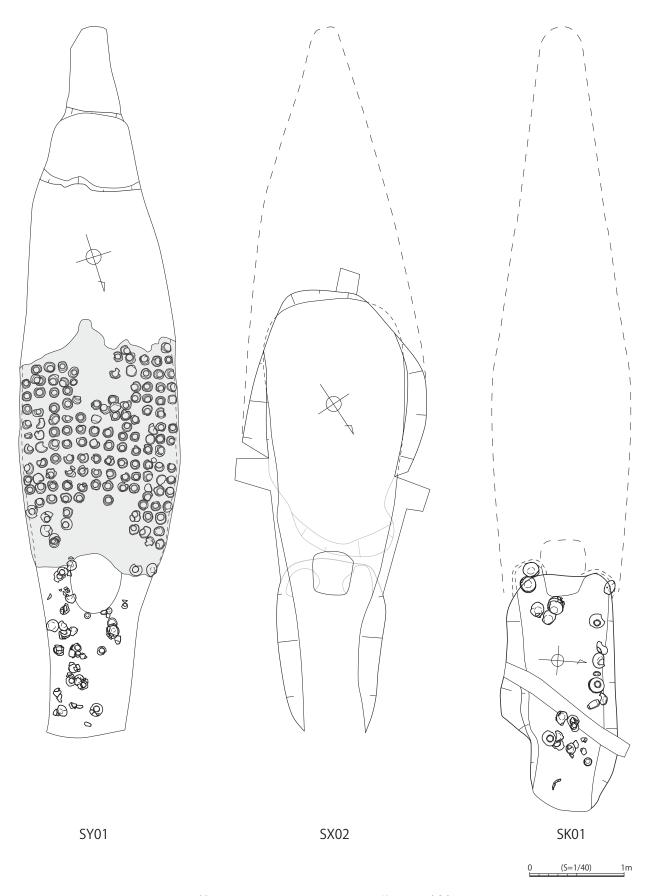
ンが見えるようになった。先述の砂は蛇行する自然流路に伴う堆積として当初認識していたが、この段階に至り人為的な遺構の可能性が浮上した。 SX02の上部を覆う砂は、隣の SY01 上面には認められなかった。この砂は、SX02の最終的な埋没時の堆積土と認識しており、基本的には均一な堆積で、SX02下層の堆積に見られるような基盤層のブロック土などは見られず、人為的な埋め戻



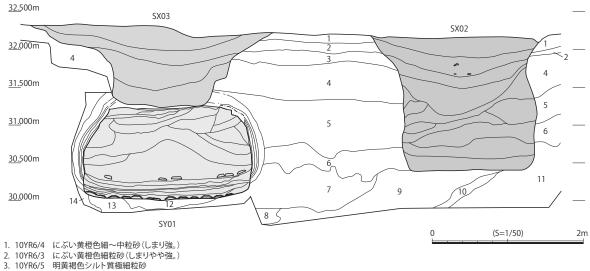
第 44 図 SY01・SX02・SK01 平面図

しを想定できる堆積ではない。このことから天井 崩落後も整地されることなく放置されたものと考 えられ、その後南西部の高位置から流れ込んだと 見られるこの砂により埋没している。この点から は SY01 との直接的な前後関係を示す証拠は得ら れなかったが、この砂から融着する山茶碗や小皿 などが出土している。これらは、窯跡出土品に特 徴的な遺物であり、隣接する SY01 の製品や不良 品などと類似する。出土遺物の年代も SY01 と同 時期であり、SX02上層にこれらの遺物が混入した可能性が高い。あるいは、今回の調査で明らかにできなかった未知の窯の製品である可能性も考えられるが、これについては推定の域を出るものではなく、ここではSX02上層の遺物はSY01で焼成されたものとみて、SX02の埋没をSY01よりも遅れる可能性が高いものと考えている。

一方で、SY01 と SX02 は切り合い関係もなく、 層位的・山茶碗の型式学的見解からは、厳密な前



第 45 図 SY01・SX02・SK01 復元図(案)



- 7.5YR5/6 明褐色シルト質極細粒砂(しまり強。)
- 5. 10YR5/8 黄褐色シルト質極細粒砂(しまりやや強。)
- 黄褐色シルト質極細粒砂(しまりやや強。) 6. 10YR5/6
- 7. 2.5Y7/6 明黄褐色粘土(しまり強。帯状の鉄分が層状に認められる。)
- 8. 10YR8/2 灰白色粘土と10YR5/8 黄褐色粘土の混合土(しまり強。)
- 黄褐色シルト質極細粒砂(10YR6/4 にぶい黄橙色シルト質極細粒砂を含む。しまり強。) 9. 10YR5/6
- 明黄褐色粘土(しまり強。)
- 灰黄色粘土(層の上位は鉄分の沈着により変色。また層の中位に鉄分沈着層(滞水した跡 7.5YR6/6 橙色)が認められる。) 明黄褐色粘土質シルト(帯状の鉄分を多く含む。しまり強。)
- 11. 2.5Y7/2 12. 10YR6/6
- 灰黄色粘土(しまり強。)
- 14. 10YR6/8 明黄褐色シルト質極細粒砂(帯状の鉄分を少量含む。しまりやや強。)
- 15. 10YR7/3 にぶい黄褐色粘土(帯状の鉄分を少量含む。しまり強。)

第 46 図 SY01・SX02・SX03 断面模式図

後関係は不明と言わざるを得ない。今回の調査で 操業を確認できた窯は、この SY01 以外に SY01 天井崩落後に再利用された SX03 が認められるの みである。SY01 と同時期に操業した窯は、調査 では明らかにすることができなかったが、大規模 に削平された調査区北西部や、SY01の東部に存 在したのかもしれない。いずれにせよ推定の域を 出るものではなく、現時点では SY01 以外に操業 した窯は見つかっていない。

このような構築途中の窯の調査事例としては、 本窯に近い名古屋市緑区のNA324号窯跡や NN323 号窯跡で挙げられる⁽¹⁾。

NA324号窯跡は窯体が5基調査されており、 それ以外に未完成窯体が2基検出されている。こ のうちの一つの窯体の左脇で、焚口から焼成室中 央まで掘削された未完成窯体が、さらにその東側 9mの位置にも分焔孔掘削開始時に廃棄された未 完成窯体が検出されている。操業の順序としては、 未完成窯体が最も古く、出土した山茶碗は第4型 式古段階に相当し、本窯に比べやや古く位置づけ られる。

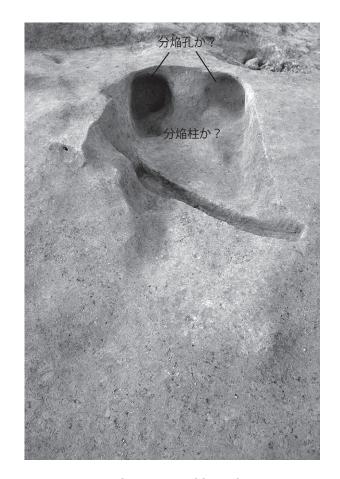


写真 8 SK01 (東から)

同じく NA323 号窯跡においても 6 基の窯体と 2 基の未完成窯体が調査されている。このうちの 1 基は燃焼室から分焔孔掘削途中まで及ぶもので、あと 1 基は焼成室のみが残存していたものである。

このように積極的な証拠は示すことができなかったが、構築順序としては当初 SX02 の構築を開始したものの、構築途中で天井が崩落し、中断せざるを得なかった。そこで、隣に新たな窯の構築(SY01)を始めるに至った。あくまで推定ではあるが、このような構築順をここでは考えた。

次に SX02 の天井が崩落した理由について考え てみたい。SX02の掘削された基盤層は、第46 図に示すとおりである。図からは隣の SY01 と共 通する基盤層に対して掘削していることが明らか である。しかしながら SX02 の西側と東側で、堆 積状況が若干相違が認められる。1~6層までは 基本的に水平堆積であるが、7層以下は西から東 へと傾斜をもっていることがわかる。この傾斜が どこまで連続するかどうかは SY01 の東側の記録 を取れなかったため直接的な比較はできないが、 SY01 壁面及び床面の断ち割りを行なった際の状 況からすれば、東から西へとやや傾斜をもつよう である。少なくとも反対方向の傾斜は認められな かった。つまり、SXO2 は西から東へゆるやかに 傾斜する位置に掘削されているものと考えられ る。上層部分は水はけが良かったが、掘削面の下 部はしまりの強い粘土層であり、調査中もこの地 点は水はけが悪かった。あえて指摘するならば、 基盤層の微妙な違いが明暗を分けた可能性が考え られる。

SK01 について

SK01 は調査区北西部、SX02 の北側 4 mの位置で検出した長方形を呈する土坑である。SK01 についてであるが、第4章でも述べたとおり、その性格については不明である。ここでは SK01 の性格について考えてみたい。

遺構は東西方向に長軸をおく長方形プランを呈するもので、遺構の底面はほぼ平坦である。第4章でも述べたとおり、埋土は均一な堆積で自然に

埋没したとみられる。また埋土はSX02と共通し、 ほぼ同時期に埋没する可能性が高い。

遺構の規模は長さ 2.48 m、幅 1.21 m、深さは 0.46 mをはかる。平面プラン検出時に確認した西辺ラインを越えて奥へと埋土がつづき、北西隅と南西隅がオーバーハングする。またその位置に山茶碗が置かれていた。山茶碗などの土器はこの位置以外にも見られ、北壁に沿って並ぶ。土器は焼成不良品が多いことも特筆され、無造作に投棄されたようにはみられない。一方平面プランや西辺両隅のオーバーハングされた形状は、第 45 図のようにあたかも窯の燃焼室から分焔柱にかけてのようである。

先に述べた構築途中の窯跡状遺構 SX02 の、さらに前段階のような状態にも見える。このような形状から、この遺構も構築途中の窯である可能性も想定できるかもしれない。SX02 について先に未完成窯体の可能性を考えたが、SK01 のような状態で見つかった同様の例が、先述の NA323 号窯跡でも調査されており^②、ここでは SX02 と同様、構築途中の窯の可能性を考えておきたい。

SX03 について

つぎに炭焼窯と認識した SX03 について考えて みたい。SX03 は SY01 焼成室の天井が崩落した 後に、再利用された可能性のある炭焼窯と考えて いる。筆者の認識不足から、詳細な記録を取るこ とができなかったが、遺構の規模は SY01 焼成室 内に収まるものであり、SY01 焼成室の幅を超え るものではないことは確かである。天井の崩れた 窯体を基本的には再利用しているものと見られる が、補修を加えている可能性も否定できない。平 面的な記録としてはこれ以上の情報を得ることが できなかったが、堆積状況については断面記録か ら考えることが可能である。

SY01 焼成室内に設定した縦断面図(第14図)に示しているが、SX03 に関連すると考えられる 堆積としては、焼成室内中央部から煙道部に向かって下降する厚さ5~10cmの炭化物層(12~29層)である。炭化物層は複数枚認められ、細片化した炭化材が多く含まれていた。恐らく焼

成の際に掻き出されたもので、SY01 焼成室内に 平面的に広がる。炭化物層それぞれの面は特に硬 化したり、あるいは被熱するなど床面を想定でき る要素は認められず、床面の面数については不明 である。SY01 焼成室の床面自体が削り込まれて おり、床面下施設の山茶碗が露出する部分もみら れたことから、SY01 焼成室床面をそのまま炭焼 窯の床面として使用した可能性も考えられる。

炭化物層から出土した遺物は少なく、機能して いた詳細な時期については分からなかった。機能 停止後に炭化物層上面に堆積した流入土からは、 少量ながら遺物が出土している。第36図の82 は碗 A1 類である。この土器は SY01 出土のもの と時期差が認められず、ほぼ同時期のものである。 また炭化物の分析からは、SXO3の方がやや時期 が下るという結果が出ており、SY01との前後関 係は矛盾しない。恐らく SY01 焼成室の天井が崩 落後、間をおかずに炭焼窯としての利用がなされ たものと考えられる。山茶碗窯を炭焼窯として再 利用する事例はいくらか見つかっており③、ほか の事例でも山茶碗窯と炭焼窯の利用時期に差は認 められないことが多い。このことからも再利用し たのは SY01 窯の山茶碗工人、あるいは関係者で ある可能性が高いものと考えられる。山茶碗窯を 再利用できることを慣例的に知識として有してい る可能性が高いこと、天井崩落という情報もダイ レクトに知りえるのは山茶碗工人であるからであ る。

出土遺物について

本報告では時間的制約から出土遺物すべての詳細な検討はなしえなかったが、窯の年代を考えるために必要な分析にのみに焦点を絞ったことを断っておく。

本窯の所在する大府市は猿投山西南麓古窯跡群と知多古窯址群の境界に位置する。尾張型山茶碗編年に関しては猿投山西南麓古窯跡群では藤澤良祐氏が⁽⁴⁾、知多古窯址群では中野晴久氏が⁽⁵⁾それぞれ整備されている。上入道古窯の立地からはいずれに属するか明らかにしえず、本報告では藤澤、中野両氏の編年区分を示すこととし、時間的位置

づけを行なう。

出土した山茶碗類は碗と小皿が主体をなし、小碗が少量認められる。分類の詳細は後述するが、碗は器高が低く扁平化しているものの、体部が曲線的なもの(碗 A1・A2類)が多く認められた。一方、体部が直線的になるもの(碗 B1・B2類)も量的には少ないが認められた。小皿は、底部の突出するもの(小皿 C・D類)が認められる一方、体部が直線的なもの(小皿 A類)が一定量を占める。

このようにやや古い要素を残しつつ、新しい要素も含むことから、おおむね藤澤編年の5型式古段階から新段階、中野編年の第1段階3型式~4型式(12世紀末~13世紀初頭)に該当するものと推定される。

次に山茶碗類の分類について説明を加えると、山茶碗の形態的特徴としては曲線的な体部から外反する口縁部に至るもの(A2類)と、外反せずそのまま口縁部に至るもの(A1類)、直線的な体部から外反する口縁部に至るもの(B2類)と、外反せずそのまま口縁部に至るもの(B1類)に大別される。

これらは従来、曲線的な体部(A1・A2類)の ものが先行し、直線的な体部(B1・B2)を有す るものへと変化すると見られるが、今回の調査に おいては同一層内に混在することが判明した。

小皿・小碗については本報告では小皿をA~D類の4類に、小碗をA・B類に細分した。型式学的には小碗が古く、小皿が後出することが明らかである。猿投窯においては第4型式新段階まで小碗が認められるが、次の第5型式古段階では小碗が姿を消し、小皿が出現すると認識されており、これらの器種は混在しないという。一方、知多窯では小碗と小皿は混在することが指摘されている。碗と小皿の位置づけが猿投窯と知多窯では認識が異なるが、小碗と小皿の中間形態とでも言えるものが、本報告で分類した小皿C・D類である。小皿C・Dは突出する底部を有するものである。ここでは口縁部まで直線的に立ち上がるものをC類、曲線的に立ち上がり、口縁部で外反する

ものを D 類と細分した。高台の内部が開いているか詰まっているかの違いで、外観的には小碗 A・B 類と類似する。本窯においては、これら小碗と小皿は層位的に区別ができず、同一層内から出土している。したがって、本窯においてはこれらの間に時期差は見いだすことはできない。その要素を重視すれば、本窯は知多窯の特徴を備えているとも見える。

本窯では山茶碗・小皿を主体的に生産するが、 小碗の他に少量ながら SXO2・SXO3・表土から 片口鉢・短頸壺が出土している。SY01で焼成さ れたかどうかは不明であるが、他に操業した窯が なく、現状ではSY01に属するものと考えている。 基本的な生産品としては山茶碗・小皿であるが、 窯と周辺に残された資料からはこのような器種も 生産していた可能性は十分に考えられる。同じ大 府市内で調査された鴨池東古窯では片口鉢が4個 体分出土している(で)。また、別岨古窯群でも同じ く片口鉢が少量ながら出土している(8)。このよう に数量としては少ないながらも、山茶碗・小皿以 外の器種を生産する窯が周辺に存在しているのも 事実である。本窯もあくまで焼成に失敗し現地に 残されたものが調査できたにすぎず、製品として 流通している可能性も十分に考えられる。今回の 調査ではその可能性を指摘するにとどめ、今後本 窯周辺の窯跡の調査が行なわれ、その様相が明ら かになれば生産される器種構成についてもさらに 深い議論が可能になると考えられる。

また今回の調査においては灰原については検出できなかった。窯体の立地する位置から北側は谷状を呈しており、さらに耕作により雛段状の段差が認められる。本調査に先立って行なわれた確認調査においても灰原相当の遺構・遺物は見つかっておらず、地形的に見てすでに削平を受けており、滅失している可能性が高いものと考えられる。灰原が検出できていれば、焼成回数などについても判明したであろうが、今回の調査では明らかにできなかった。

今回の調査では工房に関わる遺構に関しては、 明らかにすることができなかった。窯体の北西側 にわずかな平坦面が認められ、ピット状の穴を調査したが、ロクロピットと認定できる証拠を得ることができなかった。

出土した炭化材については第5章で自然科学分 析の結果を考察している。それによると燃料材に 使用された樹種が SY01 燃焼室の流入土、前庭部 の土坑群などから出土したものはマツ属複維管束 亜属が多かった。一方、床面下施設に伴う炭化材 はクヌギ節とコナラ節が多い。また燃焼室壁面に 出土した構築材と思われる試料はサクラ属であっ た。第5章でも指摘されるように、構築材と燃料 材も選択的に区別して使用しており、使用時期も 床面下施設構築時に使用された材とそれ以外のも の(層位的に後出する)では樹種が明確に分かれ ることも興味深い。これについて操業前期にはク ヌギ節及びコナラ節を選択して伐採し、操業後期 には、クヌギ節やコナラ節が枯渇したためにマツ 属複維管東亜属を利用した可能性や、操業前期と 操業後期で何らかの要因により燃料材の樹種を変 えて焼成を行なっていたなどの可能性を指摘して いる。使用燃料材の種別の変化が窯体構造の変化 などと何らかの関わりがあるかについては、調査 で明らかにすることはできなかったが、興味深い 分析結果であった。

構築材の可能性のあるサクラ属についてであるが、大府市域において検出されたのは本窯が初めてである。他地域で普遍的に用いられるかどうか調査できなかったが、第5章でも指摘されるように用材としては堅硬な材質であり、構築材には適しているという。今後の調査において使用例が増加する可能性を指摘しておきたい。

(註)

(1) NA324 号窯跡・NA323 号窯跡はともに猿投窯鳴海地区有松支郡に属する。報告書の原点に当たることができなかったが、以下の文献に引用されたものを挙げておく。

一方、瀬戸窯においても広久手7・17号窯跡・広久手13・14号窯跡・ 小田妻2・9号窯跡に未完成窯体の調査事例がある。瀬戸窯の事例は 第6型式から第7型式に属し、本窯よりも年代の下るものであるが、 操業順の判明するものでは、操業の最初段階に構築されるようである。 『愛知県史』別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系 愛知県史編さん委員会 2007年

- (2) 註(1)の文献に同じ。
- (3) 窯体の再利用として炭焼窯を想定される事例としてはいくつかのものがある。本窯と同じ知多半島に所在する夏敷古窯群(常滑市)では、同じように天井崩落土の上位に炭化物層が堆積しており、さらにその上位に煙道部側の天井崩落土が堆積していた。煙道部側の天井が維持している段階で炭焼窯として再利用された、とされる。

早野浩二ほか『夏敷古窯群・蛇廻間古窯群』(『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』第 152 集)財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター 2007 年

大府市内でも鴨池東古窯で同様の例が認められる。3基の窯跡のうち2基に炭焼窯としての利用を想定している。このうちの1基は山茶碗窯として機能しなくなった後に一部を炭焼遺構として再利用している。もうひとつは天井崩落の痕跡がほぼみられず、初段階における炭化物層が燃焼室まで達していることから、天井がほぼ遺存した状態、つまり山茶碗窯としての機能を失っていない状態で炭焼遺構として転用された可能性を考えられている。

大杉規之ほか『鴨池東古窯-宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告-』ナカシャクリエイティブ株式会社 2015 年

- (4) 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994年
- 藤澤良祐「第1章 総論」『愛知県史』別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系 愛知県史編さん委員会 2007年
- (5) 中野晴久『中世常滑窯の研究』愛知学院大学学位請求論文 2013年

中野晴久「常滑窯」『愛知県史』別編 窯業3 中世・近世 常滑系 愛知県史編さん委員会 2012 年

中野晴久「知多半島北部の山茶碗窯」『鴨池東古窯-宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告-』ナカシャクリエイティブ株式会社2015年

- (6) 愛知学院大学教授藤澤良祐氏よりご教示。
- (7) 大杉規之ほか『鴨池東古窯-宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調 査報告-』ナカシャクリエイティブ株式会社 2015年
- (8) 池本正明ほか『別岨古窯群』(『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』第 187 集)公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター 2013 年

(引用・参考文献)

『大府市誌』資料編 考古 大府市市誌編さん刊行委員会 1991 年 松田訓ほか『円通寺古墓・NA335 号窯 I・Ⅱ』(『愛知県埋蔵文化財 センター調査報告書』第75集)財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1998 年

早野浩二ほか『夏敷古窯群・蛇廻間古窯群』(『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』第 152 集)財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター 2007 年

『愛知県史』別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系 愛知県史編さん委 員会 2007年

『愛知県史』別編 窯業3 中世・近世 常滑系 愛知県史編さん委 昌会 2012年

池本正明ほか『別岨古窯群』(『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』 第 187 集)公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋 蔵文化財センター 2013 年

大杉規之ほか『鴨池東古窯-宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告-』ナカシャクリエイティブ株式会社 2015 年

杉山敬亮ほか『川池西古窯-集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

報告-』株式会社二友組 2017 年 森川昌和ほか『石亀戸古窯群 中京女子大学正門整備地埋蔵文化財発

掘調查報告』至学館大学 2018 年

写真図版



1 調査区全景(垂直写真 北東上空から)



2 SY01・SX02 全景(垂直写真 北東上空から)



1 SY01 窯体検出状況(北から)



2 SY01 床面検出状況(北から)



1 SY01 煙道部床面検出状況(北東から)



2 SY01 煙道部縦断面(北東から)



3 SY01 煙道部横断面(北から)



4 SY01 煙道部床面検出状況(東から)



5 SY01 煙道部天井(北から)



1 SY01 煙道部断面(北から)



2 SY01 煙道部床面断ち割り(北東から)



3 SY01 煙道部床面断ち割り(北から)



4 SY01 煙道部床面断ち割り(北東から)



5 SY01 煙道部床面断ち割り(北東から)



1 SY01 焼成室縦断面(北東から)



2 SY01 焼成室縦断面(北東から)



3 SY01 焼成室縦断面(北東から)



4 SY01 焼成室縦断面(北東から)



5 SY01 焼成室横断面(北から)



1 SY01 焼成室床面検出状況(南東から)



2 SY01 焼成室床面検出状況(北西から)







2 SY01 焼成室床面検出状況(北から)



3 SY01 分焔柱付近床面遺物出土状況(北から)



4 SY01 分焔柱付近床面遺物出土状況(北から)



5 SY01 分焔柱付近の状況(南から 手前が焼成室)



1 SY01 焼成室横断面(北から 床面構築層)



2 SY01 焼成室縦断面(北東から 床面構築層)



3 SY01 炭化物層検出状況(北から)



4 SY01 炭化物層検出状況(南東から)



5 SY01 炭化物層横断面(北から)



6 SY01 炭化物層横断面(北から)



7 SY01 炭化物層縦断面(北東から)



8 SY01 炭化物層縦断面(北東から)



1 SY01 床面下施設検出状況(北から)



2 SY01 床面下施設検出状況(北から)



1 SY01 床面下施設検出状況(北から 近景)



2 SY01 床面下施設と床面の関係(南東から)



3 SY01 床面下炭化物出土状況(東から)



4 SY01 床面下炭化物出土状況(西から)



5 SY01 完掘状況 (北から)



1 SY01 煙道部から焼成室床面断ち割り(北から)



2 SY01 煙道部から焼成室床面断ち割り(北東から)



3 SY01 焼成室壁面断ち割り(北西から)



4 SY01 焼成室壁面断ち割り(北東から)



5 SY01 焼成室床面断ち割り(北西から)



6 SY01 焼成室床面断ち割り(北東から)



7 SY01 焼成室床面断ち割り(北東から)



8 SY01 分焔柱付近断ち割り(東から)



1 SY01 通焔孔断面(北から)



2 SY01 分焔柱 (北から)



1 SY01 燃焼室断面(北から 奥が分焔柱)



2 SY01 燃焼室断面(北東から)



1 SY01 燃焼室から前庭部炭化物層上面遺物出土状況(北から)



2 SY01 燃焼室床面遺物出土状況(西から)



1 SY01 分焔柱付近壁面断ち割り(南東から)



2 SY01 分焔柱付近壁面断ち割り(南西から)



3 SY01 燃焼室壁面・床面断ち割り(北西から)



4 SY01 燃焼室壁面・床面断ち割り(北東から)



5 SY01 燃焼室床面断ち割り(北東から)



6 SY01 燃焼室床面断ち割り(北から)



1 SY01壁面(北東から)



2 SY01壁面(南西から)



3 SY01壁面(北西から)



4 SY01壁面(南東から)



1 SY01 前庭部土坑群検出状況(北から)



1 SY01 前庭部土坑群完掘状況(北西から)



1 SK06 断面(北から)



2 SK06 断面(東から)



3 SK05 断面(北東から)



4 SKO4 断面(北東から)



5 SK03 断面(東から)



6 SK03 断面(北から)



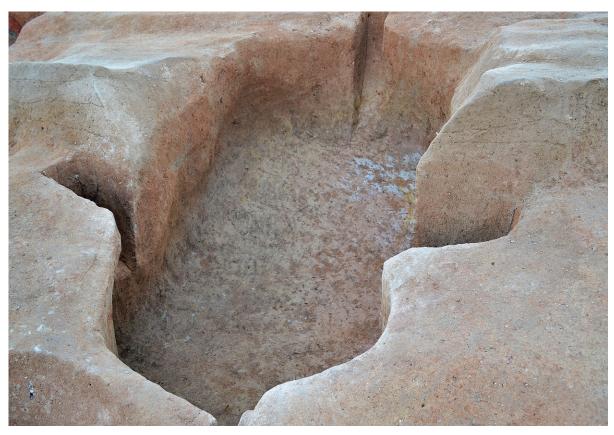
7 SK05 断面(東から)



8 SK04・SK05 断面(北西から)



1 SX02 完掘状況(北から)



2 SX02 焼成室完掘状況(北西から)



1 SX02 断面(北東から)



2 SX02 断面(北から)



1 SX02 通焔孔断面(北から)



2 SX02 分焔柱(北西から)



3 SX02 分焔柱 (南から)



4 SX02 断面(北東から)



5 SX02 断面(北東から)



1 SX02 通焔孔断面(南東から)



2 SX02 通焔孔断面(北西から)



3 SX03 断面(東から)



4 SX03 断面(東から)



5 SX03 炭化物層検出状況(西から)



6 SX03 断面(北東から)



7 SX03 炭化物層検出状況(北から)



8 SX03 断面(南から)



1 SX01 遺物出土状況(北西から)



2 SX01 断面(北西から)



1 SK01 遺物出土状況(東から)



2 SK01 遺物出土状況(南から)



3 SK01 遺物出土状況(南東から)



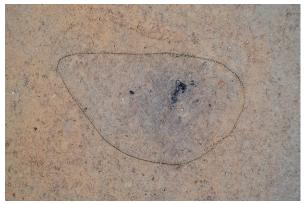
4 SK01 遺物出土状況(南東から)



5 SK01 断面(北西から)



1 SK01 完掘状況(東から)



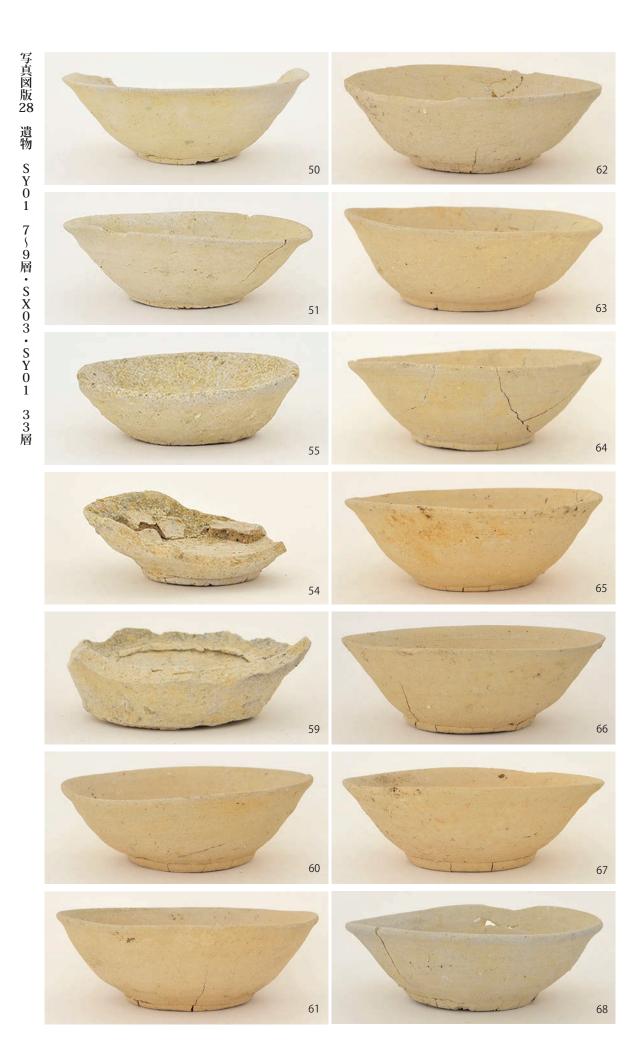
2 SP01 検出状況 (北東から)

3 SP01 断面(北東から)

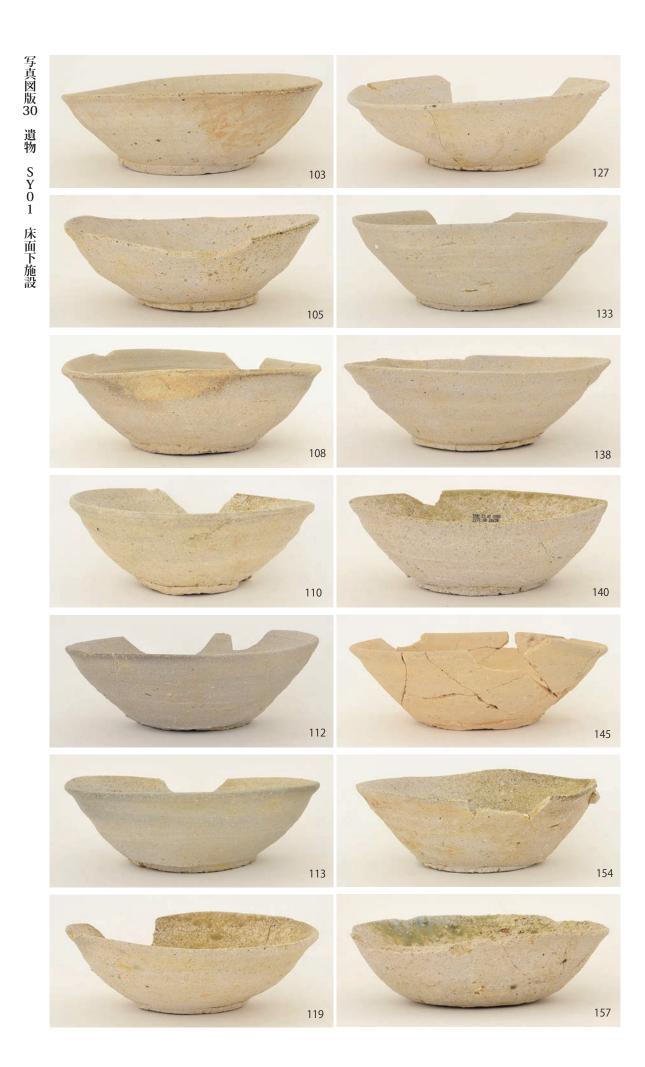


4 調査区北東壁断面(南から)

写真図版27 遺物 SYO1 燃焼室床面・SXO1





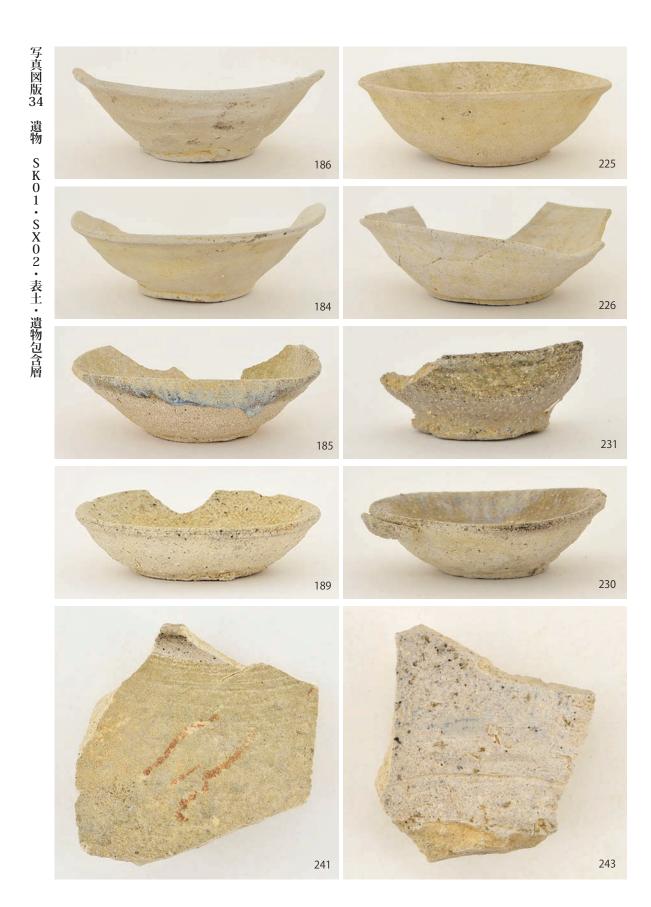


写真図版31

遺物 SY01

床面下施設

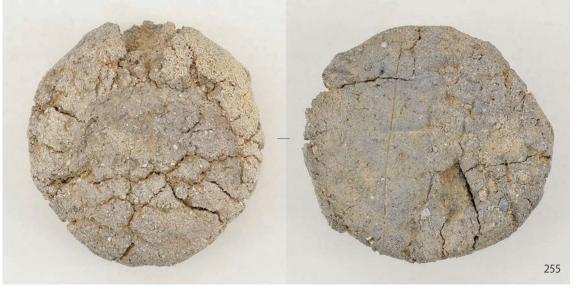






写真図版35

遺物 SYO1 7層・SYO1 流入土・SYO1 焼成室床面・SXO1・SXO2



写真図版36 遺物 SY01 焼成室床面 焼台



報告書抄録

				112						
ふりがな	かみ	かみにゅうどうこよう								
書 名	上入	上入道古窯								
副 書 名	大府	大府市共和町上入道地内における工場建設に伴う発掘調査報告								
シリーズ名	名									
シリーズ番号										
編著者名	西村	西村匡広(編)、田中城久、パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ、藤根 久、小林克也								
編集機関	株式	株式会社アコード名古屋営業所								
所 在 地	愛知	愛知県弥富市平島町大脇 12-3-202 TEL0567-65-6082								
発行年月日 平成30年8月1日										
ふりがな	ふりがな ふりが		コ・	ード	北緯	東経	邓州	引 発掘面積	発掘原因	
所収遺跡名		在地	市町村	遺跡番号] コレ水辛	· 宋莊	光加州	到 光掘風傾 ㎡		
かみにゅうどうこよう あいち		おおぶしきょうわ	232238	440061	35° 02′ 39″	135° 55′ 48″	2017111	5 1,200	工場建設	
上入道古窯 愛知県		ゅうどうちない 大店市					~			
		上入道地内					2018022	8		
所収遺跡名	種別	ナ <i>ナ</i> ₂	<u></u> 時代	<u></u>	<u> </u> な遺構	主な遺	H-hm	/ 	FTE F	
								特記事項		
上入道古窯	窯跡	半安地	時代末 窯体			山茶碗、		床面下施設を伴う窯		
		~ 举 会吐			代遺構 1 基	小碗、焼台		体を1基検出。焼台		
			代初頭 炭焼系 土坑 6						が原位置を保つ。	
					· 1 基			窯体を再利用した炭 焼窯を検出。		
					1至			NL杰'€ 7次口。 		
		/D 1.2 > 0	101 det 0 3		4.3. 3. 3. IV.——	1.1 was I ddewd			~h.) . I	
	平安時代末から鎌倉時代初頭に操業したと推定される山茶碗専焼窯を調査。山茶碗と小皿を主体として生産した窯跡で、焼成室床面では焼台が原位置を保った状態で検出するなど保存状態が良好な窯跡である。床面下では山茶碗が伏せた状態で据え置かれた、いわゆる									
床面下施設を検出した。 窯体の天井崩落後に再利用された炭焼窯を上部で検出した。 構築途中の窯(窯跡状遺構)を1基検出した。構築途中に天井の崩落により構築を中断し 要 約 ており、その後放棄されたと思われる遺構である。										
									た由紙1	
									で 上 的 ()	

平成 30 年 7 月 26 日 印刷 平成 30 年 8 月 1 日 発行

上入道古窯

一大府市共和町上入道地内における工場建設に伴う発掘調査報告一

編集・発行 株式会社アコード名古屋営業所 〒498-0021 愛知県弥富市平島町大脇 12-3-202 TEL0567-65-6082

監 修 大府市教育委員会

〒474-8701 愛知県大府市中央町 5 丁目 70 番地

 $\mathtt{TEL0562} \mathtt{-} 46 \mathtt{-} 3332$

大府市歴史民俗資料館

〒474-0026 愛知県大府市桃山町 5 丁目 180 番地の 1

 $\mathtt{TEL0562}\text{--}48\text{--}1809$

印 刷 株式会社明新社

〒630-8141 奈良県奈良市南京終町 3 丁目 464 番地 TEL0742-63-0661